

●前臺灣總督樺山伯爵の題辭御願申置候處印刷の間に合兼候間追而  
印刷の上御送附可申上候

本書載する處の題辭は臺灣總督府事務官民政局郵便電信部長香國  
土居通豫君の書なり



飛塵境

字

字





家



西由八五夏

長谷川宗清

香園





長谷川鏡次君去秋臺灣の行あり材  
木商団体の囑に依り臺灣材木業視  
察の爲免なり數月にして京に歸り  
項日其報告書を公にせらる執て之  
を讀むに着眼精到蒐むる所のもの  
大に同地の景況を明よして頗る我  
材木業者を益するものあり聞くと同  
君再ひ今秋を期して臺灣に航し尙



清國福州附近の地を巡りて同業調査の大成を期すと想ふに其調査の結果本報告と相待て東邦材木業の幾微を聞き以て茲に我日本の新利源を加へ來るを疑はす昨廿八年以來我國力の膨張實に一倍を加ふ然らば則ち木材の用途亦今日の比に非ざる言を待たす即ち需要の急なる

所供給急あらざるべからず本報告の如き實に之に應ずるの急先鋒たりと云ふべし正名一讀欣喜に堪へす一言を書して其序に充つと云  
爾

全國實業團體會頭

明治廿九年五月

前田正名識



○自序

夫れ商業視察の任あるや外有力先輩の  
扶掖と内多年自得せる経験とに加ふる  
に豊富なる學識を以て之れか調査に當  
たらざるへかふは然らずんば焉と能く  
紛亂錯雜せる商界の實相と查察するを  
得んや不肖曩きに乏きを臺灣商業視察  
に受け舊臘渡臺し南端恒春より臺南と  
經て臺北に至り島中の漫遊を終り茲より



二  
暫く歸朝の機會を得たり在島僅々百數十  
十日此の短時日の見聞を以て詳細なる  
報告をなす己に難し况や視察の任容易  
ならざる前述の如きをや而して余や經  
験なく學識なき一介の青年にして然も  
言語不通の不便を加ふるは時恰も土匪  
蜂起人心怯々たるの期に際す彼の周密  
の用意を要する商業視察の責と盡は實  
は至難中の至難あり且や調査の材料に

三  
乏かゞざる開明の國は在ては各種の機  
關具備して統計參考等唯々意の欲する  
所恰も物を囊は探くるか如し然るは彼  
國に於ては殖産統計等に屬する書冊甚  
る稀にして偶々舊清政府の編纂等に係  
る者あるも皆迂疎鹵莽にして採て以て  
参照に資するに足らず事細大をなく之  
と目撃に取るの外は其局若くは其業に  
當る者に就きて親しく之を質問せざる



四  
或得ず而して之を質問するや答ふる所  
誤謬多く同一事件と雖も數人亦更へ反  
覆査究するに非ざれば其實を確むるこ  
とを得ず調査の難易實に天淵の差あり  
と云ふべし余の不才を以て矇昧野蠻の  
國に入り砲響創影の間此難事に當る寧  
ろ生命身軀の安全を保する尚且つ之を  
天運に任せざるべからず斷言靈語の材  
料亦至貴至重たり既に自己の意に満ざ

五  
るの項目を以て之を先輩各位に提供す  
余己に事に益なきを信じ況や之を叙す  
るに不文を以てす慚汗脊に冷きものあ  
り只其れ臺地に關する商況は今裁人の  
皆聽かんと欲する所若し萬一に資する  
ことを得ば余の任務己に盡きたり殊に  
本書は編者勉めて自己の愚案を避け見  
聞せし事々物々の状況のみを摘載し觀  
察参照は先輩諸氏各自の明考に一任す



諸氏後未業を臺灣に起さんとするの際  
考案の材料たるを得は編者の希望も既  
に足れり且臺灣の商業は支那本土と密  
接の關係を有するを以て彼の事狀を調  
査するにあらすんば到底其完全を期す  
べからす故に編者今秋更に福州厦門の  
商況を視察せんとす未だ調査半なるに  
も不係茲に第三回全國材木業者大會の  
期に際し之を諸氏に頒たんかため忽卒

六

此稿を起して小冊子となす不文更に拙  
を加ふ吾親愛畏敬する先輩の優渥なる  
愛顧を以て讀過せらるゝことを得は編  
者の榮實に至大なり

明治廿九年四月

編者 識

七



凡例

本書載スルトコロノモノハ重ニ編者自身ノ漫遊セシ各所ニ於テ見聞調査セシモノヲ掲ク而シテ其材料收集ノ重ナル諸地ハ

基隆——臺北——新竹（此間鐵道ノ便アリ）

北部 淡水（開港場） 瑞芳（砂金ヲ以テ有名ナリ）

新庄街。大崙炭。苗栗。雲林（生蕃人ト交易地）

安平。打狗（開港場）

南部 嘉義。臺南。阿公店。南仔坑。鳳山。東港。坊寮。風港。社寮。恒春

龍巖社。射摩裡社。猪塲束社（下十八社牡丹生蕃）

一 參考書トシテハ臺灣總督府殖産部并ニ各地民政支廳或ハ兵站司令部ニ於テ調査セラレタル各種報告書及殖産部ニテ篇セラレタル産業誌ニヨル



一斗量尺度并反別

升量、臺灣ノ一石ハ我五斗七升ニ當ル  
尺度、皆我曲尺ニ依ル

數量、中一担トアルハ百斤(一斤ハ百六十目ヲ以テ算ス)ニシテ我十  
六貫ニ當リ一兩ハ我十匁トス  
反別、一甲トアルハ我八反六畝二十六歩ニ當ル

目次

第壹章 緒論

○臺灣ノ名稱	一	○宗教	十五
○歴史ノ區分	二	○風俗	十五
○位置形勢	六	○言語	十八
○面積人口	七	○衣服	十九
○氣候風土	八	○食物	廿一
○人民	十三	○飲料	廿二
○教育	十四	○家屋	廿三

第貳章 商業ニ關スル事項

○商業ノ區別	三十二	○商人社界狀態	三十六
○臺灣商人一般ノ風習	三十四	○商慣習	三十七



○諸物價 四十

第參章 臺灣ノ材況

四十六丁

第一節

第二節

○內山材 四十七

○福州杉 五十九

○材木伐出方ノ概況 五十三

○稅關輸入稅率 七十八

第四章 都會及開港場

八十丁

第一節

第二節

○都會市邑 八十一

○各開港場 九十八

第五章 交通并運輸

百〇八丁

第一節

鐵道

○道路 百〇八

第三節

第二節

漁船

百十三

第六章 臺灣嶋生蕃

百十八丁

第一節

○各地生蕃探見記 百四十四

○南部生蕃編者探見記 百廿四

第三節

第二節

○生蕃各地ニ於ケル言語 百五十三

第七章 樟腦

百六十九丁

○樟腦ノ起原 百六十九

○樟腦輸出 百八十六

○樟腦產地 百七十一

○外國樟腦商人 百八十九

○樟腦伐採及製造 百七十二

○備考樟腦條例 百九十

○樟腦ニ關スル紛議 百八十二

第八章 結論

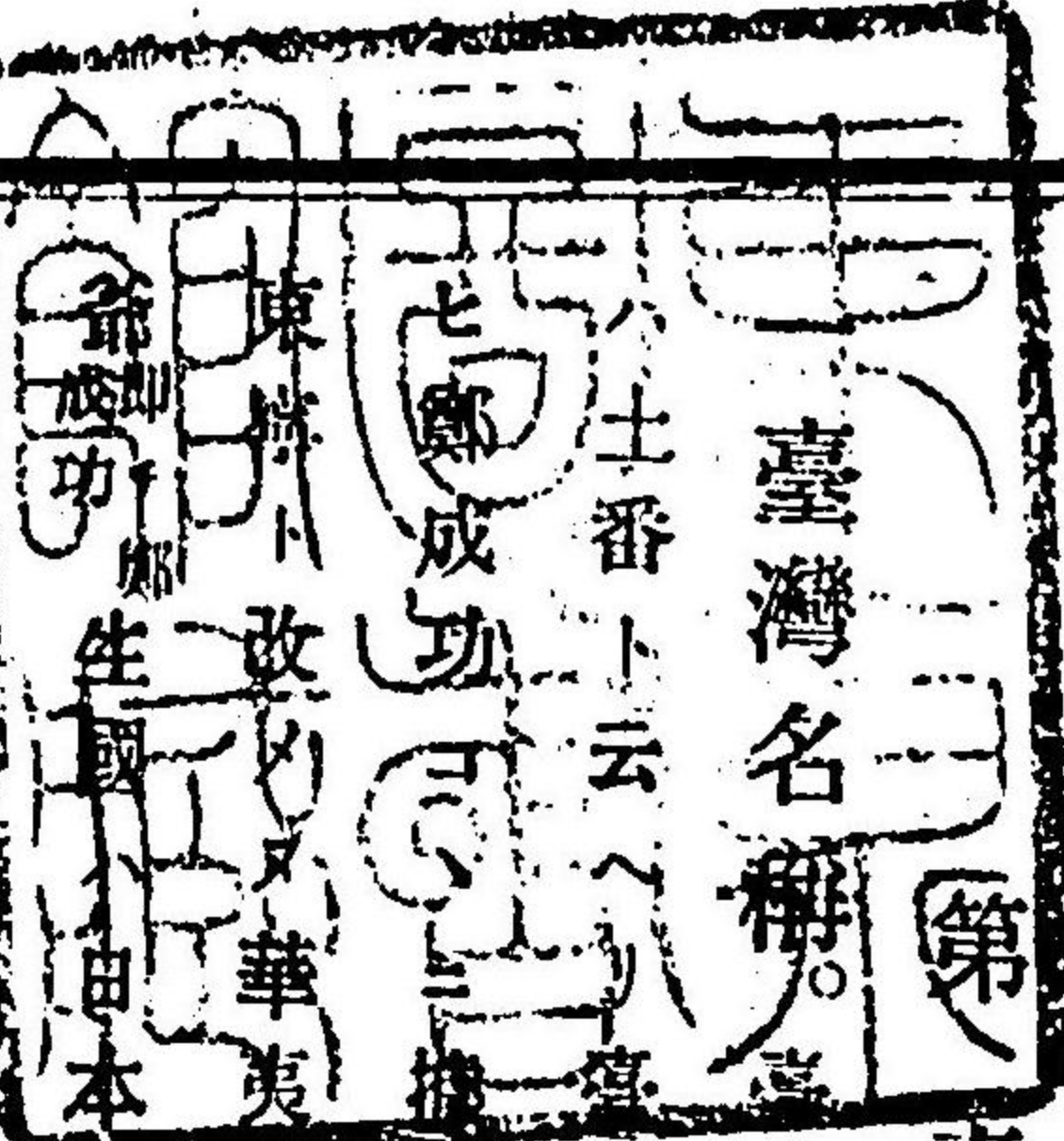
百九十四丁



臺灣誌

長谷川鏡次編

第一章 緒論



臺灣ハ古ニ所謂昆舍那國ナリ支那明ノ代ニハ東番又  
 土番ト云ヘリ鄭成功ルニ及ヒテ東都ト稱シ其ノ子鄭錦ニ至リテハ更ニ  
 東都ト改メ華夷商考ニ此國中華ノ南方ナルニ東寧ト號スル事國姓  
 爺功鄭生國ト由本ナル故ニ生國ヲ慕フノ意ニヤト云トイヘリ然レモ  
 是決シテ深キ仔細アルニアラズ唯東方ノ地タルヲ以テ斯ク呼ヒシモ  
 ノナラン我國人ハ古來此島ヲ塔伽沙古又高砂ト呼フ或ハ曰ハタ日本  
 人始メテ臺灣ニ至リ其地形ノ日本高砂浦ニ酷ク相似タルヲ以テ意ニ



之レヲ「たかさこ」ト名ツケタリト然レモ秀吉ノ臺灣ニ送レル書ニ高山ノ字ヲ用ヒタルヲ見レバ「たかさこ」ノ名必シモ高砂浦ニ出テシトモ思ハレズ今暫ク記シテ識者ノ考定ヲ待ツ

西洋人ハ別ニ稱シテ「ふをーもさ」ト云フ蓋シ葡萄牙人其ノ山紫水明ノ美ヲ觀テ遂ニ之ニ名ツクルト云フ「ふをーもさ」トハ美麗ノ意ナリ

一 歴史ノ區分。曰ハク「たかさこ」曰ハク「ふをーもさ」曰ハク東都曰ハク東寧曰ハク臺灣コレ等名稱ノ變更ヲ以テ本島沿革ノ大要ヲ知ルベシ今假リニ分テ左ノ數時代トス

一 倭寇侵畧ノ時代 「たかさこ」期

二 日蘭衝突ノ時代

三 蘭人跋扈ノ時代(ふをーもさ)期

四 鄭氏割據ノ時代(東都東寧期)

五 清國占領ノ時代

六 日本新領ノ時代

○ 倭寇侵略ノ時代。臺灣ノ歴史往古知ルベキナシ唯元龜天正以後我國人占領セシノ事跡ハ歴然掩フベカラズ彼ノ世ハ蒞菴ト亂レタル代ノ末ツカタ我カ西邊無頼ノ徒志ヲ一時ニ得サリシカ爲メ朋ヲ結ヒ黨ヲ樹テ相牽イ去リテ海賊トナリ朝鮮支那ノ海上ニ出沒シ半ハ貿易ヲ營ミ半ハ海賊ヲ業トシ至ルトコロ其ノ沿岸ヲ抄掠セシ時ニ當リテハ支那ノ東海岸ハ最モ彼等カ得意ノ伎倆ヲ振ヒタルトコロニシテ當時臺灣ハ渠等ノ根據地タリシモノ、如シ

爰ニ天正文錄ノ頃原田孫七郎ト云エルモノ性頗ル豪膽又機智ニ富ミタルモノアリ屢々南洋ニ航シ歸來豊臣秀吉ニ説クニ其ノ取ルベキヲ以テセリ之ノ途次臺灣ヲ過キ別ニ一書ヲ贈リ恩威以テ我ニ歸服セシ



メントセリサレト孫七郎遂ニ此使命ヲ如何ニセシカ事蹟今ニ傳ハラズト雖唯其書ノ今ニ存スルモノ適以テ秀吉ノ豪放ノ意氣ヲ見ルニ足ル此書今華族前田氏ニ傳ハル

○日蘭衝突ノ時代。我國ノ海賊カ東亞ノ一端ニ海上ノ權力ヲ得タルト同時慶長元和ノ交ニ又一ノ競争者ヲ生ゼリ之即チ和蘭(當時稱シテ紅毛ト云ヘリ)國ナリ當時同國ハ西班牙ノ羈絆ヲ脱シ獨立ノ旗ヲ繯スニ及ヒカチ東洋ニ伸サントシ澎湖嶋ヲ根據地トシ暫時ニシテ臺灣ヲ征服シ我商船ヲ抄掠セリ彼ノ長崎ノ豪商濱田彌兵衛カ奮テ臺灣ニ航シ一撃蘭人ノ大守ヲ擒ニシ其抄掠セラレタル財物ヲ取返シタルハ此時ノ事ナリ

○蘭人跋扈ノ時代。始メ蘭人ノ臺灣ニ來ルヤ當時我カ勢力ハ全島ヲ風靡シタリ然レモ德川政府ノ大ニ海外貿易ヲ檢束シタリシヨリ爾來

漸ク我カ商權ヲ奪ハレ漸次蘭人ノ勢力ノ下ニ支配セラル、ニ至ル  
○鄭氏割據ノ時代。慶長年間ニ至リ鄭芝龍臺南ニ根據ヲ構ヘ明ノ正朔ヲ奉シ清朝ニ抗抵セリ然ルニ後(清ノ順治年間)遂ニ清ニ降ルニ至レリ後臺灣ハ暫ク蘭人ノ有ニ歸セシカ芝龍ノ子鄭成功(即チ母ハ日本人ニシテ國姓爺ノ子ナリ)再ヒ明ノ恢復ヲ企テ福州ニ旗ヲ舉ケ連ニ浙江、爪州、蕪湖ヲ陷レ遠ク南京ニ迫リシカ不幸利ヲ失ヒ後臺灣ニ根據ヲ構ヘ兵備ヲ整ヘ益々清國ノ内地ヲ攻撃シ現今ノ安平港ニ鎮臺ヲ置キ安平鎮ト稱セリ(今尙其跡ヲ存セリ)惜イ乎其志ヲ成就スル能ハス三十九歳ヲ以テ病没セリ其子經亦兵ヲ大陸ニ放チ連リニ清國ヲ窺カイ連戰勝ヲ得タリ然レモ亦早逝其子克塽立ツニ至リ遂ニ清ニ降レリ  
○清國占領時代。清ノ康熙二十三年ニ至リ遂ニ福建省ニ隸屬シテ臺灣縣ヲ置ケリ自來清朝政治ノ下ニ支配セラレ近來劉銘傳ノ巡撫トナ



リテヨリ獨立ノ一省トシテ特別ノ政治ヲ施サレ都府ヲ臺北ニ移シ文明ノ新事業ニ續々着手シ鐵道ヲ布設シ新器械ヲ供へ鑛山ヲ採掘シ銳意之ガ改良ニ從事シ爲ニ清朝政府ヨリ異圖アルヲ疑ハレシト云フ後邵友濂代ルニ及ヒ劉カ着手セシ事業ヲ中止シ總テ放任主義ヲ取レリ後劉永福代ルニ至リ再ヒ劉カ意志ヲ次キ漸次之レカ恢復ヲ計リツ、アリシニ日清戰爭ノ結果遂ニ我國ノ有トナレリ之レ臺灣嶋過去歴史ノ一斑ナリ要スルニ臺灣ハ始メ日本人ニヨリテ拓カレ蘭人之レカ中繼ヲナシ鄭氏其跡ヲ擴張シ清國又之レヲ整理シ遂ニ最初開拓者タル日本人ノ有ニ歸セリ又奇ナリト云フベシ

**一 位置形勢。** 亞細亞海中最大島ノ一ニシテ北緯二十一度五十三分ヨリ二十五度十六分ニ至リ東經百二十度十五分ヨリ百二十二度四分ニ至ル本島ノ形狀ハ長橢圓形ニシテ斜メニ東北ヨリ西南ニ蜿蜒シ

高山峻嶺中間ヲ連亘シ恰モ臥龍ノ脊隨ヲナスニ似タリ而シテ其西半ハ概子陵夷ニシテ遠ク海濱ニ連リ村驛相望ムト雖モ東半ハ郡山巍峨直ニ海波ニ接シ層巒巖嶂海水ニ浸ルノ地多ク田疇人戶稀ナリ沖繩ノ八重山郡島トハ西北約百二十里ヲ隔テ、雲烟曠渺ノ間ニ相望ミ南方西班牙領菲律賓群島ト相距ル九拾餘里東方一帶ハ大平洋ニ面シ西方臺灣海狹ヲ隔テ、支那大陸ト相對ス福州府ヨリ約百哩泉州府ヨリ八十哩廈門ヨリハ僅々帆船一日ノ航路ニ過キス

**一 面積人口。** 從來台灣ノ面積ヲ記スルモノ各差異アリ未タ其實數ヲ得ズト雖モ大約南北殆ント二百三十哩東西最モ廣キ所七十乃至九十哩周邊四百五十哩面積一万四千九百八十方里即チ日本里程二千五百三十方里之レヲ九州本嶋ニ比スレバ貳百貳十方里餘廣ク九州及其屬島ノ面積二千六百十七方里餘ニ比スレバ八十七方里狹シ住民ノ



總數ハ約三百萬人ト稱ス固ヨリ信ズベキ數ニアラズ  
 一氣候風土。抑モ臺灣ニ就キテ人モ第一ニ聽カント欲スルハ氣  
 候ト風土ナリ己ニ南北ニ於テ四度ノ延長ヲ有スルカ故ニ寒暑ニ關ス  
 ル情況ハ南北自ラ其度ヲ異ニシ風雨ノ如キハ時ニ相反シタル現象ヲ  
 呈スルアリ  
 編者ハ初冬渡臺シ臺灣ニ於テハ最モ好時節ト呼ハル、期間ヲ經過シ  
 未タ酷暑ノ強劣如何ヲ躬自ラ實踐セシニアラズ故ニ多年此處ニ住セ  
 シ者或ハ確タル書類ニヨリ其調査ノ概況ヲ左ニ記セン  
 北部臺灣ニ於テ暑氣ノ最モ烈シキハ六、七兩月ニシテ五、八、ノ月ハ之レ  
 ニ次ケリ中部臺灣ニ於テ最モ酷ナルハ五、六、七、八月ニアルカ如ク南部  
 臺灣ニアリテハ五、六、七、八、九月共ニ炎熱ヲ極ム地勢ノ示ス如ク其南ス  
 ルニ從ヒ次第ニ其暑氣ヲ増ス酷暑ノ際ハ戶外華氏寒暖計百三十度ヲ

超ユルモ常ニ諸山ヨリ涼風ヲ吹キ降スヲ以テ家屋ノ建築ニシテ其宜  
 シキヲ得ハ室内ハ華氏ノ九十五度内外ニ止マルベシ故ニ之レヲ以テ  
 内地ニ比セバ臺灣地方ノ暑熱ハ甚シク九州南部及琉球地方ノ暑熱ニ  
 超ユルコトナク北部ニ於テハ唯タ長時期之レヲ忍ハサルベカラズ故  
 ニ此ノ比例ヲ以テ推セバ臺灣ノ氣候ハ蓋シ恐ル、ニ足ラズ唯恐ルベ  
 キハ瘴癘毒ニアリ此地風雨交々至リ北部ニアリテハ春夏ノ候最モ降  
 雨多シ霖雨時々止ムルナク霧ノ如ク烟ノ如ク乍チ收マリ又乍チ來タ  
 ル一日ノ間陰翳數回往々數十日ニ亘リテ止マス現ニ本年ノ如キモ基  
 隆臺北ノ如キハ二月上旬ヨリ三月下旬ニ至ルモ未ダ快晴ノ日ナシ之  
 レニ反シ嘉義以南ノ地方ニハ連日快晴一回ノ降雨ナシ  
 秋霖ト稱スベキ降雨ハ八九月ノ頃ヨリ十月ノ間ニ發スルカ如シ之レ  
 前者ノ反對ニ南方ヲ根本トシ北部ハ甚ダ少ナシト



臺灣ニ於テ最モ注意ヲ要スルハ降雨ノ際冷氣ノ襲來トス秋雨ハ論ヲ  
俟タズ春雨時トシテハ稍長時間ノ驟雨ニ於テモ毎ニ寒暖ノ激變ヲ起  
ス其急變實ニ驚クベク單衣猶流汗ヲ禁セサルノ時ニ於テ袷衣尙未ダ  
温ヲ覺エサルノ冷氣ヲ發シ屋外ニ出スレバ忽然トシテ手ヲ懷ニセン  
ト欲ス此奇襲ニ對シ豫テ防禦ノ準備ヲ有セサルモノハ必ス健康ヲ損  
傷ス臺灣熱(まらりあ)ノ誘引實ニ此ニ在リト云フモ誤ナカラン  
勿論此外瘴氣毒ハ醫家ノ說ヲ聽クニ或ハ飲用水ニヨリテ胃腸ニ侵入  
スト云ヒ或ハ大氣中ニ存在シテ皮膚ヲ胃觸スト云ヒ區々定論ナキモ  
要スルニ臺灣ノ風土カ多ク此毒氣ヲ有スルヤ疑ナシ  
此毒ハ全島到ル處ニ存在シ風土ニ熱セサル外來者ハ勿論土着ノ住民  
ト雖モ亦胃觸ノ恐ナキ能ハス此毒タル沼澤若シクハ川流ノ將ニ海ニ  
注カントシテ滯留スル所ニ發生スト稱スルモ臺灣ニテハ深林幽谷等

空氣ノ濕汚セル各處ニモ發生スルモノ、如シト云フ  
土人ノ說ニ據レバ此毒タル氣候ノ變化ニ乘シ風雨ノ誘引ニ伴フテ襲  
撃スルモノニシテ秋雨ノ前後最モ烈シク春雨ハ之レニ次キ盛夏ノ間  
ニハ殆ント全ク發動セスト云フ  
(まらりあ)熱ハ其種類極メテ多ク隨テ療法モ一樣ナラサルヘシト雖モ  
概子規尼涅ヲ以テ特效藥トナセリ然レモ豫防藥トシテハ未ダ新良藥  
ノ發明アルヲ聞カズ藥品以外ノ豫防法モ亦未ダ明白ナラサレモ在洋  
人ノ說ニヨレバ冷水ノ飲用ヲ禁シ寢室ノ外氣ヲ防キ水浴午睡ヲ戒メ  
且フラ子ル製腹卷襦袴袴下等ヲ常ニ用意シテ氣候ノ激變ニ應スルヲ  
主要トスト尙土人ノ攝生法ヲ左ニ記セン  
土人ノ衛生法ハ支那本土ノ習慣ヨリ來ルモノ多ク第一冷水又ハ未沸  
湯ノ飲用ヲ忌ミ菓物ノ外魚肉獸鳥肉菜蒜等ノ類ニ至ルマテ熱煮セサ



レバ食ハズ風雨日ノ外出曉行夜行ヲ嫌ヒ止ムヲ得サレバ橋ニ乘シ或ハ晴天ノ日中ニアラズンバ温浴水浴ヲ行フナク家屋ハ四方ノ三ヲ壁ニシ寢臺ヲ暗室ニ設ケ薄暮ニハ必ス戸窓ヲ閉チ日出ヲ待チテ之レヲ開ラキ決シテ夜氣ノ侵入ヲ得セシメス以テ瘧癘ヲ避クルニ足レリトセリ而シテ臺灣熱モ其種類種々アルベシト雖モ一ハ内地ニ於ケル瘧ト稱スルモノニシテ各日又ハ毎日時刻ヲ定メテ發熱シ其前後ニ惡寒戰慄シ苦惱ハ苦惱ナリト雖モ短時間ニ止マリ其害生命ヲ奪フニ至ルモノ甚タ少ナシ他ノ一ハ臺灣特有ノ(まらりゐ)熱ニシテ其始メ惡寒頭痛ヲ發シ漸次發熱ヲ高メ甚シキハ四十一度以上ニ及ヒ晝夜ノ別ナク高熱ヲ連續シ眩暈殆ト人事ヲ省ミサルニ至リ心臟ノ麻痺ヲ起シ或ハ之レカ爲メ餘病ヲ起シ死没スルモノアリ數日若シクハ十數日ニシテ發熱減退スルモ食慾ヲ失ヒ腰脚ノ治動ヲ亡ヒ時トシテハ脚氣症ノ

如ク四肢ノ水腫麻痺ヲ存シ久シク本復スル能ハス

一 人民。元來臺灣ノ住民ハ現今ノ蕃人ニシテ支那人ハ近時移住シ

タルモノナリ然レモ日本人(あゐぬ)人ニ於ケルカ如ク蕃人ハ漸次山間ニ蹙メラレ既ニ化熟シタルモノハ甚タ少ナク之レニ反シテ支那人ハ後年移住シ來リシモノト雖モ其數蕃人ニ十倍シ今ハ客ヲ以テ主ニ代ユルニ至レリ故ニ之レヲ大別セハ蕃人支那人ノ二部トナル

蕃人中更ニ二種アリ即チ純粹ノ生蕃ト半化セル熟蕃ナリ

支那人中ニモ廣東福州廈門泉州等ノ數小別アリ

尙此他ニ喀家ト稱シ生蕃界ト熟蕃界トニ介リテ部落ヲナス者アリ前項中生蕃ノ性質習慣ハ後章生蕃編ニ記スルコト、シ各移住民中ニ於ケル風俗言語等ノ異ナルヨリ其感情甚タ懸隔セリ概シテ之レヲ云エバ福州人ト廈門人トハ風俗及言語ノ點ニ於テ頗ル一致類似スル所



アリ多クハ反目ノ勢ヲ成サズト雖モ廣東人ハ風俗異ナリ言語亦同シ  
 カラズ且廣東人最モ他移住民ノ嫌惡ヲ受クルモ廣東人又々他移住民  
 ノ壓倒ヲ受クルモノニアラズ往々争鬪ヲ起シテ戰血ヲ各部落ノ間ニ  
 流スコトアリト云フ一般共有ノ精神トモ稱スベキハ勤儉貯蓄ノ美風  
 ニシテ家ニ數千圓ノ貯財アルモ尙且身ニ纏縷ヲ纏ヒ一日十餘錢ノ賃  
 銀ヲ得ントスルモノ多々アリ(但シ亞片吸烟者ハ此限リニアラズ)  
 一教育。 下等人ニアリテハ大概絶無ニシテ中流以上ノモノハ各文  
 字アリ古來學校ノ制度ハ己ニ之レアリシカ如シ其組織ハ首學ト稱ス  
 ル最高ノ學校臺南ニアリ各縣治ニ縣學アリ以下大邑率皆學校ノ設ケ  
 アリ此他各邑各巷村夫子ノ徒之レアラサルハナク童ヲ集メ句讀習字  
 ナ教ヘ或ハ富豪ニ就キ其子弟ヲ教フ學術ハ專ヲ科擧ニ用ユル準備ニ  
 過ギズ浮華ニシテ實用ニ適セズ苦力ト稱スル一階級ヲ除ケハ文盲者

ハ之レナキカ如シ

一宗教。 抑モ宗教ハ清朝政府ノ度外視セシ所人民亦甚タ意ニ留ム  
 ルナシ各家々ニ就テ見ルニ孔孟以下儒者賢人ノ靈牌各種ノ佛像一モ  
 備ラサルナク儒道佛三教ヲ奉信スル民タルヲ表明セリ就中最モ主  
 ナルヲ佛教トス各人大概頸部ニ觀世音菩薩及自己ノ姓名ヲ記載シタ  
 ル小牌ヲ繫クヲ猶耶蘇教徒ノ十字架ヲ繫クト一樣ナリ

此他近來耶蘇教ノ宣教師各所ニ入込來タリ或者ハ醫ヲ兼業トシ支那  
 人中ハ固ヨリ遠ク生蕃地ニ至ルモ教會堂アルヲ認ムト實ニ其勢力比  
 例的ニ盛大ナリ現今臺灣島内ニテ信徒ノ數一萬ヲ下タラズト

一風俗。 其風俗ハ清國ト甚タ異ナル所ヲ見ズ下等ノ人民ハ多ク跣  
 跣ニテ奔走シ其頭ノ剃髮セシ部分ヲ黒キ綿布ニテ纏フハ蓋シ太陽ノ  
 發射ヲ防クカ爲メナリ婦女ハ老年ニ至リテモ猶白髮ノ上ニ大ナル紅



色ノ花釵ヲ挿ム足ハ大概緊足セリ概シテ臺灣ノ婦人ハ一般奢侈ニ流レ遼東半島等ニ比シ衣服裝飾總テ華美ナリト要スルニ氣候其他土地ノ關係ヨリ衣食住ノ負擔ヲ輕カラシムルト雖モ富ノ程度モ亦支那本土ヨリ寧ロ比較的高キカ如シ

今左ニ臺灣ニ於ケル風習ノ美陋二様ノ主タルモノヲ掲ケ以テ讀者ノ一覽ニ供ス

美風ノ重ナルモノハ文學ヲ尊崇スルヲ長者ヲ尊敬スルヲ(タトヘ外面上ナリト雖モ)婚葬ノ大禮ニ方リテハ財寶ヲ惜マサルヲ文學ヲ尊ンテ斷翰零墨ト雖モ麗ニ委セサルヲ等ナリ

陋習ノ陋ナルモノハ鴉片ノ流行ナリ如何ナル山間僻邑ニ至ルモ之レヲ用イザル者ナク女子ト雖モ亦盛ニ之レヲ吸煙ス其需要ノ盛ナル三百萬人ノ一島ニシテ一百万圓以上ノ亞片ヲ需要スルヲ以テ知ルベシ

日々勞動スル苦力(則チ人足)ノ如キハ其所得十分ノ八九ハ皆亞片ニ消費スト之レカ爲メ人民ノ軀軀極メテ柔弱ナルモノ多ク中部ヲ除ク外壯丁ノ半ハ鴉片ノ中毒ニヨリテ顔色蒼白トナリ其害毒ハ血脈ニヨリテ子孫ニ遺傳セリ此他陋風ノ一ハ檳榔樹ノ實ヲ莖葉ト稱スル蔓艸ノ青葉ニ包ミテ男女老幼ノ別ナク悉ク之レヲ嚼ムヲ全臺ヲ通シテ異ナルナシト雖モ殊ニ南部地方ニ多シ之レヲ嚼メハ齒黒ク口臭シト雖モ能ク齒齦ヲ堅牢ニシ又瘴癘ヲ避クルノ効アリト云ヘリ

鴉片ニ次ク陋習ハ婦人緊足ノ風俗トス此風俗ニ至リテハ其害毒甚シキニモ係ラズ彼等揚々得タリトナシ其小ナルヲ以テ美ノ主トシテ誇レリ此他婦人ハ一般暗室中ニ閉居セシメ更ニ外氣ニ觸レシメズ故ニ支那婦人ハ早逝チナスガ老年ニ至リテ視力ヲ失フ者多シ

尙陋習ノ一タルハ臺灣ニ於テハ婦人ヲ賣買スルニアリ故ニ一朝商業



ニ失敗ナスカ如キアランカ最愛ノ婦ヲ賣却シテ資本ヲ得ルモノ少  
ナカラズ恰モ物品ノ如キ趣アリ故ニ婚嫁ノ際モ夫タルベキ者ノ贈金  
ノ多少ニヨリ婦ノ良否ヲ撰定スルヲ得

一言語。蕃語ヲ除ク外臺灣人民間ニ通用スル言語ハ臺灣語トモ稱  
スベキ混成土語ノ外廈門語福州語廣東語ニシテ極メテ少數者間ニ官  
話ノ通用スルヲ見ル英語ハ基隆、淡水、安平、打狗等ノ開港場ニテ僅カニ  
之レヲ解スルモノアルモ通用ト云フニ至ラズ

右ノ言語中臺灣ニ最モ便ナルハ廈門語ナルベシ官話ハ高等社界中ニ  
ハ用イラルモ一般ニハ通用セス然レモ目今我軍隊或ハ民政廳ニ奉職  
スル通譯官ハ多ク官話ヲ學習シタル人ニシテ間々福州廈門語ニ通ス  
ル人モアリ更ニ官話ト土語トニ兼通スル土人ヲ復通譯者トシテ用ヒ  
以テ其用ヲ便セリ勿論臺灣ノミニ志アルモノハ混成土語ニ如カザレ

ト國本モ清土トノ交通ヲナサントセハ官語ハ勿論廈門語福州語ヲ學  
ハサルベカラズ

生蕃人中ニハ各特種ノ言語アリ曩ニ編者恒春ニ至リシ際與南生蕃人  
來應シ之ノ際通譯復通譯四名ヲ要セリ又其困難ヲ知ルベシ  
臺灣人ノ衣食住

一衣服。最モ普通ニ着用セラル、ハ衫ト稱スル上衣ト袴ヨリ成レ  
ルモノトス衫ハ其長サ臂ヲ掩フモノニシテ手ハ爪先キニ數寸ヲ余ス  
ヲ常トス勞働ヲナスニ際セハ折返シテ短カクナスト雖モ通常勞働者  
ハ短カキモノヲ用フ袴ハ他地方ノモノトハ異ナリ其長サハ肘ノ中央  
ニ止マリ坐スレバ之レヲ捲キテ膝節ノ上ニ置キ自カラ裕容ノ体アリ  
テ毫モ窘窟ノ憂ナシ之ノ袴ハ上紳士ヨリ下勞働者ニ至ルマテ着用ス  
レモ紳士ノモノハ一般ニ長シ之他二種ノ勞働服アリ一ハ西洋服ノ上



衣ノ如ク先ツ(しやつ)ニ勞務タリ此上衣ハ年少勞働者及開港場ノ商館  
手代等之レヲ着ス他ノ一ハ我國ノ袖無ト稱スルモノニ釦ヲ付シタル  
如キモノニテ夏時ノ勞働服ナリ

禮服ハ長衫ト稱シ通常上衣ノ踵ニ及フモノナリ袖ノ長サ殆ト二尺指  
先キニ尺余ヲ餘ス兩手ヲ垂ルレバ其端膝ニ及フ平素ハ之レヲ二ツ折  
トシテ卷キ上ク胸モ亦通常服ヨリハ寛濶ナリ此他喪服アリ通常ノ長  
衫ニ類ス

女子ノ服裝ハ袴ハ男子ノ如ク上衣ハ衫ノ袖廣キモノニ刺繡アルモノ  
ヲ用フ貧富ノ度ニヨリテ其裝飾モ亦異ナレリ然レモ我國ノ如ク種々  
ナル類別アルニアラス要スルニ他人ニ交際セサルヲ以テ通常衣服ニ  
テ甘スルモノナルベシ然レモ頭部ノ裝飾ハ極メテ複雑セリ其濃粧ス  
ルヲ多ク老婦ニシテ少女ハ之レニ反シ蛾眉ヲ拂ヒ決シテ盛裝濃粧セ



欠

MISSING



深ク其表口ヨリ裏口ニ達スル距離ハ往々ニシテ二十餘間ヲ超ユルモ  
其巾ハ三四間ヲ出スルモノ極メテ稀ナリ而シテ此狹長ナル家屋ハ皆  
大同小異ノ摸形ヲ有シ表口ヲ入レバ土間ノ稍ヤ廣キ且明カナル所ア  
リ商家ハ此所ヲ店トシ普通ノ家ハ之レヲ以テ應接會見ノ處トセリ此  
間ヲ過タルキハ又一室アリ稍ヤ暗ク卓子机寢臺等アリテ晝間寢居ノ  
處トス此間ノ傍ヨリ戸牖ヲ出ツレバ一間地アリ間地ノ次或ハ一室或  
ハ二室入ル所アリテ出ツル所ナク其暗キコト白晝燈ヲ要シ殆ント  
人面ヲ分タズ所謂内房ニシテ婦人ノ居ル所トス此附近ニ厨アリ食堂  
アリ食堂ノ傍中庭ニ沿フテ廊下ヲナス所ニ厨夫居住シ表口ノ第一室  
ニ番頭小僧起居セシム此等ノ諸人多ク寢臺ヲ有セズ店頭ニ列シタル  
長方形ノ長持等ノ上ニ臥スルヲ常トス  
内部ノ間取り斯ノ如クナレバ家屋ハ表裏概シテ二棟ヨリ成リ二棟横



サマニ續キテ市街ヲ成スモ其煉ハ多ク隣家ニ連續セズ唯壁ハ一枚ヲ以テ兩家ヲ界スルヲ我市街ノ如シ

村落ノ家屋ハ地歩ヲ占ムルコト頗ル廣ク上等ノ家ハ門及外塀ヲ有シ下等ノモノハ門塀ヲ有セサル代リニ其壁ヲ厚フスルコト五六寸乃至七八寸山間ノ家屋等ニ至リテハ多ク銃眼ヲ之レニ穿テリ富豪ノ家ニ至リテハ其建築全ク城郭ノ体ヲ成シ事アル時ハ坐シテ小敵ヲ挫クニ足レリ

建築ノ材料ニ就テハ市街ノ家屋大概煉瓦或ハ木材土壁トヨリ成ルモ村落等ニ至テハ往々木材又ハ竹材等ノミヲ以テ成立スル貧家ヲ見ル且ツ屋根ハ都會ニ於テハ瓦葺ナルモ村落ノ貧人ハ茅又ハ藁ヲ以テ之レヲ葺ケリ凡テ屋根ハ薄弱ニシテ四壁ノ堅厚ナルニ似ス

臺灣建築ニ就テ尤モ普通ノ想像ニ反スルハ耐寒的築造ヲ第一トシ毫

モ納涼上ニ意ヲ留メアラサル如シ此レ大ニ怪ムノ点ナリ勿論臺南淡水等富豪ノ居住ハ二層樓トシ露臺ノ設ケアリト雖モ一般臺灣人ハ其住居ニ於テ一モ暑氣ヲ避ケ涼風ヲ納ル、ノ用意ヲ施スコトナシ第一樓臺ノ如キハ市街ニ於テタモ見ルヲ能ハス况ヤ村落ニ於テハ皆無ト云フモ過言ニアラズ第二居室ハ大概三方時トシテハ四方トモ閉鎖シ寢所ハ殆ト暗黒ナルヲ能シトス第三ハ家屋ニ附屬スル庭園ノ設ケナク清涼ノ氣ヲ養フ能ハサルヲ等ニシテ此等ノ理由ヲ尋ヌルニ主ナル目的ハ外氣ノ浸入ヲ防キ瘴氣毒ヲ豫防スルニ出タル者ナルベシ假令日本人ハ性質上輕快ナル家ヲ貴ブト雖モ日本風長屋作りナゾノ建築ヲ臺灣ニ用ヒシメバ第一臺地名物ノ暴風ニ打勝チ難ク第二炎暑ノ際ハ非常ニ日光ノ通透ニヨリテ殊ニ酷熱ヲ感ジ夜間ハ從テ夜氣ノ襲來ヲ蒙リ大ニ健康ニ適セサルベシ多年臺灣ニ住スル西洋人ノ建築



ヲ見ルニ一般家ノ床下ヲ物置トシ二階ヲ居室事務室ニ分チ壁ノ厚サ大抵煉化二枚ヲ合セ其上ヲ漆喰塗トス又二階ノ外ニ幅一間半餘ノ縁ヲ設ケ其外ニ欄干ヲ附シ尙此上ニ夜氣ヲ防クカ爲メ網代方ニ組ミタル簾ヲ以テ外面ヲ覆ヒアリ

備考臺灣ニテ使用スル火燒煉瓦ハ重ニ厦門香港ヨリ來タル

長九インチ厚二インチ巾三インチ半ノ品千個ニテ上等十五圓下等九圓位ナリ

○後來臺灣ニ於ケル家屋ハ如何ナル方法ニヨリ築造セラレタルモノ最モ適當スルヤ假令日本人ノ住居タリト雖モ前項ノ如ク氣候風土ノ關係ヨリ到底我建築ヲ全部則トルベカラズ左リトテ純然タル支那建築法ニ準ズベカラズ彼我兩者ヲ比シ長ヲ取り短ヲ捨テ其粹ヲ撰ハサルベカラズ實ニ臺灣將來ノ建築ハ一大研究ヲ要スベキ問題ナリ今左

ニ斯道ニ經驗アル内外各氏ノ意見及直話ヲ掲ケ以テ諸氏ノ參考ニ資セン

陸軍々醫總監石黒忠惠氏ノ說ニヨレバ

臺灣ノ地ニ兵營ヲ設クルヤ防暑ノ目的ヲ以テ之レヲ營ムベク此目的ヲ以テ家屋ヲ築クニ二種アリ

(甲)ハ堅牢ノ瓦石造ニシテ成ルベク四壁ヲ厚クシ天井ヲ高クシ窓牖ヲ小ニシ又屋瓦ノ排列ト壘積トニ注意シ其他灌水ノ裝置ヲ設クルニア

リ (乙)ハ輕易ノ木造ニシテ窓ヲ多ク且濶クシ四方ニ廊下ヲ匝ラシ庇ヲ廣ク高ク張リ以テ日光ヲ遮リ通風ニ便スルナリ

此ニ兵營ヲ築クニハ蓋シ乙種ニ從フヲ良トス獨蘭英佛等植民地ノ衛生報告ヲ讀ムニ皆庇ヲ長クシ日光ヲ遮リ床ヲ高クシテ濕氣ヲ防クノ



造家法所謂棧築法ヲ稱揚セリ而シテ此造築法ニ依ラントスルニハ勢  
乙種ヲ撰マサルヲ得ス加之我兵ハ生來此家屋ニ慣ル、ヲ以テ殊ニ適  
當ナリト信スルナリ

總督府殖産部長(現今臺北縣知事)橋口文藏氏ノ說話ニヨレバ臺灣ノ建  
築ハ日本流ニナサンカ暴風ノ爲メ破壊ノ恐レアリ支那風ニナサンカ  
霖雨ノ際濕潤シ炎熱ノ際ニハ日本人ノ健康ニ不適當ナルヲ如何ニセ  
ン故ニ此地ニハ兩様折衷ヲ取ル最モ可ナリ然シテ其建築法ハ内部ハ  
煉化作トシ床ヲ少ナクモ六尺以上トシテ濕氣ヲ防キ屋根ヲ高クシテ  
空氣稜キヲ設ケ外部ハ日本風トシテ庇ヲ長ク出シテ以テ日光ヲ防ク  
ベシト

總督府土木課長竹下康之氏ノ説ハ畧橋口氏ト同シ唯内部ハ出來得ベ  
キ限リ日本風ニ建築スルヲ宜シトスト

總督府陸軍局臨時臺灣建築部工兵大尉石栗剛三氏曰ハク兵營ノ床ハ  
四尺以上ニテ可ナリ又壁ハ出來得ベキ丈ケ厚クシ以テ炎暑ヲ防クベ  
シ建築ノ法モ未タ一定セル摸範ハナキト雖モ暴風ニ堪ヘラレ得ル限  
リ日本建築法ニ則トルベシト

總督府山林課長有田正盛氏ハ曰ハク床ヲ高クシ造作ヲ堅固ニナセバ  
寧ロ日本建築ヲ可トスト

總督府參事官基隆支廳長西郷菊次郎氏曰ハク土臺ヲ煉化トシテ土藏  
造トシ内部ヲ日本建築風トナスベシ

在安平英副領事(まぐわん)氏ノ曰ハク臺灣ノ建築ハ煉化造トシ壁ノ  
厚サハ壹尺五寸ヲ下タラズ床ハ壹丈以上ノ高サナラサルベカラズ天  
井ハ尤高キヲ要スト之ノ建築法ヲ用ヒタル住家ナラバ決シテ健康ヲ  
害セズ氏ハ既ニ安平ニ住スル前後十餘年ニ及フモ未タ(マテリヤ)ニ犯



カサレシナク且氣候モ戶外ハ論外ナレモ戸内災暑ト雖モ百度以上ニ昇リシナシト云フ  
 在打狗英國領事館附置とくどる、まゐや一氏ノ説モ殆ント前説ノ如シ然シ氏ハ曰ハク内部ハ煉化造リトシ外部ハ木造建築ヲ宜シトスト既ニ氏ノ住居ハ右ニ基キ築造シアリ打狗港さらせん岬角最モ強風ノ衝ニ當ルモ未タ暴風ノ爲メ破壊セラレシナク依然トシテ巖壁ノ上ニ樹立セリ

### 第貳章 商業ニ關スル事項

一 商業。 台湾商業ハ之レヲ分テ四トス曰ハク外國トノ貿易曰ハク支那大陸トノ貿易曰ハク内地間ノ商業曰ハク蕃人トノ交易之レナリ  
 ○台湾嶋外國貿易。 外國貿易ハ今ヤ漸次發達シ四開港場ニテノ輸出ノ入總計一千萬圓以上ヲ算スルニ至レリ其輸出ノ重ナルモノハ前ニ記

載セシ如ク砂糖、茶、樟腦、石炭、砂金、等ニシテ輸入品ノ主ナルモノハ阿片ヲ始メ棉布、毛絨、裝飾品、海産物以下諸雜貨ニシテ其ノ額ハ遙カニ輸出ニ下タレリ輸入品中棉布并ニ海産物ハ我内地ノ製造ニ係ルモノ多ク殊ニ棉布ハ年々好景氣ヲ呈シ天笠布ヲ壓到スルニ至レルモ皆外國人ノ手ニ依リテ輸入セラレ邦人ハ與カラズ實ニ遺憾ト云フベシ現今商權ハ全ク洋人ノ掌握スル所ナリ  
 ○支那貿易。 支那貿易ハ最モ盛ニシテ多クヂヤンク船ニテ貨物ノ運搬ヲナス其交通頻繁ナルハ廈門ニシテ之レニ次クハ福州ナリ  
 支那大陸ヨリ輸入スルモノハ重ニ奢侈品、日用家具、吳服類、飲食品、福州産杉木等ナリ大陸ニ輸出スルモノハ硫黃、石炭、稻米、砂糖、木材、雜穀、獸皮等ノ粗製品ニ属スルモノ多シ  
 ○内地ノ商業。 内地相互間ノ商業ハ交通ノ不便ナルカ爲メ未ダ隆盛



ナリト云フベカラザルモ大都會ト地方トノ貨物ノ集散ハ比較的ニ發達シ居レリ内地貨物ノ集散地ハ北部ニテ蘇澳、頂双溪、台北府ノ大稻埕、艋舺、桃仔園、海山口、大嵙崁、中央部ニテハ後壠、鹿港、大甲、北斗、南部ニテハ鳳山、東港、社寮等ナリ

○蕃地トノ商業。蕃地トノ商業如何ハ後篇生蕃ノ部ニ明記スベシ就テ見ラレヨ

一臺灣商人一般ノ風習。支那商人ノ協同一致力ニ富メルハ天性也己ニ臺灣ニ於テモ臺北、臺南ノ如キ商業繁盛ノ都會ハ兎モ角鳳山以南ノ僻邑ニ於テスラ尙且協同組合ノ法ヲ採レリ大ナル資本家ハ固ヨリ微々タル商人ト雖モ僅々數十圓宛ノ據金ヲ以テ一組合ヲ組織シ利益アレバ重ニ其元資本ニ組入ル、ヲ通常トス然シテ一人ノ管理者アリテ之レヲ支配ス彼ノ金錢上ニ付テハ東洋ノ猶太人ト稱セラル支

那人ナレト一旦組合タル上ハ互ニ其人ヲ信用シ規律嚴正秩序整然トシテ乱レズ我合資會社組織ニ勝ルアルモ劣ルナキノ感アリ又商業上信用ヲ重ズル風習ハ彼ノ變幻詐偽極ナキ支那民族中ニ之レアラントハ實ニ意想外ナリ一例ヲ舉クレバ目下我國ノ一圓銀貨ヲ臺灣銅錢ニ交換スルニ第一質ハ銅錢九百三十文ニ交換シ最モ良質ナリ第二ハ千錢ト交換スベク八分良二分不良ノ銅貨ナリ第三ハ千百錢ト交換スベク七分良三分不良ナリ第四ハ千三百錢ヲ以テ交換スベク良不良折半ナリ然シテ之レヲ檢査スルニ毫末ノ差異ナク商業上ニハ例ノ「チャン」根性モアラザルガ如シ此地ニハ別ニ每五十弗一包トシ封紙ニ發行商店ノ押印セルモノアリ其商店ノ信用位置ニ懸念ナキモノハ差支ナク通用スベシ此封金ハ破壞裁裂ナキトキハ必ズ五十弗ヲ封入シアルモノトス若シ人之レヲ開



對スルカ或ハ封紙破切スルトキハ其押印アル商店ニ持參スレバ其惡貨幣ヲ引換ユルト云フ

弗銀ハ其眞質ナルト「ちよふ」ハ銀貨ニ其店々ノ極印ヲ打チ恰カモ杯ノ如ク陥入セシモノヲ云フナルトテ問ハズ都テ秤量ヲ以テ授受スル貨幣ハ重ニ日本銀貨ナリ

一商人社界ノ狀態。左ノ一節ハ明治廿九年二月臺南城內豪商蔡夢態(雜貨商)同地高乾源(典舖商)同地英泰(亞片商)等ニテ市内商業ノ慣行及現況ヲ調査セシ大要左ノ如シ

明治廿七年八月日清交戰ノ初メニ當リテハ臺灣ノ地未タ其影響ヲ受ケズ商業上ノ取引毫モ平常ニ異ナラザリシガ日本兵ノ一度澎湖嶋ヲ占領シ續テ本島ニ上陸スルヤ清國トノ交通ハ漸ク遮斷セラレ其後占領ノ事實公ニセラル、ヤ島内ノ擾亂已ム片ナカリシヲ以テ資本家ハ

多ク難ヲ避ケテ本島ヲ遁レ走り商業ノ慣行ハ靡亂シテ取引ハ日々僅少トナリ只其日送リノ有様トナレリ爾來今日ニ至ルモ尙平時ノ態ニ復セズ特ニ商民ノ受ケシ損害ハ尠少ニアラズ今日モ未ダ本來ノ業ヲ營ム能ハサルモノアリ商業ノ恢復夫レ何レノ日ニカアルト大ニ慨歎セリ

一商慣習。從來臺灣ニ於ケル商品代價支拂ノ時期ハ年内ヲ分チテ三回トスルノ慣例ニシテ舊曆五月八月十二月ノ三期ヲ以テセリ而シテ此三期拂ノ慣例ハ主ニ大資本家ト見做スベキモノ、間ニ行ハレ一般小資本家相互ノ取引ニ於テハ敢テ此例ニ依ラズ

○一般商品相場ノ建方ハ同業者一同會館(日本ノ俱樂部ノ如シ)ニ會合シ買入レト賣出シトテ問ハズ一定ノ價格ヲ定メ競争賣崩シ共倒レ等ナキヲ盟約シテ決シテ競争ヲナサズ要スルニ同業者間氣脉聯絡ヲ



通ズルノ古來ヨリ慣習アリテ違反セシ者稀レナリ  
臺灣ニハ元來銀行制度ノ組織アラザリシガ故ニ上海香港廈門其他支  
那本國トノ間ニ於ケル爲替ノ取組ハ主トシテ安平在留ノ西洋人ノ手  
ニヨリテ營業セラル

○金利。金錢ノ貸借ニ付テハ有抵當無抵當ノ兩様アル勿論ナレモ大  
商業家ノ貸借ハ多ク無抵當信用貸ナリ金利ハ一圓一ヶ月壹錢以上ナ  
リ田舎ニ至リテハ家屋地所ヲ抵當トシテ金錢ノ貸借ヲナスコトアレモ  
都會ノ地ニテハ是等貸借ハ餘リ見受ケザルナリト  
都會ノ地ニ於テハ何業ニヨラズ金融上欠クベカラザルハ典舖(質屋)ニ  
シテ資産家ト雖モ時々典舖ニテ金融ヲナスコト少ナシトセズ從テ我國  
ノ如ク質屋へ出入スルヲ以テ貧困ノ看板トナスガ如キコトナク虚心平  
氣ニテ典物ヲナス故ニ典舖ハ恰モ我銀行ノ如キ效用ヲ有セリ

○典舖(質屋) 典舖ノ數ハ詳カナラザレモ其數尠ナカラズ抵當流レ期  
ハ典舖營業主ノ貧富ニヨリテ期限必シモ同一ナラズ資産饒カナル典  
舖ハ抵當期限最モ永キモノ三年四ヶ月ニ及ビ資産多カラザル典舖ハ  
期限二十ヶ月ナルモノアリ又其金利ノ如キモ各典舖同一ナラズ拾圓  
以下ハ壹圓ニ付貳錢五厘(資産多カラズシテ抵當期限二十ヶ月ノ典舖  
ハ三錢)十圓以上ハ貳錢ノ金利ナリ  
典物燒失シタル場合損害負担ノ慣例ハ自家ヨリ失火シタル損害ハ典  
舖ニテ負担ス其割合抵當物一圓ナレバ最終期限滿期後マテノ金利ヲ  
見積リ該金利ヨリ燒失當時迄テノ利子ヲ差引キ殘額ヲ質置主ニ辨償  
スト若シ又燒失ノ原因自家失策ニアラザル損失ナル時ハ質置主ノ負  
擔ニ歸ス

○一般商家店員ノ給養法。雇人ハ先十二三才ニテ主家ニ住ミ込ミ衣



服飲食ヲ主家ヨリ支給セラレ漸次習熟ノ上多少ノ給料ヲ受ケ最後首尾能ク勤メ上タル時ハ内地ノ如ク主人ヨリ相當ノ資本ヲ得テ商店ヲ開クト云フ平均給料最高者拾五圓以下八九圓位小給者ハ一圓内外ト云フ

一諸物價。臺南以南ノ諸物價大概左ノ如シ但シ編者ノ考定ナルヲ以テ多少ノ異動ト且土地ノ狀況ヨリ差異ノ生ズルアルベシト雖モ以テ大略ヲ推知スルニ足ルベシ

- 一牛肉 每斤 金十錢内外
- 一豚肉 每斤 金十五錢内外
- 一雞肉 同 金十三錢同
- 一生魚 同 金十錢同
- 一韭菜 同 金四錢同
- 一白菜 同 金四錢同
- 一芹菜 同 金五錢同
- 一葱 同 金五錢同
- 一鴨卵 每粒 金一錢三厘同
- 一鷄卵 每粒 金一錢五厘同

- 一鹹卵 同 金一錢五厘同
  - 一白糖 每斤 金十錢同
  - 一烏糖 每斤 金六錢同
  - 一冰糖 同 金二十錢同
  - 一火炭 百斤 金六十錢同
  - 一火柴 百斤 金二十錢同
  - 一洋油 每斤 金十錢同
  - 一白紙 每刀 金十五錢同
  - 一白米 每斗 金卅五錢同
  - 一糙米 每斗 金廿七錢同
  - 一麵粉 每斤 金八錢同
  - 一麵線 每斤 金十錢同
  - 一大工 一日ニ付 金三十五錢
  - 一鐵工 一日ニ付 金四十錢
  - 一左官 同 金三十五錢
  - 一人足 同 金廿五錢同
  - 一ボーイ 一ヶ月 金六圓四角ヨリ八圓マテ
  - 一料理人 一ヶ月 金八圓四角ヨリ
  - 一洗濯賃 一品ニ付 金二錢五厘
  - 一理髮 金二十五錢
- 以上南部平均相場ナリ北部ノ平均相場ハ未ダ充分ナル調査ナサハルト雖モ大概大同小異比例上臺北ハ臺南ヨリ高値ナリ



家屋ノ借料。臺南ニ於テハ最モ繁華ナル場所ニテ間口二間奥行七八間ノ家屋一ヶ年ノ借料百圓ヨリ二百圓以上ニ達ス臺北ニ於テハ同様ノ家屋ニテ百五十圓ヨリ二百五十圓内外ナリ  
要スルニ臺北ニ於テ中人一家ノ生計費一ヶ月凡ソ七八圓臺南ニ於テハ一ヶ月五六圓ヲ要スルモノ、如シ

臺北ノ狀況

臺北府保良局主事勳六等 李 春 生(大稻埕豪商)

并ニ六館街林維源支店買辨(買辨トハ番頭)林及黃良聰ニ就キ取調要領左ノ如シ

臺北貸借利子ハ百圓ニ付一ヶ月一圓二十錢ヨリ高キハ一圓五十錢二三千圓以上ハ百圓ニ付一ヶ年六圓ヨリ八九圓マテ高キモノハ十四圓ヨリ十六圓ニ至ルト云フ

此他商業上ノ慣習ハ大略台南ノ如シ

大商店内部ノ組織ハ通常左ノ如ク定メラレ居ル一云フ

家長。 一家ノ長ナリ

總舖。 總理人ト云フニ同ジ

顧問。 常勤ニ非ズ

銀櫃。 金庫方

管帳。 收帳。 支拂方 收納方ニ同ジ  
買辨(即チ番頭)

出收。 出街。 共ニ手代ナリ

小公司。 小僧

店舖規律ノ嚴重ナル恰モ文明的會社ノ如シ

○日本商人目下ノ狀態。從來渡臺セシ日本商人ハ唯我軍人或ハ軍屬ノ需要ニ充テナカ爲メ右等ニ適當スルモノ耳ヲ持來タリテ販賣セリ然レモ其價格非常ニ高値反テ同品ニシテ支那人ノ店ニ就キテ買求ス



ルヲ安シトス故ニ各店何レモ豫想ニ反シ大ニ困難ヲ來タシ漸次本國ニ歸ル者アリ彼等支那人ノ販賣スル我商品ハ一度上海、香港ノ問屋ノ手ヲ經テ來タル者ナリ然ルニ尙且我商人ヨリ寧ロ安價ニ販賣スルコトヲ得ルハ彼等ノ勉強ニ因ラズンバアテズ將來此地ニ我商品ノ卸賣問屋ヲ設ケ彼等支那人ニ販賣セシナラバ其利益尠少ニアラサルベシ又我小賣商店モ從前ノ如ク内地人ノ需要ノミニ留意スルナク一般支那人ヲ花客トスル如キ物品ヲ販賣スルニ於テハ前途モ亦有望タリト云フベシ

(附言) 台北并ニ其附近ニハ保良局ト稱スルアリ總テ土人中名望家資産家ニヨリテ組織セラレタルモノニシテ政府ト土民トノ間ニ立テ法令ノ説明或ハ願書ノ執達方等官民ノ媒介者トシテ設ケラル主事ハ李春生氏ニシテ曩ニ上京シ勳六等ニ叙セラル氏ハ昨年近衛

師團入台以來我政府ニ對シ非常ニ功勞ヲ奏シ今日ノ叙勳モ蓋シ故アルト云フベシ氏一日編者ニ向テ曰ハク日本豪商或ハ有力者カ來テ業ヲ臺灣ニ起サル、アラバ余ハ喜ンテ斯業ニ盡力セント氏ハ今年六拾餘歳年少ノ頃金貳弗ヲ懷ニシ來テ居テ臺北ニ定メ漸次富ヲ重テ現今資産數十萬圓專ラ茶ノ貿易ヲ營ミ屈指ノ財産家ナリ

○燐寸。燐寸ハ島内ノ需要殆ント全ク日本產獨占ノ供給ニヨル其種類ハ委ク安全製ノモノニシテ二三年前ノ輸入中最モ消費ノ廣キハ五個ノ蝙蝠ヲ商標ニ畫キ五福洋行ト記セルモノ又頂上ニ火柴ト都合六字ヲ上部ニ記シ其下ニ唐子二人停立セシ商標アルモノ品位上等ナリ然レモ臺南府城ニハ外國黃燐製ノモノ亦需要多ク本邦安全製ハ却テ同地方ノ内部ニ多ク輸入ス明治二十五年中淡水打狗ノ二港ニ輸入セシモノ左ノ如シ



淡水 日本安全製

一〇〇、一五〇哥

打狗

黃燐製及日本安全製取交セ

三九四五哥

右ノ表ニ依リテ見ルトキハ打狗輸入ノ黃燐製ハ其内ニ幾分カ日本安全製ヲ交有シ居ルニモ拘ラズ淡水輸入ノ本邦安全製ノ二十五分ノ一ニモ當タラサル少額ナルヲ知ル

### 第三章 臺灣ノ材況

臺灣目今ノ材況ハ日本材ハ暫ク論外トシテ從前島内ニ於ケル建築用材ハ如何ナルモノヲ使用セシカ元來之レカ需要ニ供給セシ種類二種アリ一チ内山物トシニチ福州杉トス内山物トハ即チ各地山林ヨリ生蕃人ト交渉ノ上伐出スルモノニシテ至ル所各其特有産物アリ今左ニ山林ノ狀況及産木ノ種類ヲ掲ケン

#### 第一節 内山物

支那人ノ山林ニ於ケル蓋シ所謂前世ノ仇敵ナルモノ乎抑モ臺灣ノ山嶽ハ樹木鬱蒼骨ヲ露ハサスト雖苟クモ支那民族ノ居住スル境内ニ在リテハ一樹ノ材トスベキ高木ヲ認ムルコトナク現ニ臺灣ノ名産タル樟樹ノ如キモ今ハ蕃地ニ入ラスンバ一枝ト雖モ之レヲ得ルニ由ナシ臺灣ノ山野元ト多濕ニシテ樹木ノ生育ニ適スレモ少シク利用アルモノハ直ニ伐採シテ之レカ後圖ヲナスコトナシ然レモ足跡一タヒ生蕃ノ界ニ入ルレバ深林鬱叢トシテ各種ノ良材ニ富メリ樟木ハ殊ニ北部ニ多クシテ杉木(山杉ト稱ス福州杉ニアラズ我朴ニ似タリ)ハ中部ニ産ス山岳ノ半腹ニハ松柏ノ類ヲ生シ又野生ノ榕樹烏木等ノ深林少ナカラズ臺北ヨリ東部ノ諸山ハ「たんご」蕃ト稱スル一種族ノ割據スル所ニシテ常ニ支那移住民ト争鬭ヲ醸ス所ナルカ此山ニハ深林甚



タ多ク楝榔樟木小楠木及楓樹(重ニ船材ニ用ユル硬木ナリ)垂樹椿樹黒柿等ハ多ク此深山ヨリ産ス

内部ノ山林ニハ物産トシテ大ニ價值アルノ樹木果シテ許多ナルベシト雖モ今尙探險ヲ悉サルヲ以テ之レヲ知ルニ由ナシ其重ナル物産ヲ列舉セバ左ノ如シ

○楠樹(一名九ぶの樹)。臺灣固有ノ純粹ナル楠ハ樹幹高大ニシテ一層ノ美觀ヲ呈ス元來馬來土人ハ之レヲ倒伐スルコトナク之レヲ伐採スルハ獨リ移住ノ支那人ニ限ル其用路ハ多々アルベシト雖モ多クハ建築用材鐵道枕木造船用材等ニ供ス

○樟樹(一名梢楠)。臺灣産木中第一等ノ木材ナリ印度産白檀ニ類スト香氣アリ一般上流社界ノ棺材ニ供シ其根部ハ製腦用トス詳細ハ樟腦篇ニ明記セリ

○松。松ハ多少各地ニ産スルヲ見ル其多クハ重ニ北部ニアリ八戸林學士ノ説ニヨレバ臺灣ノ松ハ黒松ト赤松トノ間ニ在リ幹ハ黒松ニ似芽及幼莖ノ鱗ハ赤松ニ類シ尙芽ハ赤松ヨリモ著シク赤褐色ヲ呈ス葉モ亦赤松ニ似テ一層長シ要スルニ黒松ヨリモ赤松ニ近キ一種ノ松ナリ材ハ赤松黒松ニ比スレバ重ク堅ク樹脂ニ富ミ建築用材トシテ價値ハ恐ラクハ二種ノ松ヨリモ上位ニ在ラン生長ハ畧内地ノ松ト同様ナレ其連年伸高生長三尺餘ノモノヲ見ルコト屢々ナルヲ以テ推セバ内地ノ松ヨリモ優ルアルモ決シテ劣ルコトナキハ疑ナキカ如シ海岸ニハ少ナク海ヨリ遠カルニ隨テ稍多シ稀ニ數反歩ノ疎惡ナル林相ヲナスヲ見ルト雖モ皆幼齡ノモノニシテ直經五六寸ヲ超ユルモノヲ目撃セズ然レモ水邊脚附近ノ山林ニハ多少大材アリ既ニ總督府砲兵部ニ於テハ該地蘇樹森蘇爾民ナル材木商ニ命シ數百本ノ松材ヲ伐出セ



シメラレタルアリ

従前ノ電柱ハ多ク松材ヲ用ヒタル所アリ

以上ハ北部産木ノ重ナルモノナリ

○「かたん」材。「かたん」材ハ恒春地方ノ特有物産ニシテ其光澤ト云ヒ其重量ト云ヒ殆ト紫檀ニ酷似ス爰日南進軍ノ某從軍記者南部地方ニハ紫檀ノ林紫檀ノ土橋アリト誤報セシハ則チ之ノ「かたん」材ナリ此他  
○鳥心木。鳥心木トハ嘉義地方ヨリ産スル木材ニシテ其色黒ク内地ノ所謂黒柿ナリ

以上記載シタル重ナル木材ノ相場ハ左ノ如シ勿論生蕃地ヨリ伐出スルモノナルヲ以テ材木ニ一定ノ尺寸ナク一本々々ニテ相場ヲ定ムルモノナリ

### 臺北ノ相場

楠 長六尺五寸 巾七寸厚五寸 但並等 金壹圓廿錢也

楠 長壹丈 五寸角 但上等 金四圓也

梢楠 長壹丈 五寸角 但並等 金五圓也

杉ノ相場ハ福州杉ノ章ニ明記ス

### 臺南ノ相場

楠木 長八尺 巾壹尺五寸厚六寸 金五圓也

楠板 長七尺 巾壹尺五寸厚壹寸 金壹圓五拾錢

山杉 長七尺 巾壹尺厚貳寸五分 金壹圓五拾錢

「かたん」 長七尺 巾壹尺五寸厚六寸 金三圓三拾錢

同 長九尺 巾壹尺厚三寸五分 金貳圓也

同 長七尺 巾五寸厚貳寸 金六拾錢

此等ノ内山材ヲ販賣スルハ臺北ニ於テハ艋舺德源街益生號



臺南ニ於テハ佛頭港街瑞德商行并ニ德茂號ナリ

此外臺灣ノ林産物ハ多々アリ今臺灣前政府知府余之儀ノ篤セシ臺灣府誌中臺灣林産物ノ名稱ヲ舉クレバ左ノ如シ

樟豫章有紅粉二 柏亦自内 松大者合 桐楠美材也性堅理細爲香一歲 猴栗一色液可爲脂 柏地少來 松抱成林 桐東榮四枯一歲西榮東枯 猴栗木性甚堅 百日青俗名山杉難 赤麟爲大者可 榕楓爲香 椿。白樹。鐵樹。可爲棟樑

九芎一名九刺村落茅屋 加冬製器具以可 紅茄木助紅 黃目樹土沈香甚多

○竹。臺灣ハ竹ヲ以テ最モ有名ナリ南部地方ニ至レバ建築ノ重ナル材料ハ皆竹ヲ以テス殊ニ舟楫ノ便ハ概子巨竹ヲ以テ筏ヲ製シ之ヲ以テ運搬ノ便ニ供ス

刺竹高四五丈旁枝橫生而多刺堅利 長枝竹。鳳尾竹。空涵竹。珠籬竹。麻竹等其種類甚タ多シ

刺竹ハ多ク親竹ヲ切りタル株ニ郡リテ生ズ其ノ筍味美ナリ

麻竹ハ專ラ寒中ニ生ズル竹ニシテ多ク器物ヲ作ルニ用フ

### 現今材木伐出方之概況

生蕃地ヨリ材木ヲ伐出スルニハ先最初物品ヲ送リテ其歡心ヲ買ヒ置キ後其伐出セントスル林産物ト彼等日用必需品トヲ交換ス其詳細ハ後章生蕃編ニ明記セリ

然シテ茲ニ物品ヲ交換シタル後之レヲ運搬スルニ實ニ非常ノ手數ヲ要ス勿論我内地ノ如ク選材法ニ發達ナスニ於テハ少シモ其憂ナシト雖モ彼等(チャン)人種ニ於テハ未ダ選材ノ法ヲ知ラズ山林ヨリ材木ヲ運搬スルハ一般洪水ノアルヲ待チ之レヲ流下シ海岸ニ着スルヲ待チテ之レヲ留止スト云フ疊ニ臨時鐵道隊ノ新竹以南輕便鐵道ヲ布設スルヤ之レガ材料ヲ該地方ヨリ供給セント人ヲ派シ山林ヲ調査セシニ材料ニハ乏シカラザルモ之レヲ運材スルニ前項ノ如ク非常ノ洪水ア



ラザレバ運搬スル能ハズ遂ニ其儘中止セシト云ユリ  
 苗栗地方生蕃ヨリ伐出スルニハ重ニ後壘河(上流ハ汾水河ト云フ)ニ由  
 ル現ニ大湖地方ノ開墾地ヨリ數多ノ良材ヲ伐出シ水量ノ増スヲ待テ  
 運材シツ、アリト云フ然レモ新竹地方ノ如ク平水ノ時ニアリテハ一  
 本流シニテモ容易ナラサルヲ以テ全ク運材ヲ止ム  
 現今筏トシテ上流ヨリ容易ニ流下シ得ルハ大嵙崁河ナリ殊ニ此河ハ  
 臺北府城ノ傍ヲ流レ淡水港ニ注グヲ以テ最モ運輸ノ便アリ將來内山  
 材ノ産出ハ蓋シ此河ニ由ル最モ大ナルベシ  
 上記スルカ如ク後來臺灣北部ニ於テ内山地方ヨリ林産物ヲ搬出ス  
 ルヲ得ルハ前記大嵙崁河并ニ臺北城傍ニテ之レニ合流スル(しんじ  
 やひ)河此河流ハ遠ク數十里ノ山林中ニ源ヲ發ス及後壘河ノ三流ナリ  
 生蕃地産木材交換ヲ以テ名アルハ(えんじやひ)河岸ニアル(しんじやひ)街及

大嵙崁河岸ニアル大嵙崁後壘河岸ノ苗栗等トス  
 ○薪炭材。薪炭材ハ大抵各地至ル所ニアルモノ、如シ新竹ヨリ苗栗  
 ニ至ル沿道ニハ相思樹ノ薪炭頗ル多シ  
 鳳山縣地方ハ炭百斤四十錢薪百斤十五錢位恒春地方ハ三割方高シ  
 ○要スルニ臺灣生蕃内地ノ山林ハ之レヲ運材スルニ困難ヲ極ムルト  
 雖モ材源ハ豊富ナリト云フベシ殊ニ其最タルハ玉山及(もりそん)山(臺  
 灣第一ノ高山ニシテ我富士山ヨリ高キヲ數百尺)附近ノ生蕃ニ至リテ  
 ハ我内地ノ産木ト少シモ異ナラサル木材ヲ産セリ然シテ此等ノ林産  
 物ハ山ノ高低ニヨリ種類ノ區別アリ  
 最高所ハ秃山ニシテ次キハ樺松林次キハ杉林(他木稀ナリ)次キハ小  
 楠木檉推楠木等ノ林ニシテ最低地ハ草野ナリ  
 以上ノ類別ハ何レノ山林ニモ適應セラル、モノ、如シ



(參考) 編者ノ親友陸軍歩兵中尉長野義虎氏總督府ノ命ヲ奉シ臺灣各生蕃内地ヲ探險ノ爲メ去ル二月單身視察ノ途ニ就カル編者モ亦之レカ隨行ノ約ナリシモ南部視察ノ際ナルヲ以テ遂ニ其意ヲ果タサズ氏ハ先月無事探險ヲ終ハリ今回公用ヲ以テ歸朝セラレ有益ノ材料ヲ得タリ詳細ハ後章生蕃篇ニ記スルトシ左ニ生蕃内地山林ノ概況ヲ記ス氏ハ生蕃地ヲ東西南北ノ四蕃ニ別チ東蕃ハ臺東ヨリ花蓮港附近ニ至ル一帯ノ蕃人西蕃ハ玉山及(もりそん)山以西ノ蕃人南蕃ハ牡丹社附近ヨリ卑南ニ至ル一帯ノ蕃人北蕃ハ中界嶺以北ノ山地ニ住居スル蕃人トス

○西蕃山川ノ形狀及森林ノ大小樹木ノ種類。山ハ概テ急峻ニシテ草或ハ雜木等繁茂ス蕃人モ住居ナキ高山ニ入レバ大森林アリテ杉、松、椴、楠木等實ニ多々アリ川ハ何レモ岩石突岬トシテ平時ハ水甚タ多カラ

ズ何レモ徒涉シ得可シ是ヲ以テ材木ヲ流スニ適セス

○南蕃山川ノ形狀及森林ノ大小。山ハ急峻ニシテ雜木繁茂ス樹木概テ大ナラズ適其大ナルモノハ溪澗ニ多シ海邊ノ山ハ樹木小ナク且甚タ高カラズ川ハ概テ急流ニシテ平時水少ナク大麻里溪ノ如キハ平時ハ五米突ノ河幅二流ニ深サ膝蓋ヲ沒スルニ過キサルモ河水漲ルニ際シテハ二千米突以上ニ充滿スルコトアリ

○東蕃ノ山川形狀及森林大小ノ種類。山ハ概テ險峻ニシテ何レモ雜木及籐繁茂セリ山奥ニ入ルニ從ヒ大森林アルヲ見ル川ハ急流ニシテ清水ナク河底ハ概テ砂石トス樹木ノ種類ハ西蕃ニ異ナラス

○北蕃ノ山川形狀及森林ノ大小。山ハ稍平夷ニシテ高大ノ森林アリ楠木ハ殊ニ北蕃ニ多シ川ハ急流ナリト雖モ彼ノ大崙炭河後壘河新庄河等ノ水源ヲ發スルアリテ運材ニ多少便利ナリ



大肚溪上流北岸ニ高山アリ滿山松樹ノ鬱々トシテ繁茂スルヲ見ル大  
 概直徑二尺ヨリ三尺ニシテ平均長サ二十餘間其短カキモノト雖モ十  
 間以上ニシテ數万本ノ森林アリト云フ尙上流ニ至ラハ更ニ驚クベキ  
 大木アランモ亦未タ知ルベカラズ然シテ其種類ハ二葉ト五葉トノ二  
 種アリ二葉松ハ内地ノ松樹ヨリモ材質堅クシテ樹脂甚タ多キカ爲メ  
 建築用材トシテ或一部ニ使用スルヲ得レド五葉松ハ木理眞直ニシ  
 テ其質緻密ナレバ一見宛モ檜樹ト思ハル白太赤身皆淡赤色ヲ帶ヒ樹  
 脂モ二葉松杯ニ比スレハ非常ニ少ナク諸種ノ松樹中建築材トシテ最  
 モ優等ノ品ナリ此五葉松ハ實ニ臺灣島ノ森林ニ一大光彩ヲ添エタル  
 モノナリ樟樹ハ大凡一反歩ニ一本位ノ割合ニ生木セリト雖モ瞥見ス  
 ルトキハ楠木ト見分ケ着カサル爲メ楠木ヲ以テ樟樹ト誤認スルコト  
 アリ兎モ角臺灣ノ森林ハ中部以北ニ大山林アル耳ナラズ之レガ産木

ヲシテ搬出スル河川ノ如キモ亦北部ニ最モ便利アリ將來内地ヨリ伐  
 出スルハ北蕃産木最モ有望ト云フベシ  
 以上臺灣島内産木ノ概況ナリ左ニ現今臺灣島ノ需要大部分ニ供給ス  
 ル福州杉ニ就キ詳述セン

第貳節 福 洲 杉

當時臺灣諸官衙其他ノ建築修繕ニ使用スル用材ハ杉及「こふようさん」  
 (廣葉杉)ヲ主ナルモノトシ間々松アリ皆輸入品ニシテ松杉ハ重ニ内地  
 ヨリ來タリ「こふようさん」ハ福州ヨリ來ル「こふようさん」ハ當地ニテ「つ  
 あん」ト呼ビ漢字名杉即是ナリ新聞雜誌等ニ臺灣杉アリト云ヒシハ即  
 此「こふようさん」ノ謂ニシテ内地ノ杉ニハアテサルナリ西洋人ノ所謂  
 「ふうちやふばいん」ト稱スルモノニシテ日本産ノ杉ト同種類ナレド油  
 脂ニ富ミ香氣盛ニシテ恰モ日本ノ榿檜ノ中間ニ位ス故ニ木質ハ日本



杉ニ比シ優等ニシテ心材ノ色一般ニ淡ク材ニ樟腦ヲ含ミ断面ニ白キ樟腦ノ結晶ヲ噴出スルヲ見ル且久キヲ經テ朽ルノ患ナシ此木ハ福建省ノ山中至ル所ニ繁茂シ支那内地へ供給スルコト莫大ナリ特ニ棺材ハ一般ニ福州杉ニ限ルモノ、如クニテ米國出稼人ノ死亡ヲ葬ルニモ此棺材ヲ用ヒ香港ヲ經テ遠ク桑港へモ輸出スルト云フ杉木ヲ伐出スニハ悉ク筏トシテ閩江ヲ流下シ福州へ廻漕ス上海長江筋ノ用途芝罘天津ニ向ケ輸出スルモノ最モ多シ一昨年中輸出シタル福州杉木ハ大材貳萬二千七百五十二本小丸太二十一萬〇三百十九本板十九萬三千九百六十三方尺此價合計十八萬七千二百七十四兩一兩ハ我一圓五十二錢ニ當ル)昨年中ハ大材四千六百四十貳本小丸太十五萬二千三百六十本板四萬〇三百三十七方尺ナリ多ク香港新嘉坡(ペーなん)等ニ輸出シタルモノナリ尤右ハ單ニ漁船ニテ輸出セラレタルモノニシテ之レニ

「ジャンク(支那倭船)ニテ支那内地各港并ニ臺灣各地ニ輸出セラレタルモノヲ加フレバ實ニ莫大ニシテ毎年福建沿岸ヨリ無慮一。千。萬。兩。以上ヲ輸出スト云フ又盛ナリト云フベシ閩江ノ上流ニアル産地ノ著名ナルモノヲ屈指スレバ吉溪(福州ヲ距ル約四百清里)我六丁(一里トス)周口。建寧(福州ヲ距ル約五百四十清里)沙縣(福州ヲ去ル五百五十清里)清流(福州ヲ去ル約六百七十清里)寧化。德化。坂化。仁壽等ナリ每春季ニ至リ河水澎漲ノ候ニ於テ材木ヲ流下スルコト多シ故ニ材木相場ハ春季ヲ以テ最低トス又福州ニ在テハ一晴雨毎ニ相場ニ變動アリ遠キハ廿日近キハ十日ニシテ福州へ廻漕シ來タル冬季水涸レノ時ト雖モ一箇月ヲ經過スルコトナシ沿岸各地ニ釐金局アリ材木ノ大小金額ノ多寡ニ準シテ抽稅ス未タ稅率ノ詳細ヲ知ラズト雖モ聞ク所ニヨレバ其額非常ニ多ク且不規則不公平ノコト盛ニ行ハルト謂フ



海關稅ハ大小長短ニ論ナク丸太一本ニ付キ銀三分即チ我四錢六厘二毛板類ハ厚薄ニ關スルコトナク一千枚ニ付キ銀七錢即チ我一圓〇七錢九厘二毛ヲ徵ス木場ヨリ馬毛碇泊ノ漁船ニ積込ニハ別ニ回漕者アリテ材木代價一割四五分許ニテ受負チナス因リテ一定ノ價額ナシト雖モ過般日本商某ノ臺南ニ輸出シタルトキハ一千圓ノ材木ニ對シ積込賃百八十圓ヲ拂ヒタリ斯ハ少シク高價ニシテ實際百三四十圓許ニテ談判ツクベシ支那「ヒヤんく」船ニテ輸出スルモノハ福州マテ本船ヲ廻ハシ小船ニテ積入レチナシ出港ス左ニ材木產地ヨリ福州へ到着スル材木ノ種類ヲ列舉ス

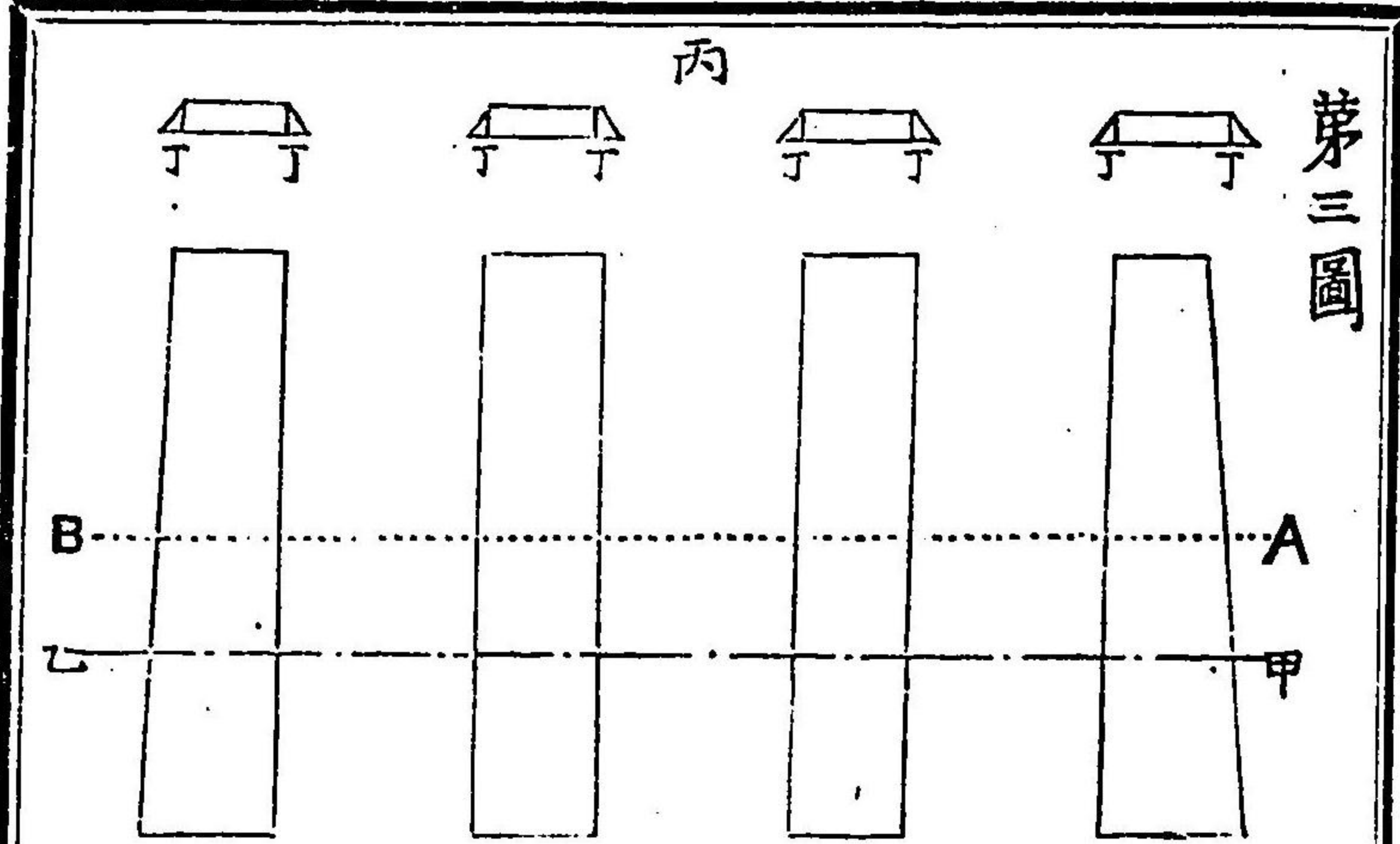
東庄八尺 尾徑九寸。六底或七寸。七底	都莫面木	七底連十六尺 尾徑一尺五寸。	都莫面木
東庄八尺 尾徑九寸。六底或七寸。七底	都莫面木	六底連十二尺 尾徑一尺六寸。	都莫面木
東庄八尺 尾徑一尺三寸。同	都莫面木	八底連十二尺 尾徑一尺。	另面二節

東庄八尺 尾徑一尺五寸。同	都莫面木	五底連十八尺 尾徑一尺一寸。	另面二節
桶木 十四底 十二尺 尾徑三寸。	另面四節	七底連十八尺 尾徑九寸。	都莫面木
桶木 十三底 十二尺 尾徑五寸。	另面二節	八底連十二尺 尾徑四寸五分。	另面二節

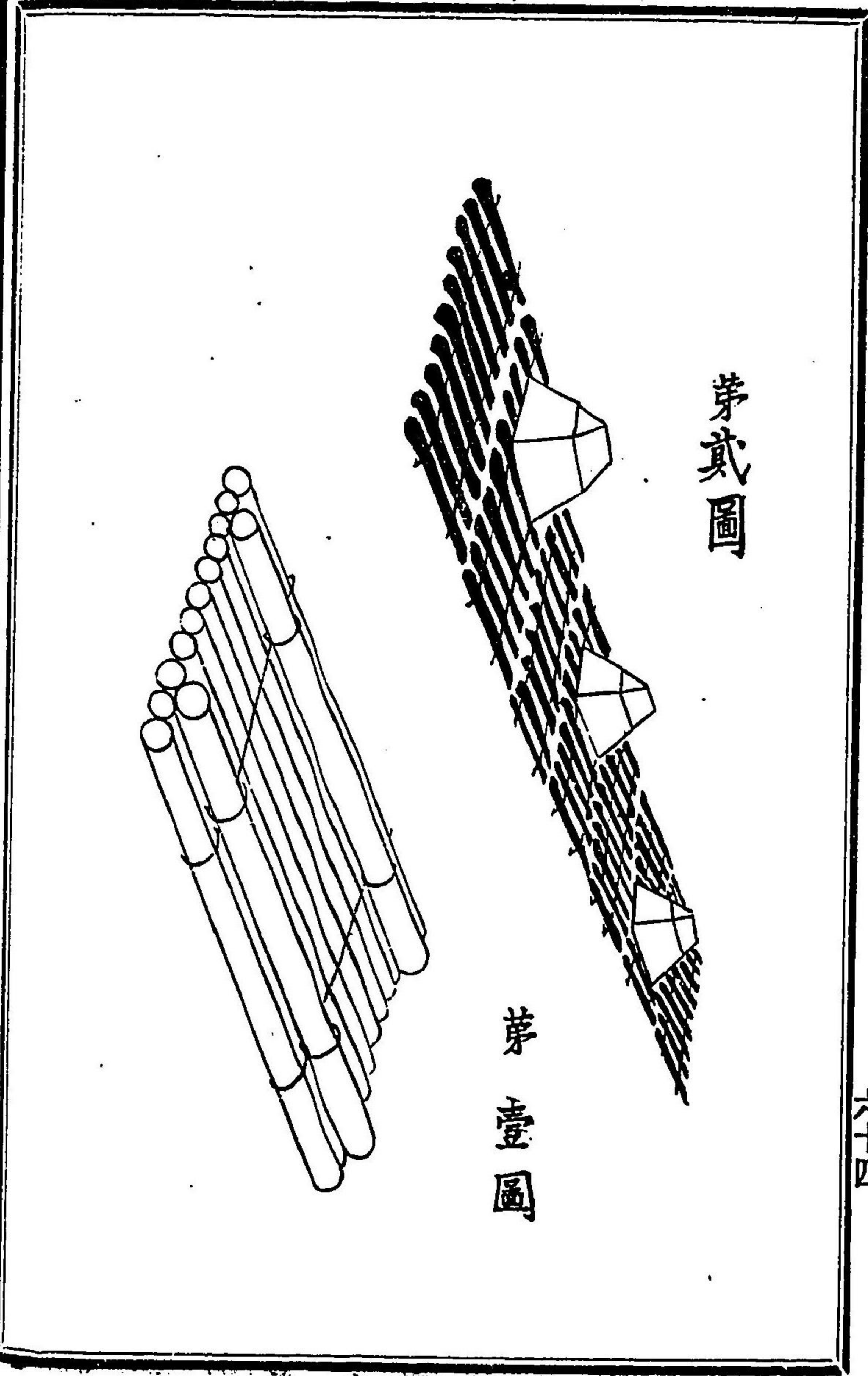
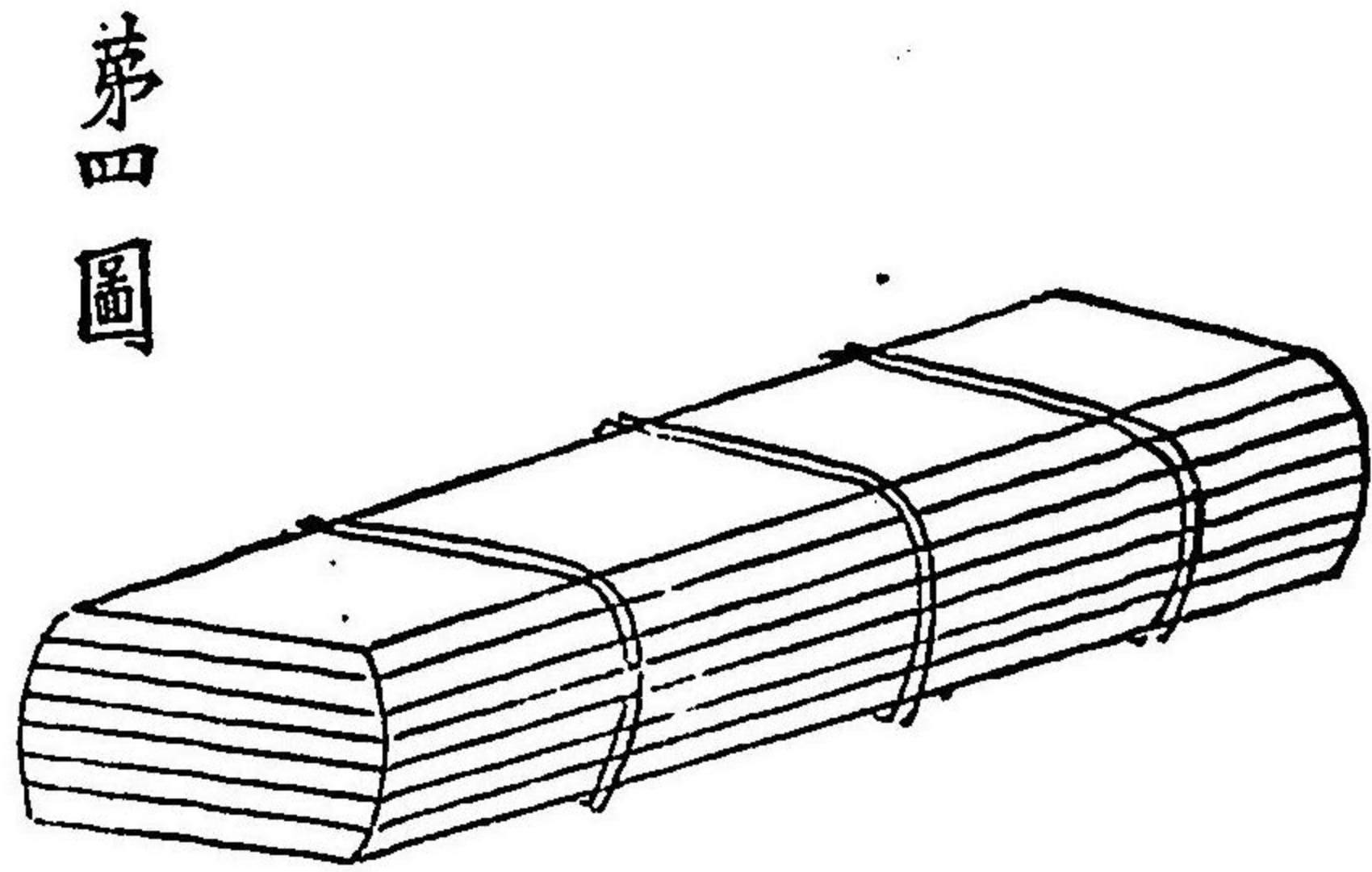
此他尙十五種アリ總計廿七種ナリ以下略之

此内東庄トハ材木ノ名稱ニシテ通常短カキモノヲ云フ尾トハ末口直徑ノ意ナリ桶木トハ細キ丸太ノ總名ナリ底トハ材木ヲ組立テタル下面ノ一列ヲ云フ十四底トハ即チ十四本並ベタルモノナリ另面二節トハ其筈ノ上ニ二本ノ材木ヲ裝置シタルモノニシテ都合十六本ナリ然シテ上ニ並ベタル材木ハ通常他ヨリ大ニシテ其下ニ位スル分ハ他ヨリ小ナリ底材ヲ連結スルニハ竹釘四本ヲ打込ミ細堅キ丸太ヲ横タヘ草ニテ結ヒ付ク上面ノ材木ハ竹繩ニテ底材ニ纏附ス詳細ハ圖ニ就キテ見ルベシ都莫面木トハ一列ノ儘ニテ上面ニ材木ヲ載セザルモノヲ





甲乙ハ板ノ元ヨリ  
 三分ノ一ノ線ナリ  
 ABハ板ノ中央ナ  
 リABノ點ニアリ  
 テハ板幅甲乙ノ點  
 ニ於テヨリ狭シ買  
 手ニアリテハAB  
 ノ點ニテ尺ヲ取ル  
 方利益ナリ



第五圖

第六圖



云フ此類ハ大形ノ丸太ニ多シ一組ヲ六個縦列シタルモノヲ一連ト名ツク當地ニテ材木ヲ購求スルニ日本流ニ末口何寸材幾百本ト注文スルハ頗ル不經濟ナリ先ヅ材木組立ノ種類ニ就キ自分ニテ見積ヲ立テ何底材木幾連ヲ購求スレバ望ノ如ク末口何寸材幾百本ト外ニ何寸材幾百本トヲ調達シ得ベシトノ勘定ヲ立テ然ル後取引ヲナスベシ又問屋ニ向テ多額ノ材木ヲ注文スルハ不得策ナリ宜シク客人ニ向テ談判スベシ客人トハ福州ヨリ山地ニ出張シテ材木ヲ福州へ廻漕シ來タルモノ或ハ山地ノ木主自カラ伐木シテ携帶シタルモノ即チ荷主ノ意ニシテ斯クハ未タ問屋ノ手ニ渡サザル材木ナレバ問屋相場ヨリハ一層廉價ナリ故ニ材木買出シノ商人ハ之ノ客人取引ヲナスヲ利益トス問屋ト取引勘定ヲナスニハ福州通用ノ番票ト名ツクルモノヲ用ユ番票トハ當地ニ於テ信用アル兩換屋ヨリ發行スル手形ニシテ我一圓銀

貨ハ番票ノ一圓〇六七錢ニ相當ス能ク注意セザレバ大ニ損失スルコトアリ又客人ト取引スルニハ銀ヲ用フ假令ハ一兩七匁八分ヲ番票ニテ支拂フトキハ一兩七匁八分ニ九匁八分五厘ヲ乘シ其レニ錢相場千五百五十文ヲ乘スレバ二七一七六一五ト成ル即チ番票ノ二圓七十一錢七厘六毛一五ナリ此ノ九匁八分五厘ハ一兩ノ相場ニシテ一兩八眞ノ一兩ニアラズ一分五厘ノ差アリ故ニ之レニ乘スルヲ要ス當地材木問屋ノ大ナルモノハ大和、昇和、榮春、怡昌、豫豐等アリ尙此外小ナルモノ十五六軒アリト次キニ山地ニ於ケル柚賃ヲ左ニ參考ノ爲メ掲ク

拾一底連丈 尾四寸 徑一尺	井一節	十五文	拾一底連 長一丈四尾 三寸徑五寸	井一節	廿五文
拾二底連丈 尾五寸 徑九寸	井一節	廿文	九底連 長一丈四尾 五寸徑一尺	井一節	卅文
拾三底連丈 尾六寸 徑一尺	井一節	廿五文	拾一底連 長一丈二尾 六寸徑一尺	井一節	五十文



九底連丈 <small>尾七寸 徑一尺三寸</small>	井一節	三十文	七底連 <small>長一丈二尾 六寸徑一尺</small>	井一節	六十文
七底連 <small>長一丈二尾 尺徑一尺五寸</small>	井一節	四十文	七底連 <small>長二丈五尾 七寸徑一尺二寸</small>	井一節	八十文
六底連 <small>長一丈二尾 尺三徑一尺半</small>	井一節	五十文	六底連 <small>長二丈五尾 七寸徑一尺六寸</small>	井一節	百文
拾四底桶木 <small>長一丈二 徑五寸</small>	井一節	十文	七底長三丈徑一尺	井一節	百文
拾三底桶木 <small>長丈二 徑六寸</small>	井一節	十五文	七底長五丈徑六寸	井一節	百廿文
拾二底長丈 <small>尾三寸 徑三寸五</small>	井一節	廿文	六底長六丈徑八寸	井一節	百六十

前表中假令バ拾底連丈井一節十五文トハ拾底組材木切り賃十五文ノ  
 意ニシテ井一節トハ福州ニテ鋸夫二人ニテ用ヒ一本ヲ伐ルト云フ意  
 味ナリ杣一名毎ニ平均毎日五百文ノ賃錢ヲ得ルヲ通例トス食事ハ自  
 辨ナリ此外ニ材木ノ伐リ株ヲ杣ノ所得ニ歸ス切株ハ根ヨリ切り取り  
 四角形ノ厚板トナシ棺ノ兩端面ヲ造ルノ用ニ供ス山林ヨリ河邊マテ  
 ノ運送ニハ土人ヲ使用ス河邊ニ於テ竹釘ヲ打込ミ横木ヲ結束シテ組

立チナス河流ヲ下ルニハ多キハ十連チ一並ベトナシ長サハ一様ナラ  
 ズ時トシテハ七八連チ縦列トスルコトアリ之レチ連續スルニハ竹繩  
 ト短カキ丸太チ以テス中央ニ高キ小屋ヲ作り内ニ寢食スベシ客人或  
 ハ手代之レニ住居シ材木ヲ管理ス水夫ハ多キハ二十名以上チ雇ヒ用  
 フルコトアリ毎日食事ヲ給スル外ニ平均三百文ノ賃錢ヲ與フ洪山橋ニ  
 達スル時始メテ連チ解キ橋下チ通過シ福州附近ノ洲灣中ニ輻湊ス若  
 シ客人ノ手ヨリ直接ニ材木ヲ購求セント欲スルトキハ宜シク此小屋  
 ニ至リテ商議スベシ材木問屋ノ之ノ客人ノ手ヨリ材木ヲ買入レント  
 スルヤ數十里河流ヲ流下スル間之ノ狹少ノ小家内ニ起臥シ初メハ法  
 外ノ附價ヲナシ漸次福州港ニ近クニ從ヒ價額ヲ上ケ最後契約ヲナス  
 ト云フ其駈引ノ永キ驚クニ堪ヘタリ  
 又材木問屋ノ所有ニ屬スル材木置場アリ能ク水害ヲ防クベシ一百連



ヲ放ツニ足ル一ヶ年約百圓ノ場代ヲ要ス然レモ少許ノ材木ヲ暫時置クニハ別ニ場代ヲ要求セズ茲ニ注意シ置クベキコトハ福洲ニテ材木一〇百本毎ニ其内四本ハ半價ニテ賣ルノ習慣アリ

福洲材木ノ時價ヲ左ニ掲ク  
本年一月中日本商某千鳥丸ニテ臺灣臺南ヘ向ケ輸出セシ材木ノ相場ヲ得タレバ參考ノ爲メ記載ス

- 杉壹丈三尺 末口平均五寸 代金四拾九錢
- 杉壹丈三尺 末口平均三寸 代金拾九錢
- 杉四分板 六尺五寸物每丈 代金壹圓〇四錢
- 杉六分板 六尺五寸物每丈 代金壹圓三十九錢

二月上旬問屋相場  
杉壹丈貳尺末口四寸 金十六錢  
杉壹丈四尺末口四寸 金廿六錢

全壹丈貳尺末口五寸	金廿四錢	全壹丈五尺末口五寸	金卅四錢
全壹丈貳尺末口六寸	金四十八錢	全壹丈五尺末口六寸	金五十八錢
全壹丈貳尺末口七寸	金七十六錢	全壹丈五尺末口七寸	金八十六錢
全壹丈貳尺末口八寸	金一圓六錢	全壹丈五尺末口八寸	金壹圓卅六錢
全一丈六尺尾四寸	金三十六錢	全一丈二尺尾五寸平直	金二圓
全全 全五寸	金七十一錢	四分板六尺五寸每丈	金一圓
全全 全六寸	金一圓十六錢	六分板 全 全	金一圓五十錢
全全 全七寸	金一圓五十六錢	一寸板 全 全	金二圓
全全 全八寸	金一圓九十六錢	一寸二分板全 全	金二圓四拾錢
全全 全九寸	金二圓四十六錢	板ハ每片幅狹キハ六寸ヨリ廣キ	
全全 全十寸	金三圓三十六錢	八一尺餘ニ至ル	
全全 全十一寸	金四圓四十六錢		



杉一丈六尺尾十二寸金四圓九十六錢  
最長自五丈至五丈五尺  
高八尺自三尺至五尺二寸  
自十圓  
至十三圓

二月上旬問屋相場

杉一丈二尺尾二寸	金十錢	杉一丈二尺尾三寸五分金	廿錢
全一丈二尺尾四寸	金二十七錢	全八尺尾一尺	金一圓七十錢
全一丈五尺尾三寸五分	金三十錢	全全 全一尺二寸	金二圓二十錢
全全 全四寸	金二十七錢	全全 全一尺五寸	金二圓七十錢
全一丈八尺全三寸五分	金五十三錢	全一丈六尺全八寸	金二圓七十錢
全全 全四寸	金六十八錢	全全 全九寸	金二圓九十錢
全 八尺全八寸	金一圓三十錢	全全 全一尺	金三圓五十錢

三月上旬問屋相場

杉一丈二尺尾二寸	金四錢八厘	杉一丈八尺尾三寸	金四十八錢
全全 全二寸五分	金八錢二厘	全全 全三尺半	金五十六錢
全全 全三寸	金十三錢	全全 全四寸	金六十二錢
全全 全四寸	金二十二錢	全八尺 全八寸	金一圓十錢
全一丈五尺全三寸	金二十五錢	全全 全九寸	金一圓三十錢
全一丈五尺全三寸五分	金二十九錢	全八尺 全十寸	金一圓五十錢
全全 全四寸	金三十六錢	全全 全十一寸	金一圓八十錢
全一丈六尺全七寸	金一圓五十錢	全全 全十二寸	金二圓
全全 全八寸	金一圓	全全 全十三寸	金二圓二十錢
全全 全九寸	金一圓五十錢	全全 全十四寸	金二圓四十錢
全一丈六尺全一寸	金三圓六十錢	全全 全十五寸	金二圓六十錢



前第二表中ニアル高量八尺トアルハ日本ニテ云フ目通リト同一意ニシテ長キ丸太ハ元口ヨリ八尺ノ所ニテ其周圍ノ寸尺ヲ取りタルモノナリ或ハ六尺ノ點ニ於テスルノ風モアリ次ニ板ヲ造ル木挽賃ヲ調査スルニ假ヘバ四分板六尺五寸ノモノハ其幅モ亦六尺五寸ニテ價何程一丈モノナレバ其幅モ一丈ヲ以テ算スル法ナリ一丈ノ木挽賃約三百文ナリ板ノ厚薄ニヨリテ差アルコトナシ板ヲ造ルニハ大抵丸太末口一尺モノヲ用フルコト多シ之レヲ挽キテ幅六寸ヨリ一尺迄ノ板ヲ造リ圖ノ如ク竹纏ヲ嵌メ運搬ニ便ニス

板幅ヲ測ルニハ元ヨリ三分ノ一ノ點ニ於テ寸尺ヲ求ム圖中甲乙ノ線是レナリ二分ノ一ノ處ニ於テスルハ甚タ稀ナリ板ノ並べ方ハ圖中丙ノ如シ此法ハ買方ニ於テ大ヒニ損スル所ロアリ畢竟丁ノ部分丈ケハ不用ニ屬ス因ニ附ス福州材木商ノ使用スル尺ハ日本ノ曲尺ヨリ短カ

キコト四五厘ナリ多キモ一分ヲ越ユルコトナシ

福州ニハ杉木ノ外ニ松樟福圓肉樹(龍眼肉樹)アレハ輸出スルニ足ルモノナシ松ノ如キハ生長速カナレハ大木ニ乏シク日本内地ノモノヨリ木質疎鬆ニシテ油脂少ナク頗ル脆弱ナリ全ク杉木ト反對ス通常ノ薪炭トシテ用ユ樟木ハ到ル所ロノ山林ニ繁茂ス然レハ海岸ヲ距ルコト遠キカ故ニ樟腦ノ精氣ヲ含有スルコト少ナク先年日本人某福州ニ來タリ内地ニ日本風ノ釜ヲ設ケ樟腦製造ヲ試ミタルカ結晶ヲ得ルコト少ナク唯々少量ノ油ヲ取りタルノミニテ大ヒニ損失セリト云フ當地ニテハ專ラ樟板ヲ製シ器具ヲ造ルノ用ニ供ス福圓肉樹ハ堅牢ニシテ我内地ノ櫪ニ類似ス船具等ヲ造ルノ用トナス

棺材ニ用ユル材料最良ナルハ汀洲柳洲産ニシテ天下第一ト稱セラル皆チヤンク船ニテ輸出ス上等ハ一組三百圓以上價スルモノアリ



福州ニ於ケル杉木ノ現況大略斯ノ如シ然ルニ目今臺灣ニ於ケル該材ノ相場戰爭後緊急工事ト需要供給ノ差ヨリ非常ニ暴騰ヲ來タシ從前ノ三倍餘ニ達スト云フ然レモ我國ヨリ持來ル材木ハ運賃ノ不廉ノ爲メ競爭場裡ニ勝ヲ占メ得難ク支那商人ニ壟斷ノ利ヲ私セラル概嘆ノ至ニ堪ユズ今左ニ臺灣ノ三要地ニ於ケル福州杉ノ相場ヲ示ス

臺北相場

臺北艋舺江瀨街豐美號益生號ニテ取調

杉木	長	十二尺	末口	五寸	每本	金壹圓貳拾錢
全	全	十四尺	全	四寸	全	金壹圓拾錢
杉板	全	八尺	壹寸	五分板	每枚	金六拾五錢
全	全	全	八分板	全	全	金二十八錢
全	全	全	六分板	全	全	金二十四錢
全	全	全	四分板	全	全	金十七錢

臺南相場

臺南杉行街源泰商行ニテ取調

杉木	長	壹丈七尺五寸	末口	五寸	每本	金貳圓五十錢
全	全	壹丈五尺五寸	全	六寸	全	金貳圓六十錢
全	全	壹丈三尺五寸	全	三寸五分	全	金壹圓二十錢
杉板	全	八尺八寸	巾厚	八寸	五枚ニ付	金壹圓六十五錢

鳳山相場

杉木	長	二丈	末口	四寸	每本	金二圓也
全	全	全	全	三寸	全	金一圓四十錢
全	全	一丈六尺	全	三寸	全	金一圓也
全	全	全	全	二寸五分	全	金九十錢
全	全	一丈四尺	全	三寸	全	金九十錢
全	全	全	全	二寸五分	全	金八十錢



杉木	長一丈二尺	末口三寸	金八十錢
杉板	全六尺板	六寸厚	金五十五錢
全	全	五寸厚	金五十錢
全	全	三寸五分	金四十錢

○淡水港輸入木材ノ稅關稅率

第八種 竹木藤椰類

桅	重木	長不過四十幅地	每根	四兩
全	全	全六十幅地	全	六兩
全	全	全六十幅地	全	十兩
全	輕木	全不過四十幅地	全	二兩
全	全	全六十幅地	全	四兩五錢
全	全	全六十幅地	全	六兩五錢

梁	重木	長不過二十六幅地 四方不到十二因制	全	一錢五分
圓梁材		或按以上重木梁每根完稅每值百兩抽稅五兩		
輕木梁		即係輕木板厚陸因制以上者	全	全
重木板		長不過二十四幅地 寬十二因制厚三因制	每百根	三兩五錢
重木板		長不過十六幅地 寬十二因制厚三因制	每百斤	二兩
輕木板		廣東厚以三因制檢訂	每千幅地	七錢
		東洋厚以一因制之若干成以七錢ノ訂數按成檢計		
		美國等頃厚以一因制爲準多則按照加算		
板	麻栗樹	長濶方圓	每幅地	三分五厘
各色竹竿			每千觔	五錢
樟腦			每百觔	七錢五分

○雜件。臺灣ニ於ケル福州杉ノ賣買ハ前項記載ノ通り別ニ我内地ノ



如ク尺ノ計算法ヲ用イテ計算スルニアラズ多數ノ賣買ト雖凡皆一本ツ、價值ヲ定メテ販賣ス

臺北臺南ニ於ケル福州杉ノ木挽賃平均左ノ如シ

下等ハ食料自便ニテ一日十六錢ヨリ廿錢マテ

上等ハ同 上ニテ一日廿錢ヨリ廿五錢ニ至ル

臺南ニ於ケル第一等ノ材木店ハ源泰號ナリ蓋シ臺灣嶋中屈指ノ商店ナルベシ此店ニテ一年ノ平均賣上高三万圓内外ナリト尤他ニテノ風説ナルヲ以テ未タ信スルニ足ラズト雖モ以テ大畧ヲ推知スルニ足ル

(附言)支那人種ハ自店ノ販賣高等ハ商業上ノ秘密トシテ決シテ之レヲ他人ニ告グルコトナシ一ハ從前支那政府ニ於テ販賣高ノ多キ商店ヘ不當ノ課稅ヲ賦セシ結果ニモヨルナルベシ

### 第四章 都會及開港場

#### 第壹節 都府市邑

臺灣總督府令ヲ以テ定メラレタル縣島廳並ニ支廳ノ位置ヲ左ニ掲ク

##### 縣島廳ノ位置

臺北縣 (舊淡水)

臺南縣 (舊安平)

臺中縣 (舊彰化)

澎湖島廳 (舊澎湖島)

##### 支廳ノ名稱位置

臺北縣淡水支廳 (縣淡水)

臺北縣基隆支廳 (縣基隆)

全 新竹支廳 (縣新竹)

全 宜蘭支廳 (縣宜蘭)

臺中縣鹿港支廳 (縣彰化)

臺中縣苗栗支廳 (縣苗栗)

全 雲林支廳 (縣雲林)

全 埔里社支廳 (縣埔里社)

臺南縣嘉義支廳 (縣嘉義)

臺南縣鳳山支廳 (縣鳳山)

全 恒春支廳 (縣恒春)

全 臺東支廳 (縣臺東)



臺灣島ノ政治ヲ司トルハ以上ノ三縣一廳十二支廳ナリ今左ニ各都邑ニ就キテ詳述セン

●臺北府。臺北府ハ臺灣總督府ヲ置カレシ所ニシテ府城内及ヒ大稻埕艋舺ノ三市街ヲ以テ成リ戶數三所ヲ合シテ凡六千人口凡七萬商工ノ繁盛ナル臺灣ノ北部ヲ壓倒シ遙ニ臺南府ト相對峙ス  
府城。府城ハ光緒八年(明治十五年)劉銘傳ノ築造スル所ニシテ清國風ノ建築ナリトス其城凡半哩四方周圍凡ソ二哩ニシテ東西稍ヤ狹ク南北稍ヤ長キモ殆ント方形ナシ城壁ノ高サ十八呎厚サ十二呎其上部ハ凹凸狀ヲ成シ以テ射彈ニ便ニス壁ハ全跡石ヲ以テ疊ミ宏壯堅牢ニシテ五門ヲ開キ南方ニ二門東西北各一門アリ舊臘土匪ノ起ルヤ賊數千人門外僅々十數間ノ近クマテ攻寄セシメ之ノ堅牢ナル城壁ノ爲メ進入スルトナ得ス城樓ヨリ狙撃セラレテ退ケリ又以テ其宏壯ナルヲ

知ルヘシ

地勢空濶四顧遙カニ數里ヲ隔テ高サ貳千呎ノ高山アリト雖モ西南ハ平野開ケ淡水河洋々トシテ城下ヲ繞リ城西ヲ灣流ス  
城内ニハ舊政府巡檢衙門及布政使衙門ヲ始メ其他ノ官署アリ建築孰レモ宏壯美麗ナリ衙街正整ナレモ住民少ナク商工繁盛ナラズ大稻埕艋舺專ラ商工ノ域タリ家屋ハ皆官設ニ成リ比例的清潔ナル長屋形ノ二階建ニシテ戶數凡五六百戶其人民ニ貸與スル所ノ家賃從前一ヶ月凡四弗内外ナリシト云フ目今ハ城内ハ殆ト日本人ヲ以テ充タサレ恰モ内地ト異ナルヲナシ  
現今城内ニハ總督府ヲ始メ臺北縣廳兵營病院アリ然リト雖モ城内ニハ今尙空地アリ其三分ノ一ハ水田ニ屬ス  
艋舺。艋舺ハ臺北府城ノ西門外城壁ニ沿ヒ西南河岸ニ一大街アリ戶



數大凡三千センサウ艇舢ト稱ス從來淡水廳中第一ノ大鎮ト稱セラレシ所ニシテ參將兼水師營等ノアリタルハ即チコノ所ナリト云フ

市街ハ商店櫛比街衢陋穢支那市街ノ眞面目ニシテ頗ル熱鬧セリ

臺北地方ノ輸出物産ハ一先此地ニ集合シテ輸出サレ又臺北地方ニ輸入スル物品ハ此地ヲ經テ分配サレ輸出入貨物ノ集散地タルヲ以テ其地富豪家少ナカラズ大資本ヲ擁シテ商業ニ從事スルモノ多ク商業頗ル繁盛ニシテ其重ナルハ藥種商及西洋小間物商ナリトス

近傍平地ニハ孟宗竹繁茂セルヲ以テ之レヲ材木ニ代ユ椅子其他ノ器具ヲ作ルモノ多ク又市街ノ河流ニ瀕スル所ニハ竹ヲ以テ作りタル家屋多シ此地河流ニ瀕シテ舊來ノ碼頭アルヲ以テ岸頭ニハ清國形小ナル船舶常ニ數十隻幅輳シテ其貨物ノ出入頗ル巨額ナリトス

大稻埕。大稻埕ハ府城北門外ニアリ艇舢ノ下流凡ソ一哩(しんしゃび)

大姑陷二流ノ合スル所ニアリ戸數凡ソ二千餘此地亦舊來ノ碼頭ニシテ市街艇舢ト同シク陋穢ナルモ百貨輻輳商業繁盛ニシテ廣東福建ノ商賈多ク商家櫛比ス光緒二十年(明治廿七年)在淡水英國領事館舎ノ修繕工事ヲ施スヤ英國領事(ダブルユーポーランド)氏ハ臺灣巡撫ニ通牒シテ此地ニ邸宅ヲ求メ且國旗ヲ掲ケシカ巡撫ハ儀式ニヨリテ(ポーランド)氏ヲ訪ヒ以テ此地ニ於ケル外國人ノ居住權ヲ公認シタリキ故ニ外國人ノ居住スルモノ次第ニ多キヲ加ヘ大稻埕ノ内六館街建昌街ヲ居住地トシ總テ洋風ノ建築ニシテ最モ多キヲ茶商トス其他西洋雜貨店アリ小間物屋アリ洋酒屋アリ他ノ街路ニ比シテ清潔ナリ

此地ハ内地ニテ産出スル茶ノ集散地ニシテ之ヲ製造荷造リシテ淡水ニ出スヲ以テ製茶季節ニ至レバ島内ノ各地及清國各地ヨリ集合スル職工男女凡ソ二萬人ノ多キニ及ヒ其業頗ル盛ニシテ廣東商人ノ茶店



十數戸洋人ノ茶店七戸アリ

●宜蘭。宜蘭縣ハ基隆ノ東南六十二哩半ノ處ニアリ戸數凡二千、人口六千許、東南ハ海ニ面シ西方ハ山ヲ負フ

宜蘭ハ今ヲ距ル二十二年前同治十四年(明治七年)ニ至リ生蕃開拓ノ議アリ遂ニ本縣ヲ設置セラレタルモノナリ城ヲ繞ラスニ土壁ヲ以テシ且竹樹ヲ密植シ外ニ狹窄ナル外壕ノ外亦河流ノ分岐シテ城ヲ擁スルアリ城門四ヲ開ク縣衙門及文武諸衙門等ノ舊跡アリ此地方ハ熟蕃多クシテ其風俗大ニ蕃風ニ近ク男子ハ土人ノ服ヲ着スト雖モ女子ハ大幅ノ布ヲ肩ヨリ腰邊ニ引キ廻シ頭髮ヲ辨シテ後部ニ垂レ額ニ文スルモノ多シ言語モ亦異ナレモ土語ニテ通スト云フ市舖ハ洋布、米穀、木炭、魚類、鹽類、藥物等ヲ鬻キ熟蕃ニ供給ス

○加禮遠港。此地ハ唯人口ノ處々ニ散點スルヨリ總計四百ニ過キス

基隆ヨリ此地ニ至ル陸路十哩ニ及ヒ且道路不完全ナルヲ以テ陸行甚タ不便ナルモ基隆港ヨリ漁船ヲ以テ本島ノ東北岸ヲ廻航スルトキハ凡ソ六時間ニシテ到着スルヲ得ベキノミナラズ此地水深クシテ碇繋ノ利アルヲ以テ蕃地トノ交通上最モ樞要ノ所ナリトス

○蘇澳港。此地ハ加禮遠ヲ距ル南六哩ニアル本島東北岸ノ良港タリ此港ハ戸數僅カニ二百、人口凡ソ六百ニ過キスト雖モ近傍ヨリ木材、鹿皮及藤等ヲ産シ蕃地トノ交易場ニシテ北部地方ヨリ至ルモノハ陸路困難ナルヲ以テ大抵海路ヲ取リテ加禮遠港或ハ此ニ至ル故ヲ以テ支那船常ニ港頭ニ輻輳シ又時ニ外國船ノ來タリテ此ニ木材ヲ積ムアリ鹽稅關ノ設ケアリ又兵營ヨリ近傍ノ山上ニ特ニ兵ヲ派シテ生蕃ノ來襲ニ備ヘタル所アリ

○水邊脚。此地ハ基隆ヨリ臺北ニ至ル街道中ニアリ臺北ヲ距ル東十



哩半基隆ヲ距ル西北九哩半殆中間ニ位ス戸數五六百、人口二千五百許  
小市街ヲ爲シ人家連擔稍富色アリ亦停車場ノ設ケアリ其西南ノ高地  
ニ長堡壘ノ墟跡アリ要衝ノ地トス

○大姑陷。大姑陷河ノ支流ヲ溯リ東岸ニ一市街アリ之レ即チ大姑陷  
ナリ市街ハ平ナル岳上ニ位シ人口凡ソ二千アリ樟腦ノ產地ヲ以テ有  
名ナリ此地生蕃ト交易ヲナスノ中心市場ニシテ商業最モ盛ナリ

●新竹。臺北府ヨリ西南四十哩半計リ此間桃仔園中歴(桃仔園ハ人口  
六千中歴ハ人口二千)等ノ小市街アリ前ニハ淡水縣ヲ此ニ置キ臺灣北  
部ノ首府トセシカ今ハ新竹縣トシテ單ニ苗栗ト淡水トノ中間ニ位セ  
リ縣城ハ臺北府ニ等シク稍ヤ小ニ且ツ古ビタルノミ石及煉瓦ヲ以テ  
繞ラシ高サ凡三十呎城内ニ新竹縣衙門、兵營、練兵場アリ城外ハ田圃遠  
ク開ケテ農業頗ル盛ニシテ人口一萬餘鐵道線路ノ最終點ナリ

○大甲港。大甲港ハ新竹ノ南四十哩大甲河ヲ距ル一哩餘ノ處ニアリ  
戸數凡ソ八百人口四千五百アリ市外ハ繞ラスニ石造ノ墻壁ヲ以テシ  
四方ハ茫々タル平野ナリ城内ニハ大甲司其他ノ衙門舊跡アリ此地ヨ  
リ臺灣蔗ヲ産ス即チ(アンペ)ナリ其製精密雅致アリ最モ夏時ノ數物  
ニ適シ其良品ニ至リテハ一枚數十圓ノモノアリ

●苗栗。苗栗縣ハ新竹ノ南ニアリ新創ニ屬ス縣廳アリテ未タ縣城ナ  
シ市外ハ舊苗栗及新苗栗ヨリ成ル舊苗栗ハ其主ナルモノニシテ縣廳  
附近ヲ新苗栗ト云フ相距ルコト我六丁餘人口二三千ナルベシ繁華云  
フニ足ラズ抑モ地圖上ノ苗栗ハ遙カニ山河ニ僻在スレトモ其實ハ海  
岸ヲ距ルコト僅カニ一里餘ニ過キズ思フニ蕃地ニ接近セシ故ニ山間  
ニ僻在セシ如クニ誤解セラレタルモノナルベシ

●彰化。彰化縣ハ我臺灣縣ヲ置カレタル所臺灣中部ノ首府タルヲ失



ハズ縣城ハ空漠ナル水田中ニ築造セラレ八卦山ノ一角僅カニ城南ニ臨ミタルノミ城ハ四門ヲ東西南北ニ開キ大道ヲ通ス城壁ハ煉化ヲ以テ築キ高サ三十呎厚サ十二三呎アリ然レモ粗朴見ルニ足ラザルモ臺北新竹ノ構造ニ異ナルコトナシ壁ノ内外泥地多ク萬古不換溷濁采ヲ成ス瘴氣毒ノ烈シキ臺灣ニ冠タルモノ之レカ爲メナリ市街ハ狹クシテ陋住民二萬計亦タ貧弱ナリ然シ此地ハ三面皆平地ニシテ且水利アリ故ニ農事夙ニ開ケ米穀ノ產出頗ル多ク南方臺南府ユハ牛車相通ズ

◎臺灣府。臺灣府ハ彰化縣ト大肚溪ヲ隔テ、五里餘ノ上流ニ在ル東大墩ト稱スル地ニシテ光緒十一年(明治十八年)臺灣ヲ福建省ヨリ分離シテ獨立ノ一省トナセシ際前巡撫劉銘傳ノ奏議ニヨリシモノニシテ蓋シ其地全島ノ中央ニ位シ南北控制ノ要地ヲ占ムルヲ以テナリ然レモ未タ此ニ省城ヲ建築シ市區ヲ構成スルニ至ラズシテ劉去リ尋テ

邵友濂代リテ巡撫トナルヤ此地ヲ首府トスルヲ不便トシテ終ニ首府ヲ臺北府ニ移シ此地ハ唯臺灣府ノ名ヲ止ムルノミトナセリ

●鹿港。彰化縣ノ西南三里ノ海岸ニ鹿港アリ商業繁盛戶口彰化ニ過キ殷富多シ而シテ未タ支廳ノ設ケナカリシカバ先ツ臺灣縣ヲ鹿港ニ置キ彰化支廳ヲ彰化縣ニ置クトナレリ然ルニ今回ノ改正ニヨレバ臺中縣ヲ彰化縣臺灣ニ別ニ彰化ト鹿港ニ一支廳ツ、ヲ設ケラレタリ此港ハ遠淺ニシテ船舶ノ碇泊ニ不便ナルモ中部地方ニ於テハ他ニ良港ナク戰時中モ此港ニテ荷物ノ陸揚ケヲナセリ彼ノ明治十七年清佛戰爭ノ際佛ノ提督「くるべ」臺灣ノ各港ヲ封鎖スルヤ臺灣内地ノ狀況ヲ報導シ或ハ軍需品ヲ密輸セシハ此港ナリト云フ

●埔里社。埔里社應ハ村落ノ稍大ナルモノニ過キスシテ本道上ヨリ四五里ノ東方ニ僻在シ共ニ政教ヲ蠻民ニ及ホスノ政畧ヨリ縣治ヲ置



カレタルモノ、如シ此地生蕃トノ交易ヲ以テ有名ナリ

●雲林。雲林縣ハ元ト舊雲林ト稱スル所ニ設ケラレタルカ如キモ今ハ斗六門ト稱スル所ニアリ人口繁華共ニ一大村落タルニ過キサレモ縣廳ハ巍然タルモノアリ彰化嘉義間ニ通スル本道ヨリ凡ソ二里ノ東方ニ僻在セリ此地生蕃トノ交易ヲ以テ有名ナリ特ニ樟腦ヲ產出ス

●嘉義。嘉義縣ハ古ノ諸羅縣ニシテ彰化ト共ニ舊來ノ縣治タリ縣城ハ廣漠ナル原野ノ間ニ建築セラレ石造ノ牆壁ヲ繞ラシ壁外ニ壕渠アリ城壁ノ高サ凡武十呎厚サ十五呎城門四個アリ大道ハ北門ヨリ城内ヲ貫キテ西門ニ通ス此地高爽ノ土地ニ位シ水質大氣共ニ不良ナラズ内外ノ景光亦タ頗ル清快ニシテ最モ邦人ノ生活ニ適セリ人口凡武萬彰化台南間ノ一大鎮城トス

◎臺南府。台南府ハ台北府ヲ距ルコト南百九十哩台灣島ノ西海岸

ニアリ西北三哩ニ安平港ヲ控ヘ南方海路廿四哩ニ打狗港アリ今ヲ距ル三十七年前安政五年(清英條約ニヨリ開港場トセラレ)

城ハ方形ニシテ周圍凡三里餘城壁ハ石ヲ以テ築キ高サ凡廿呎厚十二三呎アリ各方面ニ銃眼ヲ穿チ大東、小東、大西、小西、大南、小南、大北、小北ノ八門アリ城ハ今ヲ距ル百七十二年前雍正元年ノ建築ニ係リ後今ヲ去ル百七年前乾隆五十三年之レヲ修築シテ費用十二萬四千兩ヲ要セリト云フ人口約十萬ヲ過キ本島ヲ獨立ノ一省トセシマテハ即チ本嶋ノ首府ニシテ其繁華ハ全臺ヲ壓倒スベシ

本府ハ東南北ノ三面砂地多クシテ沃土少ナク西南ハ海ニ面シ土地頗ル軟鬆ニシテ其地勢ハ隘窄ナリ故ニ彰化嘉義兩縣ノ如ク田畝平衍ニシテ廣沃ナルニ比較スルヲ得ズ然レモ此砂土ナルカ爲メニ甘蔗ノ栽培ニハ甚タ適合セリ南方鳳山縣ニ通スルニハ大橋頭ヨリ阿公店ニ至



ルヲ順道トシ北方嘉義縣ニ達スルニハ船仔頭ヨリ瑞仔來ニ出スルヲ  
 大路トス西門ヨリ安平港ニ至ル大路ハ陸軍工兵隊ノ修繕ニヨリ其幅  
 七八間ノ大道ナリ  
 市街ハ他ノ衢路ニ比シテ清潔道路狹隘ナレハ皆敷クニ石ヲ以テシ廓  
 内ニハ豪商大賈ノ家屋及官衙孔廟成廟即チ鄭成功ノ廟ナリ頗ル壯嚴  
 ナ極ムアリ城外ハ南西部ヲ除クノ外耕地ニシテ此ニ練兵場アリ演武  
 亭等アリ  
 城内繁華ナル街衢ハ竹仔街、下橫街、打銀街、草花街、內宮街、外宮街、十三鋪  
 街、武館街、帽子街、上帝街等トス  
 城ノ内外所々ニ古壘數多アリ相傳フ古昔蘭人ノ占據セルトキ築造セ  
 ルモノナリト其安平ニアルモノ最モ大ニシテ所謂赤嵌城即チ是レナ  
 リ千六百三十三年(今チ距ル二百六十二年)ニ建築セルモノニシテ各方

約六十碼墻壁極メテ厚ク瓜哇ヨリ運搬セル小磚石ヲ以テ築キ墻上多  
 ク銃窓ヲ開ケリ唯歲月ノ久キチ經タルト屢々地震アリシトニヨリ惜  
 ムラクハ概子破壊セリ  
 城外南方海岸ニ近キ所ニ廣大ナル市場アリ塵埃街ニ漲リ陋穢城内ノ  
 比ニアラス然レハ商業頗ル盛ナリトス  
 中華紀行ニヨレバ台南府ノ市街ハ海ヲ距ルヲ甚タ近ク古ニアリテハ  
 市街ノ郭壁直ニ波濤ニ沈ミ十七世紀ノ頃マテハ和蘭及清國ノ艦船皆  
 市街ニ横付スルコトヲ得タリト然レハ現今此府ノ碼頭タル安平ハ府  
 城ヲ距ル三哩ノ地ニアリ城ノ西門外ヨリ運河アリテ安平ノ碇泊船ヨ  
 リ貨物ヲ小舟ニ移載シ以テ之レヲ府城ニ致セリ  
 電線ハ全島ノ南北兩部ニ通スル耳ナラズ安平港ヲ經テ海底線ノ澎湖  
 島ニ通スルアリ



南部臺灣ノ氣候ヲ概言スレバ外國人殊ニ完全ナル家屋ニ住スルモノニ取リテハ極メテ健康ニ適スト言フベクシテ(マラリヤ)熱ノ如キ時々コレアリト雖モ激症ノモノ少ナク病者ハ少ニシテ虎列拉病ハ未タ曾テ知ラレサル所ナリ尤モ土民中ニハ其不潔極マル生活ニヨリ發生スル下痢及(マラリヤ)ノ如キ疾病多キコト固ヨリ疑ナシ殊ニ近年開拓シタル藪林中ニ多シ

夏日ハ酷暑ノ際ト雖モ室内華氏百度ヲ上ルコトナシ故ニ家屋ノ構造ニヨリ堪ヘ難キ程ニアラサルモ霖雨連日ニ亘リ戶外ニ寸歩ヲ移ス能ハサルハ勿論大陸ト汽船ノ交通絶エテ世界ノ消息ヲ得サルノ不便ニハ最モ西洋人ノ困難スル所ナリ

此地十月以後ハ北東ノ恒信風吹初メ天氣晴朗トナリ夜涼漸ク催シ十二月ヨリ翌年五月マテハ天候全ク長閑ナリ颶風ノ來タルハ甚タ少ナ

シトス

○阿公店。阿公店ハ臺南ヨリ南七里許ニシテ人戸五六百商業繁盛ナル土地ナリ

○南仔坑。南仔坑ハ北臺南ニハ目下軍隊用輕便鐵道アリ南打狗ニモ同シク布設セラレ中間ノ驛路ナリ戸數三千人口壹萬餘アリ日需品ニハ欠亡スルコトナシ

●鳳山。鳳山縣ハ臺南府ヨリ南十七里許ニアリ今ヲ距ル百七年前林乱ノ平キタル後直ニ之レヲ置キタルモノニシテ城壁ハ土ヲ以テ築キ高サ七呎厚サ三呎余ニ過キス數多ノ銃眼ヲ穿チ城内ニ五門アリ但シ城壁ハ所々斷續シテ不完全ノモノナリ此地戸數四千、人口貳萬餘兵營法院支廳等アリ

○東港。東港ハ下淡水河ノ河岸ニアリ戸數千餘人口五千餘アリ此地



米ノ産出ヲ以テ最モ名アリ尙此外拾萬担ノ砂糖ヲ年々産出スト云フ  
鳳山ヨリ此地ニ至ル七里餘ニ過キス

○坊寮。此地ハ東港ノ南八里許漁業ヲ以テ有名ナリ編者此地ニ遊ヒ  
シ頃漁業ノ盛ナル時ナリシカ此土地ノ漁人耳ナラズ遠ク小琉球島ヨ  
リ出稼シ居ルモノアリタリ(小琉球嶋トハ台灣ノ屬島ニシテ全島民皆  
漁業ニヨリテ生活ヲナス)戸數千餘人口五千餘アリ

●恒春。恒春縣ハ極南ノ地ニ位シ明治七年役ノ頃マテハ猶草莽ノ中  
ニ在リシト云フ自來清政府ニ於テモ防禦ヲ擣ヘ城壁ヲ脩メ其堅牢ナ  
ル臺南鳳山ニ劣ラズ然レモ戸數漸ク二百ニ足ラズ微々タル一寒村ニ  
過キズ

之ヨリ以南又記スルニ足ルベキナシ唯一二熟蕃生蕃アレモ此等ハ皆  
後章生蕃編ニ讓ル

●臺東。臺東縣ハ恒春ヨリ通ス果シテ如何ナル土地ナル哉ヲ知ラズ  
生蕃ノ中央ニ位シ未タ其詳細ヲ知ルニ由ナシ

第貳節 臺灣ノ開港場

臺灣ニハ四個ノ開港場アリ基隆淡水ノ二港本島ノ北部一半ノ貿易ヲ  
支配シ安平打狗ノ二港ハ南部一半ノ貿易ヲ管掌セリ而シテ臺北ノ商  
業ハ淡水基隆之レカ門戸ヲナシ安平打狗ノ二港ハ臺南府ノ門港ヲ主  
トル故ニ本嶋ノ南北各半ノ産物ハ自カラ兩斷シテ四所ノ海港ニ集マ  
ルヲ以テ此ノ四港ノ貿易景況ヲ察知スルヲ以テ全島ノ商業如何ヲ知  
ルヲ得ベシ今左ニ四港ノ狀況ヲ記述セン

●基隆(鷄籠或ハ岐籠ト種ス)。基隆ハ臺北府ヲ距ル東北貳十哩ニアリ  
山岳重疊港ノ背後即チ東西南三面ヲ擁シ北ニ向テ兩線ノ岬角アリ港  
ノ廣サ凡一哩半ニシテ灣入凡ソ五哩ニ及ブ港内ノ深サ四尋乃至六尋



ニ達ス唯タ港口北ニ向テ開クヲ以テ北東ノ風ノ強キ時ハ激浪侵入シテ碇繫ニ便ナラズト雖モ全島第一ノ良港ニシテ鐵道ハ直ニ臺北府ニ達シ且水路臺北府ヲ經テ新庄淡水ニ通ス淡水ヘノ陸路僅カニ一日程(三十貳哩)ニ過キズ八重山列島ヲ距ル西北西凡百貳十海里トス

此地ハ往昔本邦人ノ占據セルコトアリ西班牙人又嘗テ此地ニ移往シ當時一村落ヲナシ今猶港口ノ一島ニ西班牙人ノ築造セル保砦ノ遺跡アリ後和蘭人來タリテ之レヲ逐ヒ後チニ鄭芝龍代リテ之地ニ據ル古來廈門及福州地方トハ最モ通商ノ盛ナル所ナリ千八百六十三年(今ヲ距ル三十二年前)三月開港場トナリテヨリ市街漸ク繁盛ニ赴キ戶數三千、人口貳萬ニ過キズ人家櫛ヲ連テ多クハ煉瓦造トス但元來平地ニ乏シキ所ナルヲ以テ街衢ハ幅凡ソ五米ニシテ市内ニ電信局、稅關支廳或ハ外國商館數戶アリ未タ繁盛ナル商況ヲ呈セズ然レモ市中ノ小商買

ノ市場ニ至リテハ終日雜鬧セリ

此地ハ有名ナル石炭礦ノ所在地ニシテ坑數七十餘アリ其重ナルモノハ港ヲ距ル凡ソ二哩八斗ト云フ所ニアリ現ニ機械及鐵道ヲ布設シテ採掘シ居リシ跡アリ

當港ノ氣候ハ每年十一月ヨリ翌年四月頃マテ北東ノ恒信風勁吹スル衝ニ當リ此間ハ雨ヲ來タスコト常ナリ然レモ夏期ハ概テ好天氣ナリ

●淡水(滬尾又ハ里盆口ト云フ)。淡水港ハ臺北ヲ距ル凡ソ我五里許淡水河ノ海ニ注ク所ニアル一港ナリ戶數千戶許河ノ東岸ニ連リ背面ニ透迤タル山脉ヲ負ヒ前面ニ清々タル河流ヲ控ヘ對岸ハ峨々タル山骨高ク雲表ニ聳エ之レ即チ觀音山ナリ直立千有尺北方ハ遠ク外洋ヲ望ムベシ河口ノ寬サ凡十七八丁常ニ數十ノ支那船ト三四ノ漁船碇繫ス此港ハ南岸ハ游沙泥鹵ニシテ北岸ハ稍深ク千噸以上ノ船舶モ亦碼頭



百二  
ニ碇泊セシムルヲ得然レモ此港ノ門口ニ砂堆アリ潤サ一里許滿潮ノ時ハ其沙洲上ニ於テ水深十五呎アリト雖モ干潮ニハ僅カニ七呎乃至十呎ニ過キス洪水暴風ノ時ノ如キハ港内ノ水大洋ニ放蕩スルヲ極メテ急ニシテ頗ル危険ナリ港内ノ錨區ハ水ニ從テ流動スル沙底ニシテ漸次狹隘トナルノ傾向アリ加フルニ水深三尋ヲ超ヘス故ニ大形ノ船舶ハ滿潮ニアラザレバ港口ニ入ルコトヲ得ズ港外ノ錨地ハ廣漠タル沿海ニアルヲ以テ西南若シクハ北風強吹スル時ハ忽チ怒濤ヲ起シ繫泊ニ便ナラズ然レモ近來服部技師ノ調査報告ニヨレバ基隆ハ四百餘万圓ノ巨資ヲ投セサレバ完全ナル港灣トナシ難キモ淡水ハ僅々廿萬圓ヲ費セバ浚渫工事ヲ施シ以テ良好ナル港トナスコトヲ得ト  
通常臺北ニ至ルノ荷物ハ此港ニ至リ陸揚ヲ成シ小蒸氣船ニテ大稻埕ニ送ル之ノ小漁船モ亦滿潮ノ時ニアラザレバ往來スルコトヲ得ス

此地市街ハ淡水河ノ右岸ニアリ丘陵ニ櫛比連櫛シ戸數凡三百、人口五千ヲ有ス家屋ハ煉化石及木造ニシテ居民ハ農商及漁業ニ從事ス風俗野鄙ナリト雖モ稍ヤ温厚ナリ高阜最モ眺望ノ能キ所ハ悉ク西洋人ノ居宅アリ其重ナルモノハ各國領事館、税關、漁船會社、電報局、基督教々會堂、同女學校、病院アリ又往時和蘭人ノ築造セル堡砦アリ港口ノ標示トナレリ

當港ヨリ輸出スル重ナルモノハ臺灣茶ニシテ其他米、鹽、落花生、樟腦、石炭、麻布、樟木、硫黃等ナリ

臺北地方需要ノ福州材木ハ總テ當港ヨリ輸入セラル  
此港ノ氣候ハ基隆ト大差ナクシテ十一月下旬ヨリ翌年五月下旬マテハ多雨ノ季節トシ夏月晝間ハ南西ノ風絶エス吹キ夜間ハ東南風アリテ多少暑氣ヲ和クト雖モ地勢低濕ニシテ瘴氣、癘毒頗ル多ク俗ニ淡水



「ヒーバー」熱ト稱シ殊ニ其性劇烈ナリト云フ

●安平。安平港ハ臺灣南端ヲ去ル凡八十海里臺南府ノ西南三哩ニアリ臺灣府ニ於ケル貨物出入ノ門戸ニシテ此地原ト小嶼ナリシニ土砂ノ遊積スルニ從ヒ大陸ト連接スルニ至レリ故ニ地脈泥砂ニシテ矮樹處々ニ叢生ス海岸ニ接シテ沙堆隆起スル處アリ上ニ和蘭ノ舊砲臺アリ今ハ僅カニ墻壁ヲ存スルノミ其傍ニ一大樹アリ海上ヨリノ好目標タリ

和蘭砲臺ノ南ニ安平村アリ住民多クハ漁業ヲ業トス此地新創ノ土地ナルヲ以テ土人ノ家屋等ハ陋穢見ルニ足ルモノナシ戸數凡五六百戸人口二千許居留地ヲ除ク外微々タル一寒村ニ過キズ海岸ハ總テ居留地ニシテ外國領事館ヲ始メ洋人ノ家屋十數以上ニ達シ殊ニ氣候ハ他ノ各地ニ比シテ最モ温和洋人ノ來住スルモノ多シ

本港ハ沙漠タル沿海ナルヲ以テ繫泊ニ安全ナラズ殊ニ南西恒信風ノ強吹スルトキハ巨濤欲揚シ最モ危險ナリ故ニ六月ヨリ九月ニ至ルノ間ハ互市全ク絶ヘ貨物ハ一切打狗ニ運輸スト云フ然レモ十二月ヨリ翌年三月ニ至ルノ間ハ東北恒信風ノ盛吹スル際ハ和蘭舊砲臺ヲ去ル正西乃至西南西ニシテ水深六七尋ノ地ニ錨泊スルヲ得ベシ錨地ノ岸ヲ距ル遠クシテ且ツ此ノ如ク危險多キヲ以テ假令巨額ノ資ヲ投スルモ良港灣ヲ得ルヲ將來望ムベカラズ

●打狗又打彭或ハ旗後ト曰フ。打狗港ハ臺南ヲ去ル東南廿四哩軍隊用輕便鐵道ヲ布設セラル安平ノ南廿五海里日々漁船ノ航通アリ地形ハ打狗山一名猿山高ク港ノ左側ニ聳立シ右側ハ(さらせん)岬長ク(此間三里餘)海中ニ突出シ其尖端ノ峭巖上ニ堅牢ナル砲臺アリ此兩側ノ間僅々數十間ニ過キズ地形斯ノ如クナル故ニ善ク北東ノ風ヲ防ク



百六  
ニ足レリト雖モ港口及港内狹隘ニシテ且内港ニ一帯ノ淺洲アルヲ以テ大船巨舶ノ出入ヲ許サス唯小蒸氣船及舢舨漁船等ノ出入ニ便ナルノミ故ニ港口ハ深サ五尋乃至七尋ニ達スト雖モ大船ハ多ク港外ニ碇泊セリ殊ニ南西風ノ時ハ最モ危險ナリ然レモ某技師ノ説ニヨレバ其内部ノ浚渫費用モ少ナク將來臺灣島中第一ノ良港タルベシ市街ハ左側ノ平地ニアリテ從來ハ寥寥タル一漁村タルニ過キス現今ニ至リテモ住民過半ハ漁業ヲ事トシ家屋ノ如キモ陋穢見ルニ足ラズ唯榕樹及雜木ノ鬱茂セルアリテ稍其不潔ヲ蔽フニ足ルノミ此港ノ右側ハ則チ居留地ニシテ英領事館ハ猿山ノ岬端樹木鬱蒼タル間ニアリ前面ハ一大鹽水湖ヲ隔テ、數里ニ亘ル(さらせん)岬ヲ望ミ其景色恰モ丹後天ノ橋立ノ如シ脊部ハ茫々タル大洋ヲ臨ミ風光絶佳蓋シ臺灣第一ト稱スベシ此他我税關、兵站部、電信局等ハ皆右側ニアリ左

百七  
側ノ重ナル建築ニハ民政支廳出張所及英領事館醫(どくどるせいや)氏ノ居宅并ニ病院等アリ砲臺ハ大ナルモノ四坐アリ就中猿山ノ砲臺(さらせん)岬角ノ砲臺ハ最モ精銳ナル新式ノ巨砲各數門ヲ備フ此港重ナル輸出品ハ砂糖、茶、菓實、樟木、海産物ナリ砂糖ハ此地方ノ有名ナル産物ニシテ打狗地方ノ産額總計五十三萬バ(くる)餘ナリト云フ此地千八百六十三年(文久三年)五月基隆ト共ニ外國貿易ノ爲メニ開カレシト雖モ近年ニ至ルマテ安平ニ其勢力ヲ奪ハレ戶數ノ如キモ漸ク六七百、人口三千ヲ過キズ然リト雖モ將來中部鐵道開ケ此地ニ通スルニ至リ港灣ノ浚渫ヲ經ハ臺灣南部一般ノ商權ハ茲ニ集中シ其繁華優ニ他ノ三開港場ヲ凌グベシ



第五章 交通并ニ運輸

臺灣ノ交通ハ甚タ不便極マレリト云フベシ鐵道アリト雖モ一小部分ニ過キズ然モ其不完全極ナキニ於テチャ今左ニ陸路運輸鐵道并汽船ノ使否ヲ概述シ讀者ノ一察ニ供セントス

第壹節 道路

臺灣一般ノ道路ハ不完全極ナリ細キ徑路ニ止マリ坂路ニ至リテモ迂廻シ及ヒ堀下クル等ノ工事ヲ施サズ河流ニハ橋梁ヲ架セシ所少ナク處ニヨリ籐蓐ヲ用テ鎖トシ之ニ平底ノ小艇ヲ繫キテ河ヲ渡ス所アリ河流多クハ平時涸レテ水ナケレハ徒涉スベキモ雨降レバ俄カニ漲溢シテ往來ヲ遮斷スルナリ  
山地ニ至レバ全ク道路ト云フベキモノナク溪流ノ底ヲ以テ道ニ代ヘ平時ト雖屣腰ニ至ル水深ヲ涉リテ旅行セザルベカラサル所アリ雨時

ハ交通全ク絶ユルナリ

島内ノ運輸ニハ車類ヲ用ユルコト少ナシ是レ道路ト云フベキモノナケレバナリ臺北臺南ノ近傍ニ限り人力車ヲ見ルモ其使用シ得ラル、區域ハ狭ク一般ニ島内旅行者ノ使用セラル、ニ非ラズ通例支那人ノ使用スルハ轎子ニシテ數人ヲ役シテ一人ヲ運搬スル不經濟ナル方法ナリ馬驢馬等ハ西洋人ノ外使用スルモノ少ナシ  
臺北臺南等ノ近傍ニハ貨物ノ運輸ニ一種ノ牛車ヲ使用ス四輪車ヲ三頭ノ牛ニ駕セルモノナリ  
抑モ臺灣ノ地形タルヤ狹長ニシテ南北等シク大陸ニ面スルカ故ニ其交通ハ大陸トノ間ニ頻繁ナレモ南北相互ノ間ニハ頻繁ナラズ是レヲ以テ兩部ニ往來シタルモノハ南北兩地ヨリ大陸ニ往來シタルモノニ比シ却テ少數ナルカ如キ結果ヲ生シ數十里ノ間未ダ言語ノ合同ヲ見



ル能ハズ南北ノ民相對シテ異邦殊域ノ感ヲナセリ而ルテ況ヤ此少數ノ交通サヘ陸路幾多ノ危險(山河ノ險阻途中盜賊ノ厄災)ヲ避ケテ多ク海路ノ安全輕捷ニヨルオヤ固ヨリ自然ノ必要未タ交通ヲ促カサ、ルニ因ルト雖モ土功ノ不備警察制度ノ不完全ナリシカ爲メ交通ノ發達ヲ防ケシモノト云ハサル可カラズ

蕃人ト移住民トノ居住ハ必ス幾多ノ山脈ヲ隔ツルカ故ニ固ヨリ全ク道路ナルモノ存セサルカ如シ近時樟腦製造ノ爲ノ多少ノ通路ヲ成シタリト雖モ眞ノ樵路タルニ過キズ

第二節 鐵道

臺灣鐵道ハ千八百八十七年劉銘傳北京政府ヘ建議シテ遂ニ之レヲ布設スルニ決シ基隆、臺北ノ兩地ヨリ工事ニ着手シ其建築ニ使用スル人足ハ總テ土兵ニシテ技術家ハ外國ヨリ雇入レシモ監督官ニハ從來斯

ル事ニ無經驗ナル支那人ヲ用ヒタレバ事業ノ進行常ニ滯滞シテ其効蹟ヲ擧グルコト難ク最初二年間ニ五人マテモ其長官ヲ更迭セシメタリ然レモ劉銘傳ノ熱心勉強ナル常ニ監督官ヲ督勵シテ翌年ノ暮ニハ漸ク臺北ヨリ八哩間ノ鐵道落成セリ自後千八百九十二年(明治廿四年)一月ヨリ全通開業セリ

線路	單線	軌條	網製二十六磅
軌條ノ間隔	三呎六吋	最小半徑	五 鎖
最大傾斜	三十分ノ一		

臺灣鐵道ノ築造ハ甚タ粗惡ニシテ屢々危險ノコアリ其築造ハ地盤石ニ儘カニ砂礫ヲ積ミ之レニ枕木ヲ置キタル頗ル危險ノ築造ナルヲ以テ瀛車ノ進行極メテ遲緩ナルノミナラズ動搖甚シク雨降レバ線路輒チ毀損シ或ハ進行中客車ノ接續脫離シ若シクハ脫線シテ乘客ノ危害



ヲ蒙ルモノ少ナカラザリシカ現今ハ我國ノ技師之レヲ修繕シ大ニ面目ヲ改メタリ然カレモ客車二輛荷車三輛以上ヲ接續スルヲ能ハス基隆ヨリ臺北ニ至ル鐵道ノ方向及其附近ノ地勢ヲ略言スレバ基隆ヨリ少許ニシテ長サ九百拾貳呎ノ墜道ヲ鑿テル山嶺アリ之レヲ獅球嶺ト稱ス之レヨリ西南ニ向ヒ屢々屈曲シテ山隘ヲ通シ水邊脚ニ至ルニ及ンテ山足遠カリ水田或ハ菜園多シ此附近開墾ノ發達セル豫想外ナリ何レノ山モ山頂ニ至ルマテ開拓セラレ之レヨリ以西ハ前編記載シタル各驛ヲ經テ新竹縣ニ達ス現今軍隊用ノ各驛左ノ如シ

基隆——水邊脚——錫口——臺北——桃仔園——中歷——揚梅歷——新竹(基隆ヨリ新竹ニ至ル凡九十哩余ナリ)

○電信。從來通信ノ方法ハ劉銘傳ノ興セル處ニシテ臺北局其管轄局ニシテ支局ハ淡水、基隆、新竹、彰化、嘉義、臺南安平、打狗、恒春、澎湖島ニ置カ

レタリ今回改正組織ニヨルモ同シク前記ノ各所ニ電信局ヲ配置セラシ尤臺灣府臺南府ハ臺北府ト共ニ一等郵便電信局トセラレタリ然シテ澎湖島ニハ安平ヨリ海底線ヲ布設シ淡水ヨリハ福州港ヘ同シク海底線ヲ布設シアリ

○郵便。郵便組織モ亦劉カ創設セシ所ニヨル然レドモ不完全ニシテ内地ノ郵便制度ト比較スベキニアラズ勿論今日ニ於テハ我郵便制度ヲ實施セラレ毫モ内地ト異ナルナシ

### 第三節 漁 船

臺灣ノ海濱ハ彼ノ黒潮ノ激流ヲ以テ包マレ殊ニ颶風ノ甚シキ處ナルヲ以テ最危險ナリ故ニ内地トノ航海ニ用イラルベキ船舶ハ少ナクトモ三千噸内外ナラザルベカラズ然レモ沿岸地ハ何レノ港灣モ小ニシテ且淺ク故ニ千噸以内ノ船ニアラザレバ荷物ノ揚卸共ニ適當ナラス



實ニ臺灣ノ運輸ハ最モ困難ナル一大研究問題タルベシ  
今左ニ臺灣ニ於ケル運漕業ノ概況ヲ記述セン

現今臺灣島ニ於テ支那本土并ニ香港新嘉坡等トノ運搬業ヲ掌トルモ  
ノハ英人(どぐらす)商會ニシテ其代理店ハ(べゐんてゐど)并ニ(らゐど)商  
會等ナリ今左ニ臺灣各港ヨリ支那各地并ニ日本ニ至ル里程ヲ示ス

從基隆港至福州	凡百五十哩	從基隆港至香港	凡四百哩
全 至廈門	凡二百三十六哩	從淡水港至福州	凡百三十八哩
從淡水港至廈門	凡二百〇四哩	全 至香港	凡三百八十二哩
全 上海	凡五百哩	全 至新嘉坡	凡千八百哩
全 長崎	凡八百五十哩	全 至橫濱	凡千四百四十哩
從安平港至廈門	凡百六十二哩	從安平港至香港	凡三百哩
全 上海	凡五百七十九哩	從打狗港至福州	凡百九十二哩

從打狗港至廈門 凡百七十九哩 全 至香港 凡三百二十哩

○右各港ニ至ル乘客運賃大畧左ノ如シ

淡水廈門間	廿弗	往復	三十弗	下等	四弗
淡水香港間	五十弗	廈門香港間	廿五弗		
廈門汕頭間	十二弗	廈門福州間	廿五弗		

○淡水港ヨリ香港福州廈門ニ至ル荷物運賃左ノ如シ

淡水香港間	才噸	七圓	量噸	六圓
淡水福州間	略前項ニ同シ			
淡水廈門間	才噸	五圓	量噸	四圓

○日本ヨリ基隆ニ至ル運賃大畧左ノ如シ

從神戸至基隆乘客賃金	上等	三十圓	下等	十五圓
全 荷物運賃	一噸	五圓五十錢	乃至	七圓五十錢



一基隆港ヨリ淡水マテ殊ニ荷約ヲナストキハ一噸少ナクモ四五圓ヲ要スレモ内地ヨリ淡水揚ノ約ナルトキハ基隆マテノ運賃一噸ニ付一二圓ノ高値ナリ然シテ淡水ヨリ臺北ニ運送スル解賃ハ(ぢやんく)船一艘ニ付現今十五六圓ナリ勿論戰爭前ハ高キモ八九圓ナリシト云エバ漸次多少ノ下落ヲ來タスベシ一艘ト云モ船ノ大小アリテ一定セズト雖モ平均茶四十斤入壹箱トシテ四百五十箇ヲ積ムヲ通常トス

此間ノ運送業ハ大稻埕建昌街林張順ト稱スルモノ一手引受ヲナスト云フ

○安平港ハ風浪荒クシテ往々陸揚ニ最モ困難ナルコト前章記載セシガ如シ故ニ解賃モ從テ高ク且天氣模様ニヨリ一定セズ靜穩ノ日ナルトキハ乗合解舟ニテ外國人ハ三十錢支那人ハ十錢借切リナレバ一弗五十錢ヨリ二弗ニ至ルヲ通常トシ風波荒キトキハ之ニ二倍或ハ三倍

シタル賃錢ヲ拂ハザルヲ得ス然シ之ノ賃錢ハ戰爭前ノ規定ニシテ軍政中ハ我邦人ニ限り總テ無賃ニテ兵站部御用船ニヨリ上陸或ハ乘船セリ然レトモ西洋人ノ支那船ヲ傭入ル、トキハ大抵右ノ規定ニ準シテ賃銀ヲ仕拂エリ

○此他臺灣嶋ノ運輸ニ最モ樞要ナルハ澎湖列島ナリ元來之ノ嶋ハ軍事上ニ少ナカラサル關係ヲ有シ曩ニ清佛交戦ノ際佛軍先ツ之レヲ占領シテ根據地トシ今回又我カ征南軍モ最モ先キニ之レヲ占領セシモノ故ナキニアラズ然カレモ今後之ノ港ハ日英秘密條約ニヨリ軍港トナサズ一般商船ノ碇泊場トナスベシト然ラバ臺灣ニ輸出入ノ荷物ハ一度之ノ澎湖島ニ集マリ然ル後各所ニ集散スベシ蓋シ臺灣ノ各港ハ何レモ遠淺ニシテ大船ヲ碇泊スルニ難ク然ルニ該島ハ澳ノ外部ニ漁翁島アリ内部ニ新城龜山蛇山等ノ數島環列ノ間ニ一澳ヲ開キ風波靜



穩ニシテ潮水干満ノ如何ニ拘ラズ船舶ノ寄泊ニ最モ便ナリ左レハ夏  
秋ノ交臺灣海峽ノ風浪最モ烈シキ季節ニ當リテハ支那ノ蓬船皆此ニ  
寄泊スト云フ

之ノ列島ニ山ト稱スベキモノナク概テ平坦ニシテ一望限リナシ土地  
ハ赤土ニシテ一樹ノ生殖スルモノナク隨テ降雨稀レニ飲水乏シクシ  
テ且惡質ナルハ實ニ一大欠點ト云フベシ然レモ樹木モ之レヲ栽培セ  
ハ多年ヲ費ヤサスシテ枝葉繁茂シ綠蒼々タルヲ見ルニ至ルベシ  
居民ハ農事ヲ勉メス米穀ヲ産セズ僅カニ高粱西瓜其他ノ野菜類ヲ栽  
培スルモ肥料ヲ施カサルニヨリ作物乏シ土民ハ海産物ヲ携エテ臺  
灣本島ニ至リ日常必需品ト交換シテ歸ル

### 第六章 臺灣島生蕃

臺灣ノ生蕃ハ世人ノ知ル如ク往昔ヨリ十八番社アリト云フ然レモ之

レ南部恒春地方ヲ云エルモノニシテ全島ヲ指セシニハアラス元來此  
地方ハ牡丹上十八番社下十八番社ト唱ヘ各十八番社アリシモ光緒五  
年(明治十二年)臺灣府地方官ノ調査セシモノニヨレハ其當時番社ノ數  
ハ五十八ニシテ其外ニ卑南番社ト云エルモノアリ之レヲ別テ四十六  
社ト爲セリト云フ勿論番社ヲ細別スレバ數十社ノ多キニ至ルモ之レ  
ヲ大別セハ左ノ四種トナルベシ曰ク(ばいわん)曰ク(ではん)曰ク(あみや  
す)曰ク(平埔種族)即チ是ナリ  
第一(ばいわん)種族ハ臺灣生蕃中古昔ヨリ此島ニ住居シ其性質最モ悍  
猛ナリ常ニ貪殘ニシテ一タヒ怒ルルハ自己ノ性命ヲモ顧ミサルニ至  
ル此等ノ蕃族ハ都テ數千尺以上ニ達スル高山ノ頂上ニ棲居ス彼ノ牡  
丹番社ノ如キハ即チ此ノ(ばいわん)種族ナリト云フ其部落中ニハ每秋  
季收納ノ節ニ至リ人頭ノ祭リト云エルコトアリテ各所ヨリ數多ノ頭骨



ヲ持出シ一場ニ陳列シテ其數ノ多少ニヨリテ賞與ノ甲乙アリト云フ  
 此ノ種族ハ軀幹頗ル偉大ニシテ顔色ハ銅色ヲ帶ヒ其性活潑ナリ平常  
 ノ衣服ハ膝掛ノ如キモノヲ以テ一ハ胸前ニ掛ケ一ハ脊後ニ掛ク又其  
 上ニ鹿皮ヲ以テ製シタル(じや、けつと)ノ如キモノヲ用フ生蕃ノ酒ヲ嗜ム  
 ハ一般ナリト雖モ此ノ(ばいわん)族ハ特ニ甚シク彼等ノ心情ノ最モ欲  
 スル所ハ酒ノ醉ヲシテ常ニ醒メシメサルニアリ  
 第二(でぼん)種族ハ(ばいわん)番ニ次テ臺灣ニ來タリシモノナリ此種族  
 ハ初メ何處ヨリ渡來セシカ知ルヲ得サレモ從來彼等ノ口碑ニ傳ハル  
 所ニヨレバ北部ノ諸嶋ヨリ分レテ移住シタルモノナリト此種族ハ(ば  
 いわん)族ヨリハ身幹短小ニシテ性質稍ヤ順良ナルモノ一般ノ風俗ニ至  
 リテハ(ばいわん)族ト大同小異ナリ  
 第三(あみやす)族ハ重ニ番地ノ中央部ニ住居スルモノニシテ元來支那

人モ外國人モ共ニ彼等ヲ本來ノ生蕃ト呼ヒ來ルト雖モ他ノ二蕃族ヨ  
 リハ反テ之レヲ外國人ナリト爲スト云ヘリ之ノ種族ハ身軀ノ骨骸モ  
 他族ト稍ヤ異ナリ全身多毛ニシテ且筋骨皮肉頗ル發達シ居レリ其風  
 俗習慣モ亦異ナル所多シト云フ  
 第四平埔蕃ハ支那人ノ俗ニ熟蕃ト名クルモノナリ父ハ支那人ニシテ  
 母ハ生蕃ナリト云フ然カレモ外國宣教師等ノ說ニヨレバ此レ等モ全  
 ク一種特別ノ種族ニシテ同ク外ヨリ來リシモノナリト元來此ノ平埔  
 族ハ最モ農業ニ適當セル人種ニシテ(ばいわん)(てぼん)(あみやす)ノ三種  
 トハ全ク相異ナル所アルヲ以テ臺灣ニアル外國人等ノ間ニハ或ハ琉  
 球地方ノ移住民ニハアテサルヤトノ說アリ平埔蕃ハ其性質順良ニシ  
 テ一般農事ニ勉勵スルヲ以テ近來ニ至リ漸次ニ支那人ト混合シ自然  
 昔日ノ風習ヲ脱去スルニ至レリ



古四種族ノ外ニ客家(一)ニ哈喀ト唱フル種族アリ最モ此ノ客家ハ一目シテ支那人ト異ナル所ナシ然レモ支那人ハ別個ノ種族トシテ俗ニ内山ノ客人ト云フ之レ生蕃トノ境ニ居住スルヲ以テナリ然レモ時トシテ隊ヲ結ヒ支那村落ヲ襲撃シ又旅人ヲ殺害シ掠奪ヲ行フ故ニ支那人ハ生蕃ヨリモ反テ之レヲ畏ルト云フ

蕃人ノ總數ヲ論スルモノ區々一定セサレモ大概十萬人内外ナリトノ説多キカ如シ要スルニ以上各種ノ生蕃ナルモノハ眞ノ野蕃人ニシテ酋長ノ支配ニ屬シ未ダ曾テ支那政府ノ政治ニ服セズ稍ヤ化熟ニ近ツキシモノハ耕種シテ食フコトヲ知ルト雖モ多クハ天惠ニ依頼シテ或ハ他ノ部落又ハ支那人ト争鬪シテ食ヲ求ムルコトアリ支那政府ノ之レニ對スルハ生蕃ニ與フルニ國民ノ分限ヲ以テセント欲スルニアラズ又タ生蕃ヲシテ租稅工賦ニ從ハシメント欲スルニアラス懷柔ノ目

的タル單ニ生蕃ヲシテ支那人ヲ殺サシメズ隨意相往來シテ生蕃内部天然ノ遺利ヲ起サントセシニアリ故ニ劉銘傳在島ノ間内部ノ生蕃ヲ招撫シ不化ノ地區ヲ開拓シ其管轄權ヲ擴張セントシタルコト數次ナリシト雖モ蕃民ノ兇悍ナル要隘ニ據リテ官ニ歸セス屢々出テ官吏ヲ殺傷シ殊ニ卑南宜蘭大嵯崁一帶ノ生蕃ハ各地ニ割據シテ官軍ト奮鬪シ頗ル猖獗ヲ極メタリ此ニ於テ劉ハ全島ノ將領ニ令シテ大ニ官兵ヲ舉リ又福建ニ援軍ヲ請ヒ或ハ北洋ヨリ軍艦ヲ派シ大舉蕃族ヲ剿滅セントシ交戰數回纒カニ鎮靜ニ歸スト雖モ元來支那人ノ狡猾ナル生蕃ノ無智ニ乘シ誦詐百出其財寶ヲ掠メ加フルニ惡吏暴官往々詭計ヲ弄シテ之レヲ陷害スルカ故ニ生蕃ノ支那人ヲ見ルコト仇讎モ啗ナラス支那人ヲ見ルトキハ其肉ヲ割キ其骨ヲ嚼テ甘心セント欲スルモノ、如シ反之内地人若シクハ西洋人ニ對スレハ頗ル温順ニシテ毫モ敵意



ヲ狹マス殊ニ南部生蕃ハ明治七年役ノ紀念ニヨリ往々我内地人ヲ視ルニ兄弟ヲ以テシ熱心ナル敬意ヲ表スルモノアリ

又蕃人ハ性極メテ爭鬪ヲ好ミ最モ强健ナルモノ酋長トナル人ヲ殺シタル度數ヲ以テ其局部ニ文身シ(面部ヲ斬リテ敵ヲ死シタルモノハ而部ニ胸部ヲ射リタルモノハ胸部ニ)又ハ其殺害セシ人數ノ多寡ニヨリテ両手ニ其數ヲ文身スルモノアリ其他既婚ヲ表彰スル爲メニ耳朶ニ文身スル等ノ俗アリ概シテ殺伐ナリト雖モ又タ信義ノ見ルベキモノナキニアラズ若シ違約虚偽等一タヒ彼等ノ感情ヲ害スルトキハ終生之レヲ敵トシテ信用セス苟クモ其機ヲ得レバ必ス復讐ヲ忘ル、コトナキモ一タヒ信ヲ彼等ノ復心ニ置ケバ呼フニ兄弟ヲ以テシ親善至ラザルナシト云フ

第一節 南部生蕃編者探檢記

編者曩キニ總督府參事官兼基隆支廳長西郷菊次郎氏ニ隨行シテ南部諸地ヲ巡視シ後牡丹生蕃ヲ探見セシ概零ヲ當時岐阜日々新聞紙上ニ掲載セリ今左ニ抜萃シテ諸氏ノ高覽ニ供ス

○南部生蕃探見之記

從來各新聞紙上臺灣各地生蕃探險記ナルモノ續々掲載セラ  
ル然レモ多クハ北方宜蘭方面ニアラザレバ新竹或ハ苗栗等  
ニ多ク未タ南部地方則チ明治七年我軍ノ征討セシ牡丹社附  
近ノ通信ナキモノ、如シ故ニ不肯好機ヲ得ハ一度足此土ヲ  
踏ミ蕃人ノ情况ヲ視察シ以テ彼等カ意向ヲ探ラントノ意アリ  
リシ折柄茲ニ一月前安平支廳長西郷菊次郎氏命ヲ奉シテ岡  
田通譯官荒田、中原両属員ト共ニ視察ノ途ニ就カル不肯亦總  
督府ノ特許ヲ得前諸氏ニ隨行シテ一月廿日安平港ヲ解纜ス



一月廿日打狗港ニ着シ民政出張所ニ留マル三日更ニ御用船ニ便乗シテ社寮港ニ着ス港ハ明治七年征臺ノ役我軍上陸ノ地ナリ遠淺ニシテ船舶ノ碇泊ニ不便ナリ社寮港ヨリ恒春ニ至ル道程殆三里許午后四時恒春城ニ着ス此日支應ニ於テハ我一行ノ至ルヲ聞キ牡丹上下三十六蕃社并ニ遠ク與南生蕃ヨリ一二名宛一社ヨリ撰定シ此前日ヲ以テ大ニ支應ニ會セシメラレタリ蓋シ我一行ノ到着前日ノ豫定ナリシモ途中枋寮ニ於テ一泊セシヲ以テ豫期ト粗誤セシ所以ナリ此日生蕃ノ留マルモノ尙六七十人然シテ吾々ノ一行着ト共ニ一同舎前ニ列シ拜謁式トモ稱スベキモノヲナシ次テ一同ト會飲スベキ旨申傳ラレシモ拜謁セバ他日又再來スベシトテ下十八蕃社總頭人(大股頭人ト稱ス)蕃文杰并ニ各社ノ會長トモ稱スベキ者十數人支應ニ止マリ他ハ一同歸社セリ此夜支應食堂ニ於テ吾一行并應員一同蕃民ト共ニ宴ヲ張ル所長

廳長ノ挨拶アリ次テ蕃民謝辭ヲ述ブ其言ヤ支那人ノ如ク虛飾ノ詞ナシト雖モ言々句々皆肺腑ヨリ出テ赤心面ニ溢ル蓋シ該蕃文杰ナルモノハ年齒五十四五風貌頑強軀瘦身ナリト雖モ眼光人ヲ射リ天晴慄悍拔群ノ蕃首ト見受タリ彼ノ言ニヨレバ曩年西郷都督ノ牡丹生蕃ヲ服從セラルヤ當時彼レハ年壯一蕃社ニ長トシテ頑強ノ抵抗ヲ試ミシモ刀折レ矢盡キ遂ニ將軍ノ轅門ニ降ヲ乞ヘリ然ルニ西郷老大人ニハ廣量海ノ如ク前過ヲ咎ムル事ナク降ヲ許可シ玉ヒ我等ト飲食居住ヲ共ニセラル恩威撫育ノ厚キ當時蕃民大ニ悅服セシ折柄清國ト和成リ都督一同ニハ歸國セラレ後吾等カ蕃社ハ清國政府ヨリ非常ノ害ヲ蒙レリト(前項參照)宴酣ナルニ及ンテ談益佳境ニ進ミ彼等懷舊ノ情ニ堪ヘザル者ノ如シ即時蕃歌ヲ作りテ頭人音頭ヲ取り蕃人同音歌フ

「恰モ内地盆踊歌ノ如シ唱フテ曰ク



(蕃歌) あーろーてんく。まーてんく。そいこーまーこーふ  
ほーあべー。ひーろーろーよー。ろいよくくくく

(蕃歌譯) 嗚呼實ニ今夜ハ如何ナル樂シキ日ヨ 往年少ナカラザル關  
係ソアリタル者カ又茲ニ會シ共ニ飲ムハ大ニ樂ムベシ

又歌フテ曰ク

(蕃歌) あーしのあーりー。あひのいのひをーなー。あーしのしーのふ  
ろー。ひろくーいー。うふをいろー。をーかーいー

(譯) 嗚呼道モ遠キ卑南ヨリ來タリ西郷大人ト酒ヲ飲ム大ニ喜ブ  
ベシ

又曰ハク (蕃歌畧ス) 藩頭人獨吟

(蕃歌譯) 其ノ半分ハ民政廳ニ務メ半ハ蕃族ノ頭目トナリテ治メン  
嗚呼樂シくく

右等ノ歌ハ我國ノ如ク一定ノ唱歌ニアラズシテ即坐ニ出來事ヲ歌ト  
ナシ衆人之ヲ和唱ス然レモ一定ノ音節調律アルモノ、如シ  
彼等ノ飲食スルヤ實ニ強健ナル驚クニ堪タリ此日來會ノ蕃人中一少  
童ニテスラ大茶碗ニ凡十四五碗目睫ノ間ニ喫シ終リタルニハ一驚ヲ  
喫セリ。彼等ノ一行ハ此夜支廳ニ宿泊シ翌朝西郷氏ニ面謁シ一度訪問  
ノ勞ヲ煩ハサレント切望ス然ルニ此日ハ兼テ近郊六七里ヲ距ツル  
龍鑾社ト稱スル熟蕃(先年西郷都督征討ノ節ハ純然タル生蕃ナリシ)ヨ  
リ懇招アリシヲ以テ明日ヲ期シ潘文杰ノ家ニ行カント約セラル彼  
等大ニ喜ヒ直ニ歸途ニ就ク

此日龍鑾社四股頭人(頭人ニハ大股、二股、三股、四股ノ別アリ)潘阿樂正社  
長潘麻仔壯等ヨリ西郷氏支廳長相良氏ヲ招待ス隨行ニハ中村、岡田、兩  
通譯官濱崎、淺香、北村、廳員西郷氏屬官諸氏及生ノ十數名道ヲ恒春南門



百三十  
ニ取リ行ク數里一小湖ニ沿フテ山上ニ上ル飛巖老木滑石亂流送迎眞  
ニ遑ナシ怪草雜樹亂生シ或ハ棕櫚樹高ク繁茂シ濃陰鬱蒼或ハ幽邃古  
雅愈進メハ愈奇一行鼻子頭山ニ至リテ少休ス山ハ之レ本島ノ南端ニ  
シテ其最南端白砂ノ砲臺ハ足下ニアリ水天髣髴遠ク一葦帶水ヲ距テ  
、南洋呂宋ニ達スベシ山海ノ風景自然ニ相映時シテ身モ亦畫幅中ノ  
人トナリ道程ノ遠キヲ覺エサラシム時シモ巖石草棘ノ間ヨリ數箇ノ  
蕃人來リ迎フルニ遇フ此ヨリ約四五丁ヲ行ク毎ニ來迎者アリ殊ニ余  
等ノ一驚ヲ喫セシハ道路ノ通シ難キ處アレバー々修繕ヲ施シ谿谷ニ  
ハ新ニ丸木橋ヲ架シ鬱林橋ノ通シ難キ處ハ樹枝ヲ切り新來ノ珍客ヲ  
迎フルカ如シ實ニ彼等ニ取リテハ開闢以來ノ出來ト云フベシ  
午后龍鑾社ニ達ス林間各處點々熟蕃ノ家屋ヲ見ル正頭人ノ家ハ山腹  
ニアリ大洋ヲ眼下ニ見ル絶景限ナシ家屋ノ建築ハ巨竹ヲ以テ柱トシ

塗ルニ泥土ヲ以テス葦ヲ以テ屋根ヲ葺キ一見内地田舎最下等ノ貧人  
ノ家屋ノ如シ然レモ内部ハ支那土人ト異ナリ多ク不潔ヲ見ス茲ニ集  
マル蕃人殆ト六七人皆龍鑾社内ノ者ナリ既ニ酒宴ノ用意アリ山海  
ノ珍味ヲ饗應ス酒ハ粟ヨリ製シタル燒酎様ノ物ニシテ殆ト飽盛ノ如  
シ宴酣ニシテ頭人懷中ヨリ恭シク取り出ス者アリ熟視スレハ古ヒタ  
ル旭旗ナリ中ニ左ノ文字模糊トシテ顯ハル

此御旗を賜ふものは我 皇國の 大稜威に順ひ奉るあかしなり  
假染にも汚すなかれと云ふことしかり

明治七年五月

是ナン疊年都督府ヨリ附與セラレタル者ニシテ多年貴重ニ之レヲ保  
有セシ彼等ノ心事愛スベキモノアリ宴終リテ後所長ヨリ懇々訓誨ヲ  
與ヘラル、ト凡壹時間其間彼等ノ行爲ハ嚴格深重起立ノ儘席次ヲ亂



スモノナシ其命令ノ能ク行ハル、〔チヤン〕人種ノ比ニアラズ  
 此日蕃人ハ一日滞在アラン、ヲ懇請セシモ翌日ノ約アリシヲ以テ午  
 后四時ヨリ歸路ニ就ク蕃人中頭人數輩途中ノ護衛トシテ恒春城ヲ去  
 ル一里許ノ所マテ送り來タレリ  
 翌日ハ兼テノ約束ナリシヲ以テ生蕃下十八蕃社總會長潘文杰ノ家ニ  
 至ル此日拂曉少シク雨降り風又烈シ一同如何ト躊躇セシニ通譯官ノ  
 曰ハク生蕃ハ人ト約束シ其約ヲ違エハ又其人ヲ信用セスト因リテ一  
 同勇ヲ鼓シテ門ヲ出テ猪撈束社ニ向フ猪撈束ハ潘文杰ノ居宅アル處  
 ナリ幸ニ午前六時天晴レ途中射麻裡社等ヲ經テ午後壹時猪撈束ヲ去  
 ル數町一小河ニ至ル前面蓬頭亂髮殆裸躄足ナル者河中ニ往來スル  
 ヲ見ル之レ即チ生蕃ノ來リテ我一行ヲ迎ヘ負ンテ前岸ニ渡スモノナ  
 ラントハ河流急奔殆大井川川越ノ如シ行ク數町薺蒼タル山林ノ中腹

巨屋アリ急坂ヲ攀登スル二三町天然ノ要所ニ居ヲ構ヘ數里ノ平野一  
 望ノ内ニ集マル之レナン頭人潘文杰ノ居宅ナリ家屋ノ築造ハ他ノ蕃  
 家ト異ナリ煉化作リニシテ清掃一ノ汚穢ヲ見ズ殊ニ不可思議ナルハ  
 屋内一ノ兇器ヲ列スルモノナシ同行者ニ之レヲ問エバ曰ク曩キニ潘  
 文杰ノ我南進軍ニ來降セシ當時支廳員彼カ居宅ニ招カレ當時人心未  
 タ不穩護身ノ兇器必用ナリシニモ係ハラズ當時出張ノ廳員ハ若一彼  
 レニ敵意アレバ到底兩三名カ死力ヲ盡シテ防戦スルモ遂ニハ彼レカ  
 爲メ殺戮ニ遭遇スベシ死ハ一耳寧ロ銃劍ヲ携帯セズ招キニ應スベシ  
 ト一行各々兇器ヲ携帯セズ彼レカ居宅ヲ訪問セシニ彼等之レヲ見ル  
 ヤ當時室内ニアリシ種々ノ兇器ヲ勿々取片付身モ亦護身用ノ刀劍ヲ  
 藏匿セリト云フ故ニ此日我等一行モ亦銃劍ヲ携帯スルヲ許サレズ彼  
 等ノ之レヲ身邊ニ置カサル又親密ノ情ヲ表白セシモノナリト云フベ



シ一應ノ挨拶終リ後酒宴ヲ開ク山海ノ珍味限リナク水牛野牛猿豚肉魚類種々ノ調理能ク吾曹ノ嗜好ニ適シ殊ニ生蕃ハ吉凶判斷ノ神トシテ鶏ヲ尊敬スルコト甚シキニモ係ラズ日本人ハ鶏肉ヲ好ムト聞キ之レカ料理ヲ卓前ニ列ス「チャン」通譯傳ヘテ曰ク生蕃人ハ從來如何ナル珍客アリト雖モ如此キ事成シタル「ナシ」公等ハ非常ノ尊敬ヲ受ケラレシニアラサレバ何ソ斯ル歡待ニ遭遇スル「ナシ」得ンヤト殊ニ彼等カ酒ヲ進ムルヤ殆ト西洋流ノ如キ風習アリ主人杯ヲ舉ケテ「かんぬは」ト稱スルトキハ各人何レモ彼ノ泡盛様ノ燒酎ヲ飲ミ乾サ「ルベカ」ラズ又「さまよ」ト唱ユル片ハ各人箸ヲ舉ケテ馳走ヲ「シヤブ」ラサルベカラズ恰モ陸軍ノ號令的ニ絶ユス「かんぬは」ハ「ヤー」(さまよ)ノ連發ヲ蒙ル最初ノ中コソ食事ニ掛テハ一騎當千ノ書生連中彼レカ號令ヲ待タズシテ競争ヲ成セシモ遂ニハ號令下ルモ著テ下ス能ハサル

ニ至リ後ニハ生蕃交モ來タリ強制執行的ニ「かんぬは」ハ「ヤー」(さまよ)ト人毎ニ馳走ヲ口中ニ押込火酒ヲ強飲セシメラレ遂ニハ如何ナル豪傑連中モ降テ卓上ニ請ハザルノ止ムヲ得ザルニ至ル時ニ席上藩ハ懷中ノ守囊ヨリ一札ヲ取出シ我一行ニ提出スルヲ熟見セバ之レ昔年都督府ヨリ彼藩ニ與エラレタルモノ文言左ノ如シ  
大日本陸軍中將西郷從道告于生蕃各社往歲牡丹生蕃殺戮我琉民於難大虛無道罪莫大焉從道謹奉

天皇之

威命來問其罪既而備們悔過改德稽顙於轅門我憫而赦之可庶幾與共沐浴于  
聖澤生長乎 仁壽之域也不料今也我與清國講和悉聽其請我歸朝有日備們謹奉清國之教勿敢犯三尺特曉諭



明治七年十一月廿日

然ルニ彼等之一紙片ヲ失フナク貴重ニ珍藏セシハ他日再ヒ我朝ノ恩澤ニ浴セント豫期セシモノ、如シ然ラスンバ何ソ今日ニ至ルマテ尊重スルニ至ラズ速クニモ支那官吏ノ手ニ渡リ一片ノ反古タルニ至リシ者ナルベシ茲ニ彼潘文杰カ目下我政府ニ盡シツ、アル概略ヲ恒春支廳長相良氏ヨリ傳聞ノ儘左ニ概述セン

我南進軍ノ恒春ヲ攻畧シ偵察ヲ射麻裡社ニ出スヤ前面ヨリ弓矢ヲ携エタル生蕃十數人我軍中ニ來タレリ我偵察兵ハ土匪ノ巨魁ト認定シ之レヲ恒春ニ送り將ニ斬ニ處セントス時ニ民政廳譯官之レカ通譯ヲナシ彼レカ言フ處ニヨレバ下十八番社ノ總頭人ニシテ明治七年ノ役ニハ大ニ功勞アリ當時都督府ヨリ賞狀ヲ得シテアリ故ニ今回我軍ノ來タリシコト聞キ出テ降ヲ請ハントセシナリト茲ニ於テ縛ヲ解キ日

ヲ期シ社内ノ頭人ヲ伴ヒ支廳ニ來タルベシト命セリ果セル乎其日頭人數十人ヲ伴ヒ來タリ自來一社ヨリ他社ニ及ヒ今日ニ於テハ上十八番社ハ云フニ及ハズ遠ク卑南蕃社ニ至ルマテ我命令ハ立所ニ便ズルニ至レリト云フ殊ニ生蕃人ノ約ニ堅キ一度命セシコトハ假令如何ナル天災地異アリト雖モ約セシ期日ニハ必ス其命ヲ果シ若シ果サレバ死ストモ歸ラザル如キ一種ノ生番魂トモ稱スベキ者アリト云フ如此我命令ノ能ク達スルニ至リシハ潘文杰ノ功多キニ居ルカ故ニ去ル一月同人ニ特ニ黃金製手環壹連ヲ總督府ヨリ賞與セラレタリ

右之如ク我政廳ニ盡ス不少赤心面ニ顯ハル且其云フ處真ニ卒直ト雖言中味フベキコト多シ今左ニ廳長ト問答ノ一節ヲ稜萃セン

問 今後汝等ハ我國良民トナリタルナレバ汝等カ宜敷ト思考スル事ハ遠慮ナク申立ベシ



答 吾等ハ蒙昧頑固事理ヲ辨スル者ニアラズ然レモ今後日本國民トナリタル上ハ是非共日本國ノ法令ニ從ハザルベカラズ然ルニ蕃民ト日本政廳ト時ニ事狀不判明ノ爲メ行違ノ生スルヲアリ故ニ之等ノ過ナカラン爲メ吾等ハ老輩到底成シ難キモ我子弟ヲ始メ蕃民一統ヘ日本語ノ教授アル様願度左スレバ吾等ハ多ク小兒ヲ有スル故他ニ卒先シテ之レヲ學ハシムヘシ云々

問 爾等ハ目下銃器ヲ携帯スルヲ禁セラレシニ付如何

答 銃器ヲ携帯スルヲ禁セラレ大ニ迷惑セリ何トナレバ日常ノ狩獵モ出來ス生活ヲ成シ難シ從前ノ如ク支那人ヨリ亂暴セサレバ決テ人ヲ殺戮セス何卒早ク銃器ヲ使用スルヲ許サレタシ  
 彼問 今回臺灣ヲ日本軍隊カ征伐セラレシニ付今後明治七年ノ時ノ如ク清國ニ還附セラレ如キヲ無キヤ先年モ大ニ迷惑セシヲ以テ

如此キヲ無カラント祈ル

答 此度ハ既ニ清國政府ヨリ割讓ノ約成立タル故ニ決シテ七年ノ如キヲナシ汝等安心シテ今後ハ一層忠勤ヲ勵ムベシ  
 彼等之レヲ聞テ大ニ得意ノ色アリ

彼蕃人ハ「チャン」入種ニ比シ正實撲直ノ精神アリ之レヨリ先キ角田少將生蕃地ヲ巡見シ生蕃ノ招待ヲ受ケ之レニ謝スル爲メ銀貨廿圓ヲ謝儀トシテ贈ラレシニ彼生蕃ノ頭人ハ曰ハク吾等大人ヲ招待セシハ金ヲ得ンカ爲メニセシニアラズ又斯ル大金ヲ受クルカ如キ功勞ヲナシタル覺ナシ後來功勞ヲ成シタルニ際セバ又之レヲ謝絶セズト途ニ之レヲ受ケサリシト傳聞シ大ニ其精神ニ感シタリシニ此日西郷氏ヨリ生蕃頭人藩文杰ニ之ノ懇篤ナル招待ニ謝スル爲メ國旗煙草菓子其他金員若干ヲ惠與セラレシニ彼藩文杰深ク謝シテ曰ハク國旗其他ハ感



謝拜受ヲナスモ金員ヲ拜受スル理由ナシ故ニ之レハ更ニ返上スト固辭シテ受ケズ其ノ氣慨アル「チャン」人種ノ及フベキニアラズ

(中略) 歸路陸行風港坊寮東港ノ各地ヲ經テ二月下旬鳳山支廳ニ着シ留マルコト前後旬日此間幸ニ各地ニ於ケル生蕃地トノ貿易ノ有様ヲ視察シ且風港并鳳山ニ於テハ幸ニモ生蕃人ノ來會スルアリ殊ニ鳳山支廳ニ來タリシハ男女凡三四十名之レカ酋長ハ三十前後ノ婦人ニシテ双手ニ限リナキ黒線ノ黥ヲ旋セリ之レ一人ヲ殺スモノハ一箇ノ文身ヲナスト云フ然ラバ之ノ婦人ハ數百人ヲ殺害セシモノナルベシ實ニ鬼神也松モ三舍ヲ避クルト云フベシ

以上各地巡回中生蕃ニ就キ彼等カ衣食住并ニ其外雜多ノ要領ヲ左ニ摘載セン

家屋。大股頭人藩文杰ノ家屋ハ例外トシテ他ノ生蕃ハ多ク竹ヲ以テ柱トシ泥土ヲ塗リ外ニ又一重ノ壁ヲ設ケ銃口等ヲ穿ツ之レ攻撃セラレタル時狙撃ノ要アルカ爲メナラン又下等土蕃ハ土中ニ穴居シ家根ハ僅カニ葦ヲ以テ之レヲ掩フ何レモ一家單獨ノ者少ナク三四軒軒ヲ列テアリ之レ一ハ強風ノ爲メト一ハ緩急事アルニ際シ互ニ相救援スルノ必要アルカ爲メナルベシ

家具。椅子机等アリ又食事ノ道具ハ大概「チャン」等ニ同シ反テ「チャン」ヨリハ清潔心ニ富ミタルカ如シ

食事。矢張「チャン」ノ如ク家内一同卓ヲ列テ共ニ團欒食事ヲ成シ一般肉食ス然レモ南部生蕃ハ十中八九吉凶判断ノ神ト稱シテ鶏肉ヲ食セス

衣服。彼等ハ別ニ衣服ト稱スベキモノナク常ニ裸躰ナリ然レモ吾等一行カ訪問セシ時ハ何レモ蕃人ノ禮服トモ稱スルモノヲ着ス上衣ハ



恰モ「チヤン」服胴衣ノ如シ下ハ巾壹尺廻リ二尺位殆ト手拭ノ如キモノ  
ヲ以テ陰部ヲ掩フ然レモ大人胴廻ノ太キ者ハ臀部ハ總テ丸出ナリ之  
ノ丸出ノ給仕人杯盤ノ間ヲ周旋ス折角ノ馳走モ目茶々ナリ  
婦人ノ衣服ハ凡「チヤン」人種ノ如シ只上衣ニ少シク差異アル耳  
裝飾。男女共耳環ヲ穿ツ習慣大ニ行ハレ頭部ハ男女トモ斷髮ノ上ニ  
恰モ羅馬「シーザー」ノ月桂冠ノ如キモノヲ戴ク婦ハ赤キ糸ナゾテ頭部  
ニ廻ラス

言語。語尾ハ何レモ消ユルカ如ク打捨タラン如キ音調ナリ同行者中  
ノ學士ノ言ニヨレバ葡萄牙語ヨリ變化セシモノ、如シト云フ

- 一 イ 二 ニ 三 サン 四 シ 五 ゴ 六 ロク 七 シチ 八 ハチ 九 ク 十 ジュウ
- 目 メ 鼻 ハナ 耳 ミミ 口 クチ 頭 カビ 手 テ 足 アシ

(カンヌバヤ) 酒ヲ飲メ

(ザマヨ) 肴ヲ喰ヘ

(マフトチフロ) 澤山満腹シタ

(マフラ) 酔タ

(マサロ)

多謝

### ○生蕃人トノ貿易

生蕃人ト貿易セントスル重ナルモノハ酒ト布トヲ持チ行キテ材木薪  
獸皮芋金瓜等ト交換ス

然ルニ茲ニ面白キ習慣ハ多ク樹木ヲ伐採セントスル時ハ其年ノ始メ  
ニ於テ進物ヲ三十對(何品ニテモ能シ)整ハ送ラサルベカラズ少ナキ時  
ハ二十五對ノ物品ヲ送ルベキ定メナリ右二十五對三十對ハ何ヨリ計  
算立ツルヤハ土人スラ知ラズ實ニ奇ナル習慣ト云フベシ

一山林。山林ハ南部ニ於テハ左マテ巨大ノ樹木ヲ見ズ蓋シ暴風ノ  
烈シキ故ナルベシ風港ヨリ枋寮ニ至ルノ間ニ於テ鬱蒼タル山林アリ  
人夫ニ料ス所ニヨレバ該山林中ヨリ洪水ノ際巨木流れ出ツルコアリ



ト云フ樟木モ多少アリト稱スト雖モ北部山林ニ比スベカラズ

第二節 各地生蕃探驗記

從來臺灣生蕃地ノ狀況ヲ記スルモノ多々之レ有リト雖モ皆其一小局部ノ狀況ニ止マリ然ラサルモ其記スルトコロ外人ノ調査ヨリ採萃セシモノ或ハ足其地ヲ踏マサルモノノ風説ニヨリ筆ヲ下シタルモノ多シ甚タシキニ至リテハ無稽ノ空談ヲ記載セシモノ少ナシトセズ前章述ブルトコロノモノ編者躬ヲ南部生蕃地ニ於テ調査セシモノナリト雖モ未タ東西北蕃ノ實況ヲ詳ニセス大ニ遺憾トセシ折柄知友某陸軍中尉大本營ノ命ヲ奉シ生蕃各地ヲ探驗スル前後數十日氏力調査ノ大略ヲ聞クヲ得タレバ左ニ記載シ以テ諸氏他日ノ參考ニ資セン

○西蕃 (西蕃ハ玉山及もりろん山以西ノ地)

蕃人住居ノ位置家屋ノ構造家具炊飯及會食等ノ景況。蕃人ノ居住ハ

河ノ附近ニシテ概テ河ヨリ二三百米突ノ高地ニ家屋ヲ設ク水ハ必ス一間餘ノ竹筒ニ入レテ貯フ總テ蕃地ノ飲用水ハ山間ノ湧水ヲ汲ミ取リシモノナリ之レヲ汲ムニ五寸位ノ竹筒ヲ以テ汲ミ一間餘ノ竹筒ニ入ル水充ツレバ之レヲ背負フテ家ニ皈リ家中ノ竹壁ニ寄セ置クヲ例トス鍋ハ唯一個アリ之レヲ以テ飯ヲ炊キ肴ヲ煮ルアリ飯ハ概テ柔クシテ殆ト粥ノ如シ之ヲ土ノ附キタル蓆又ハ籠ノ中ニ入レ更ニ其鍋ニテ肴ヲ煮兩方共熱氣ノ去ルヲ俟テ家内相集マリ會食ヲ爲ス其法飯甚タ柔クシテ粘着力ヲ有スルモノハ食指ト中指ヲ以テ汲テ之ヲ食フ其稍硬ク粘着力ナキモノハ右手ヲ以テ之ヲ食フ水及汁ノ如キハ之レヲ竹筒ニ入レ置キ右手ニテ汲テ之レヲ飲ム  
男子ノ風俗。男子ハ十歳前後ヨリ必ス革ノ衣ヲ穿ツ殆ント我陣羽織ニ似テ袖ヲ有セス二十歳前後ヨリ革ノ帽ヲ冠ス蕃人ハ一般跣足ナル



モ險山難路ヲ通過スルノ際ハ革鞋ヲ用フ是レ猪ノ一枚革ニテ製造セシモノニシテ頗ル簡便ニ出來居レリ男子ハ必ス胸部ニ一箇ノ袋アリ此袋ハ陰部ヲ蓋フト同時ニ物ヲ入ルゝ爲メナリ男子ハ總テ籐或ハ革ヲ以テ腰部ヲ緊約スルコト殆ント西洋婦人ノ如シ

女子ノ風俗。女子ノ頭ハ毛ヲ組ミテ之レヲ卷キ其上ニ黒木綿ヲ卷ク一恰モ支那土人ノ如シ一般ニ能ク喫烟ヲ嗜ム喫煙終レバ烟管ヲ頭ニ刺ス其服裝ハ上下共總テ黒木綿トス稀ニ淺黄ヲ用フルヲアリ衣ハ筒袖ニシテ胸ハ支那流ノ如キ釦留メナリ長サ短クシテ臍部ニ至ル下ハ揮ヲ用フ其揮ハ概子長クシテ中間ニ裂目アリ別ニ革ノ前垂ヲ垂ル坐スルトキハ前垂ヲ以テ陰部ヲ蓋ヒ揮ハ拂ヒテ股ヲ顯ハス男女皆同シ蕃人ノ食物。蕃人ノ耕作物ハ總テ山ノ斜面ニ之レヲ耕植ス其重ナルモノハ蕃藷、粟、木瓜、香蕉等ナリ鶏及豚ハ各家共之ヲ飼養ス河魚獸肉

ノ如キハ蕃人一般ニ嗜好ス西蕃ニ限り牛肉ヲ好マス

公館。十歳以上ニシテ無妻ノ青年夜間ノミ此館ニ宿ス晝間ハ各家ニ歸リ耕植等ヲ爲シ耕作ノ閑ナルトキハ晝間ト雖モ此館ニ來タリ種々手仕事ヲ爲スヲアリ蕃民會合ヲ要スルトキハ此公館ニ集マリ會談スルヲ例トス

物産。小楠木ヲ粉末トナシ支那人盛ニ運搬スルヲ見ル是レ線香ヲ作ル材料ナリ毎年産出數十万斤玉子又多ク産シ毎年數万斤ニ達ス豹、熊、鹿、猪皮等ノ獸皮特ニ多シ

酒。蕃酒ハ其色米ノ白水ノ如シ其味酸味ト僅カニ甘味ヲ有スあるこゝる分極メテ少ナク性淡泊ニシテ頭ニ上ラス或ハ僅カノ石灰分ヲ含ムアランカヲ疑フ此酒ハ米ヲ碎キ水ヲ入レテ製スルモノナリト謂フ

○南 蕃 (南蕃ハ牡丹社附近ヨリ卑南ニ至ル一帯ノ蕃人)



家屋ノ構造家具。家屋ノ構造ハ多ク木骨ニシテ適々竹造ノ家屋アリ  
 家具ハ鍋ノ外茶碗皿土瓶等ノ器具アリ  
 男子ノ風俗。男子ハ概テ上ニハ黒ノ木綿服ヲ纏ヒ腰ニハ陰部ヲ蓋フ  
 爲メ日本男子ノ腰卷ノ如クニシテ一方ニ縮ヲ寄セタルモノヲ用フ猪  
 撈束社附近ハ此腰卷短クシテ僅カニ陰部ヲ蓋フニ過キス  
 女子ノ風俗。ハ畧西蕃ニ同シク但シ臀ヲ掛クルニハ兩股ヲ開キ陰部  
 ヲ顯ハスヲナク概子閉チタル儘臀部ヲ掛ク  
 蕃人ノ食物。蕃薯粟米香蕉等多ク山ノ斜面ニ耕作ス大樹林ノ如キハ  
 之レヲ伐倒スルヲナク必ス木ノ皮ヲ剝キ或ハ燒キテ枯死セシメ枝ヲ  
 去リ然ル後耕植ス  
 各家共鶏ヲ飼養ス此蕃人ハ一般獸肉及牛肉ヲ嗜好ス  
 物産。藤及黒柿類多シ獸皮モ多少ナキニシモアラザルモ大森林少ナ

キ故チ以テ東蕃及西蕃ノ如ク多カラズ  
 酒。酒ハ餅米又ハ米ヲ以テ製造ス殆ント我濁酒ノ如シ而シテ其味甘  
 味ト僅カノ酸味トアリあるこゝる分少ナク深ク酒ヲ嗜マサルモノニ  
 ハ適良ナラン

○東 蕃 (東蕃ハ臺東ヨリ花蓮港附近ニ至ル一帯ノ蕃人)

家屋ノ構造家具會食。家具ハ概子竹ヲ以テ主成分トシ木ヲ用ウルモ  
 少ナリ屋根ハ茅ヲ用フ  
 家具ハ箸茶碗皿土瓶等ニシテ概子備ラサルナシ食スルハ彼等ハ一  
 般ニ木ニテ造レル匙ヲ用フ水汲ミ桶ノ如キハ木ヲ繰リ抜キタルモノ  
 ヲ用フ其構造實ニ巧ミナリ又輪ヲ入レタル桶モアリ  
 男子ノ風俗。男子ハ概子黒ノ木綿服ヲ用フ稀ニハ草服ヲ着ス其酋長  
 ノ如キハ殆ント支那服ヲ用ユルモノアリ頭ニモ亦黒布ヲ卷ク禪ハ概



子日本男子ノ腰卷ノ如キモノヲ用フ女子ノ服裝ハ西南蕃ニ異ナラズ坐スル井ハ何レモ股ヲ接シ陰部ヲ顯ハサス兩股ヲ開キ陰部ヲ顯ハスカ如キ醜体ハ唯西蕃ニ於テ見ルノミ

蕃人ノ食物。耕作地ハ概子平地ニ之レヲ作ル其種類ハ蕃薯、米、粟、香蕉ノ類トス鶏及豚ハ家毎ニ之レヲ飼養シ牧牛モ亦少ナカラズ一家ニ五十頭以上ヲ飼養スルモノアリ獸肉又少ナシトセズ特ニ鹿肉多シ魚類ハ海岸ニ多キモ波浪高キノ故ヲ以テ之レヲ捕獲スル能ハス波浪靜カナルノ日ハ網ヲ入レテ漁スルヲアリト云フ

物産。熊、鹿、豹、猪等ノ皮多シ鹿ノ子肉及豚ハ臺東第一ノ物産トス其他砂金、鐵、最モ多シ又石炭、鑛アリ銀、鑛アリ臺東ハ實ニ將來有望ノ地ナラシ。

酒。酒ハ概テ粟ヲ以テ造ル所謂粟酒ナルモノナリ其味酸味多クシテ

甘味少ナク水亦頗ル多キヲ覺フ

生蕃地ニ於ケル狀況大畧右ノ如シ然シテ各地生蕃地ノ情態ヲ一々記載スルニ於テハ到底小冊子ノ能クスベキ所ニアラズ故ニ概畧ヲ叙スルニ止ム然シテ我政府ハ生蕃人ニ對シテ如何ナル方針ヲ取ラル、ヤ目下ハ生蕃地ニ入ルヲ一般禁止シアリ然レモ新官制ニヨレバ前支那政府ノ組織ニ基キ撫墾局ナルモノヲ設ケ生蕃人トノ交易ハ總テ該局ノ媒介ニヨリ行ハル、方針ナリト聞ケリ依リテ參考ノ爲メ從前支那政府ノ設ケアリシ該局ハ如何ナルモノナリシヤヲ左ニ記述セント欲ス

○撫墾局。劉銘傳巡撫タリシ以前ハ本島第一ノ豪族林維源專ラ之ヲ管理シ來タレリ銘傳來任スルニ及ヒ維源ヲシテ之レヲ輔佐セシム邵友濂交代後ハ布政使ヲシテ督辦セシメ維源ヲシテ局務ヲ輔佐セシム



臺北府管下ニテ本局ヲ生蕃地出入ノ要路タル大嵙崁ニ置キ其分局ヲ  
 双溪、五指山、三角湧、南庄及榮甌ノ五ヶ處ニ設ケシム其事務タル蕃民ヲ  
 撫化シ荒地ヲ開墾シ又一方ニ於テハ臺北城内ニ設置シタル西學堂ニ  
 蕃民ノ子弟ヲ招キテ之レニ教化シ之レヲシテ蕃人ヲ説カシムル用ニ  
 供セリ又一方ハ住民ニシテ蕃地開墾ヲ企テ交換ヲ欲スルモノアルト  
 キハ之レニ護照手形ヲ交付シテ生蕃地ニ入ラシメ開拓セシム又之レ  
 ニハ護衛トシテ熟蕃ヲ附ス之ノ熟蕃ニハ毎月食料トシテ洋銀三弗其  
 蕃人ニハ六弗乃至八弗ヲ與フ  
 從來生蕃地方ノ產物ハ蕃民携へ來タリ土民ト交換ス所謂物々交換也  
 土民中種々詐偽ヲナシ生蕃人ヲ欺クノミナラズ又火藥銃器等ヲ交換  
 シ爲メニ施政上大ニ不便ヲ來タスヲ以テ蕃人ヨリノ輸出貨物ハ適宜  
 ニ交換スルヲ禁シ總テ官廳ニ於テ立會交易スルヲトセリ

今回設ケラレタル撫墾局モ殆ト右ノ如ク一旦放任主義ヲ取ラントセ  
 ラレシモ第二ノ支那人ヲ生スルノ恐アルヲ以テ茲ニ今回新ニ規定ヲ  
 設ケ生蕃地トノ一般ノ貿易ハ總テ官衙ノ媒介ニヨルコト、セリ

第三節 生蕃各地ニ於ケル言語

生蕃地ニ於ケル言語ハ其種族ノ異ナルニ從ヒ差別アリト雖モ大畧東  
 西南北ノ四大別ニ出サルヘシ今左ニ四種ノ生蕃語二百餘言ヲ撰ヒ別  
 ニ臺灣土語ヲ附シテ他日勿忙生蕃内地ニ業ヲ起サントスル人士ノ參  
 考ニ資セントス

○臺灣ニ於ケル言語

數 字	臺灣土語	東 蕃 語	西 蕃 語	南 蕃 語	北 蕃 語
一	チ	チャッチャイ	チヨニ	イッター	コト
二	ヂー○マン	ツウチヤ	ルウーシヨ	ルサー	サイ サイン サージン











男	女	父	母	夫	妻	兄弟	姉妹	小兒	青年	老人	朋友
ナン	ニョー	ペー	ブア			ビヤンテイ	チーポイ	ギンナー	チヨラン	ローラン	ペイヤンユーツ
バイナヤン	ババヤン	チマ	チーナー	バイナイ	ババヘイ	カ	カ	ワウワ	バンサーラン	マテダン	ニナレバレン
ハチチエン	マメシピン	アンモ	インノ	アツチヨウウ	全	チハイバー	チハイバー	ユーチウユー	サシモシク	マメタイ	アーフンク
ウカライ	ババヤン	カーマ	キーナ	バーリヤウ	バヤン	カーカ	カーカ	ニヤエン	カチチボン	グーロン	カーレイ
マリクイ	カ子リル	ヤウ	ヤヤ	マリクイ	カ子リル	カムスーヤン	シスアイ	カカイ		マンキン	ルピユン

酋長	親族	天地時候	天	日	月	星	雲	雨	風	雪	雷
チンヤン	チンシヤ	臺灣土語	チユンヌ	ジッターウ	グユッホー	シヨーン	フウン	ホチー	ホターン	セブ	ライ
アヤワン	ニヤンバレン	東蕃語	ランゲ	カタラ	プラン	テチル	クットン	ウフツ	バリ	コレキーフ	ドロ
ペイチンシー	シエモエンマー	西蕃語	エングツチャ	ヒーエ	ホヤフイ	チヨンヨーハー	チンイムチンムイ	ムウチウ	ボエホー	ユーホー	アケグーチャ
スカーロー	リヤーマン	南蕃語	カリフレバン	カーターフ	ケイリヤン	ヒチヨカン	カリプース	コーシヤイ	ウワレイ	ヤージツク	ゾ
ゲル		北蕃語	カーヤル	ワーウイ	ウヤチン	ウインガ	エルム	クアラフ	バイフイ	ハラクイ	ウイスイ



朝	明後日	明日	一昨日	昨日	今日	暑	寒	北	南	西	東
ツアーキー	ミナージ	ミンテン	チュンヂ	チンデン	キンテン	チヤヨ	クワン	ペイ	ナム	シー	トン
ツマバン	カラロアナワレ	ノシマナン	タシマコーワリ	ダマン	モイナワリ	ソヤツ	リウダク	マカアミ	マカウテンブル	マカラヤ	マカラチ
ターセーチンナ	ホーセース	ホーフチマー	チーセース	チーフアンマー	マチインヌー						
ターカジヤマン	カーシヤマン	シーカチヨロ	ターテヤー	タシヨニー	パーチユシユ						
サ、ン	カワー	サーサ	カワヌコレフ	ハイラ	サウニ	マキルフ	ハイヤ				ワンクアーウイ エメンクワウル

石	砂	土	地理部	明	今	夜	日	晝
チヨチ			臺灣土語	年	年	半	暮	間
バラツサ	ブートウク	アール	東蕃語	カウトルアメ	カナチナアメ	カナアメ	アルムン	バタ、ノナカタチ
ホアウト	ヨレプアー	チユラーア	西蕃語	トシソバ	アイター子	トンソバ	フエギンナー	テツポーシー
カーチラーイ	ウーターシ	デーホ	南蕃語	チアイベ	シーカルーサ	ツーチヤベ	カズメウテ	アキカタクワタウ
ポトノフ		ラヒヤール	北蕃語	アダカカワス	チヒチカワズ	カワス	シカウイキ	サーウケ シカヴエー タクイワゲ マハガン



家	船	帽	衣	頭巾	耳環	頭飾	毛布	刀劍	槍	弓	矢
キヤウ	シヤンパン	ポウ	イホー	ヒーカウ		ヂヨガ	ハアモイトウ				
ウルマ	ツダン	カブン	キビン	リポウト	リ、ン	パロヅル	ヒロヅン	タヅチ	グータン	ラヤラン	バクナン
エンモ	アパン	チヨーポ	ルンユ	チヨーポ	シポユウ	シユユウ	ナイユウ	ポヤーベ	メンキユ	スーユ	ツユーチユ
ターパーウ	ホーワー	イートン	タラパーウ	ビーケン	ダウトチ	プユキヤン	チヤーキ	チアタル	ワカブ		
マーサル	カース	カボ	ルグス	カイガイ	カーガン	ララサ	ブテユ	ババウテウク	セラウカイ		

食器 家具 器具	地震	井	橋	平地	道路	島	海	川(溪)	山	火	水
臺灣土語		チーン	キヨウ		トロー	トウ	ハイ	ポー	サン	ホー	ツイ
東蕃語	ギミンギン	ダブ	カヤカエ	マラヤリナケル	ダラン	サヤカナタル	イヌ	イナヤン	リナン	アパイ	ナイ
西蕃語	モトユビ	ヨイチーバ	ヒヤハチイチャ	ボナンテチ	シヨイチンナ	ナ、キヒヤ	エツチツプ	チヨイハウ	フーロンク	プユ	チユーモ
南蕃語	チユノ	ラーコ	ラアレ	リイシツク	キヤラン		ヤーフツク	バーナー	カシユナカレ	シヤポイ	サリヨム
北蕃語	パウパウ	グイリンケシヤ	ハウゴ		トケ		ルリエム	エクダ	ラヒヤール	ブニツク	グシア



銃	紙	酒	米	飯	鹽	茶碗	動物	狗	猫	水牛	豚
チヤンヤア	ツオア	チユー	ミー	ペミーホン	ヤム	臺灣土語	カネ	子ヤウ	ツイキョー	チユト	
コワン	カドボ	ラチ	アブラズ	マトロー	ホム	東蕃語	スワン	ニヤチ	スイクウ	リチン	
スーナーボーシウ	サイプトコー	レミー	バイ	ボンヌー	シユウ	西蕃語	ウアウー	ニヤウ	ウワーチモ	フユツウ	
クワン	カーツボ	ハバ	ワーツ	キンナーリウケ	カーテウ	南蕃語	ワーツ	ニーヤウ	ゴーン	リイサ	
パートス	ヴスラビアル	コアウ	アアフ	マミ	チモ	北蕃語	クシール	ニヤウ	カチン	バブイ	

鳥	鶏	鴨	魚	柑橘	芭蕉實	芋	蕃薯	木	草	花	葉
チヤウ	クイ	ア	ヒユイ	カンナ			フワンチユ	ツーパーモク	ツアー	ホア	ヨオ
アナム	トロコ	マイマイ	ブーラチ	アセロー	ボツボツ	ブーエル	プロシ	カチイ	チャルン	アブツ	ピラ
ジヨツム	タイチーワ	ハナハナ	ヨシク	フヂーチー	チンニーム	ウーチユイ	フウーユ	エビー	ソウソウ	ペーブンナイ	チャエ
カヤカヤム	ヨリコ	マイマイ	チユカツ	ワツチヨク	ウセボイ	ウワイサ	フラウシ	ガーシウ	ラヒヤ	サキリウ	アツンヤウ
パタル	シバブン	アラウ	グイタウク	ゴーコイ	サイワイ	ガヘ	カウニウク	カワン	パバ	アウアチ	



眠	食	無	有	行	去	來	縁	青	黄	赤	白
ミン	シー	ムー	ユー	クウー	チュ	ライ	リエンシュ	ラレシユ	ウーンシユ	アーンシユ	ペイ
メルン	アロンカン	イテン	ウラ	クヤカワン	マボロ	アラモ	マロロ	ムラアツ	マロロ	ホラホラ	ブルナン
ホヨボイ	ボンヌ	ウーカ	パント	ヒーヤパー	ハチアーチユ	ミーロー	ナロエンホーバ	エンホーバ	ホッチーヤー	チンユーヤ	フイチーヤ
チユレオンガリ	カンヌ	ヌツカ	ウザイ	バアイ	パーナ	リマルエン		チヤキヤ	クリバリパイ	コジジン	ポータカイリ
マヒ	マレ子ツク	ウガツト	キヤ	カゲ	ムサ	モア		マタシツク	マヒビシ	マカリヨ	バルクイ

黒	悪	好(善)	美	舊	新	雑部	子	竹	根	枝
チーシユ	パイ	ハー	ビ			臺灣土語	チエーテンナー		クチン	シ
フルラン	サラマルモ	イナバ	ブライ	マルマン	ブカラ	東蕃語	チカエ	バシカチ	アリレンバ、	サアーツ
クワラガ	クウシヨ	ヘンモノ	ヨンフ	ノナーチ	フワイバー	西蕃語	ウーエ	ピウチヨキレナイ	ツツトシー	ユツンヨウウ
アチヤカチヤラ	ラクヤ	ラーカー		シーツカヤレ	リガリカチ	南蕃語	ユーワイ	カバヤレ	チヤラ	カープ
マカルフ	ヤツケ	ブラウク	ツムラン	ビラウク	ユーカー	北蕃語	コアイヨーフ	リマ		ガーミル



遠	短	長	小	大	後	前	右	左	備	我	言辭門	臺灣土語	東蕃語	西蕃語	南蕃語	北蕃語
フー	デー	トン	シユウ	トア	ムイアウ	ダウチユン	ツチ	イユ	ニー	ウアー		イレユ	アチ	ウウ	テヤアン	クージン
アダウイル	ラカテイ	タツラチ	マキツン	マイラン	リ克蘭	ゴワヤン	タロワラン	タロエリ	イヌ			イヌ	チミシヤトイモツ	チイートイモツ	チヤイナバン	イス
チヨブヒ	ナニ、ヒウチ	タイチボ、ヒ	ホコーシ	カウキレミー	ウーワフエイン	ムウヨ	チイートイモツ	チイートイモツ	ウウ			チイートイモツ	チイートイモツ	チイートイモツ	チイートイモツ	チイートイモツ
チエーシマシヤ	リーケツチ	ラーロツチ	チヤク	チヤカーチヤ	パーシヤリコーン	チヤイカヤウ	チヤイカヤウ	チヤイカヤウ	チヤイカヤウ	チヤイカヤウ	チヤイカヤウ	チヤイカヤウ	チヤイカヤウ	チヤイカヤウ	チヤイカヤウ	チヤイカヤウ
タイヤツク	ラツツン	カルエフ	チクイ	ヤヴァ	ソロー	ヴェライン	ヴェライン	ヴェライン	ヴェライン	ヴェライン	ヴェライン	ヴェライン	ヴェライン	ヴェライン	ヴェライン	ヴェライン

第七章 樟 腦

低	高	少	多	近
テイ	クワン	シヨ	トウ	キーン
サバサバ	アサト	サンマ	サール	アダロウブ
タウチユン	ベツペ	カクウテイヤ	マアンイ	アンモチヨフロ
ザレシマン	ヤーババウ	ローカ	リイヤウ	ロンゲトン
ラヒヤール	ワグエツト	チクイ	ビシユ	サウウエ

左ニ記載スル臺灣樟腦ノ調査ハ總督府殖産部長押川則吉并ニ部員原  
 熙兩氏ノ調査セラレタルモノ并ニ口話ニヨル  
 一樟腦ノ起原。樟腦ハ本島産物ノ重要ナルモノニシテ年々一百  
 万圓餘ノ輸出額ヲ有シ將來尤モ有望ノ事業ナリトス而シテ其製造ノ  
 起原タル文献ノ徵スヘキナシト雖モ信スベキ土人ノ言ニ據レハ康熙



初年鄭成功カ臺灣ヲ領セシ時製造方法ヲ日本ヨリ移傳シタルヲ以テ  
 嚆矢トスルカ如シ其後同治年間ニ宮保(太子太少保)沈某等前後來島セ  
 シ頃ヨリ稍ヤ盛運ニ向エリト光緒十三年劉銘傳カ巡撫タリシ時官資  
 一万圓ヲ給シ富商陳某ニ命シ大嵯炭地方ノ樟腦製造人等ニ之レヲ貸  
 與シ其業ヲ獎勵シタリ而シテ貸與資金還納方法タル期限ヲ三ヶ年ト  
 シ無利息月賦トセリ此期間中ハ樟腦官買ノ制ヲ立テ製造人ヨリ出ス  
 所ノ樟腦代價ヨリ差引計算セリ當時輸出價格ハ三十圓内外ナリシモ  
 官買價格ハ百斤十二圓ナリシト云フ  
 同十五年中路統兵林朝棟。獨人「ブウトレル」ヨリ資金四万五千圓ヲ借  
 入レ十三年ノ法ニ倣ヒ以テ地方ノ製造人ニ貸付シ樟腦ノ一手販賣ヲ  
 ナシ「ブウトレル」ヲシテ之ヲ海外ニ輸出セシメタリ其レヨリ漸次樟腦  
 製造人増加シ鍋數四万餘ニ達セリ翌十六年英商瑞記洋行ナルモノ一

手專賣ノ弊害アル所以ヲ北京政府ヘ申告シタルノ結果遂ニ自由賣買  
 ナ公許シ防費即チ製造稅ヲ賦課スルコト、ナリ益々旺盛ニ趣ケリ  
 一樟樹產地。樟腦ハ全島ニ自生スルモノ西半部ハ平地多ク且開墾  
 シ悉セルヲ以テ現時ハ殆ント皆無ニ屬シ東半部即チ蕃地ノ森林ヲ以  
 テ主產地トナス而シテ大嵯炭地方ハ大樹巨木ニ富ミ其大ナルモノニ  
 至リテハ根際ノ直徑十尺乃至十二尺ニ至ルモノアリト云フ其他苗栗  
 雲林埔里社宜蘭等ノ各地亦多ク之ヲ産ス蓋シ大嵯炭ハ從來盛ニ製造  
 所ヲ設置セシト雖モ蕃人ノ出沒常ナク動モスレバ襲撃ヲ加フルカ爲  
 ノ近時苗栗地方ニ増設シツ、アリ  
 大嵯炭近傍樟腦產地ノ重ナルモノハ獅里興獅頭驛大東河五指山加納  
 排馬武督ニシテ又樟腦ノ集散地ハ左ノ如シ

- 大嵯炭
- 南庄
- 後壠
- 中港
- 苗栗
- 大湖
- 單蘭



以上各地ノ樟樹ハ皆樹木蔓草ト雜生シ先ツ通路ヲ開クニアラザレバ進入シ能ハサルノ鬱林ヲナシ其面積樹種材積ノ如キ得テ探知スベカラズ

一樟樹ノ伐採及樟腦製造。樟樹ハ蕃地ノ山中ニ産スルヲ以テ之レヲ伐採スルニハ先ツ蕃語ニ通スル客人若シクハ熟蕃人ヲ僱ヒ樟林ノ所在及其多寡ヲ調査セシメ然ル後會長ニ其意ヲ通シ樟樹伐採ニ對スル報酬期限等ノ約ヲ定ムルヲ常トス報酬ハ鹽、布、牛、豚、火藥、鉛等ニシテ此等ノ物品ハ後日モ亦時ニ會長ノ求ニ應シテ與ヘサルベカラサルナリ而シテ伐採後ノ地面ハ之レヲ蕃人ニ還附スルノ例トス若シ其土地ヲ還附セザレバ忽チ紛議ヲ生シ不測ノ禍ヲ醸スコトアリト云フ一樟腦ヲ製造スルニハ會長ト樟樹伐採ノ契約整ヒタル後適當ノ場所ヲ

撰定シテ製造所ヲ新設シ腦務局ニ届出テ検査ヲ請ヒ始メテ製造ニ着手ス製造人ハ本島ニテ腦戶ト云ヒ其頭人ヲ腦長ト云フ多クハ山丘一帯ノ客家人ナルヲ以テ營業者ハ腦務局或ハ分局所在ノ地ニ住居シ又ハ代人ヲ置キ大抵左ノ三法ニ準據セリ

一、製造人ニ前金ヲ渡シ道路ヲ開鑿シ製造所ヲ造ラシメ其製出スル樟腦ヲ一手ニ買受クル事

但シ道路開鑿費ハ樟林ニ密生セル雜木ヲ伐リ開キ及製造所ヨリ近傍便宜ノ道路ニ通スル樟腦ノ搬出等ニ供スルモノニシテ其費額ハ遠近廣狹ニヨリ一定セサルモ百圓乃至百五十圓ヲ費スヲ普通トス建築費ハ木造、竹造、藁造等ノ別アルモ一竈ヲ設クルモノニシテ鍋其他附屬品ヲ合セ十八圓乃至廿五圓ヲ要スト知ルヘシ

二、製造人ニ金員ヲ貸與シ毎月幾何ノ樟腦ヲ仕送ラシメ其代金中



ヨリ幾分ヲ差引キ返金ニ充テシムルコト  
三、自由賣買ヲナス

右ノ内製造所ハ勿論資本家ニ屬シ且該法ニ據レバ稍ヤ廉買スルノ利アリト雖モ亦往々感情ノ衝突ヨリ製造場ヲ破壊セラルトノ危険ヲ免カレズ故ニ若シ製造人等ヨリ生計費及其ノ他雜費ノ貸與ヲ請フアラバ事情ヲ斟酌シテ之レニ應セサル可カラズ而シテ其返金ハ樟腦代ヲ以テ差引クノ習慣アリ概シテ客家人ハ蒙昧頑固ニシテ事理ニ通セサレバ凡テノ貸金ハ無利息トシ取引ハ現金ヲ以テセサレバ紛議ヲ惹起スコト屢々ナリト云フ  
久シク樟腦製造ニ從事セル土人ノ經驗ニ據レバ竈製造及其他ノ費用トシテ先ツ腦長ハ一竈ニ付金卅圓ヲ貸附シ一ヶ月三圓宛十ヶ月賦ニテ返却セシメ日本風ノ竈ナレバ金廿圓ヲ貸附シ一ヶ月二圓宛十ヶ月

賦ニテ辨濟セシムト而シテ此金額ハ彼等カ持來タル所ノ樟腦ノ代金ヲ以テ差引スルヲ法トスレトモ殆ント満足ノ結果ヲ得ルコト難シ且ツヤ蕃人ノ酋長ニハ約束ノ當初ニ於テ給與スル牛及諸雜品ノ外ニ竈一份ニ付キ毎月一圓六十錢ヲ與フト云フ然レモ此金額ハ通辨人ノ手ヲ經ルカ爲メ或ハ彼ノ貪取スル所トナルモノ亦少シトセス  
樟腦製造所ハ一箇所ニ竈五六十ヲ備フルヲ普通トシ其尤モ盛ナル所ハ百乃至貳百ヲ備フ本島ニアリテハ此竈ヲ稱シテ腦灶ト云フ而シテ一腦灶ハ鍋十箇ヲ設ク又腦灶ヲ數フルニ一份二份ト呼ビ鍋ヲ算スルニ一粒二粒ヲ以テス一份ハ普通十粒ノ鍋ヲ有スルモ或ハ又多少ノ増減ナキニアラズト云フ近頃日本風ノ製造竈ヲ築ケルアリ之レ兩三年前本邦ヨリ渡臺シ一時樟腦製造ニ從事シタル職人アリシニ起因スルナリ